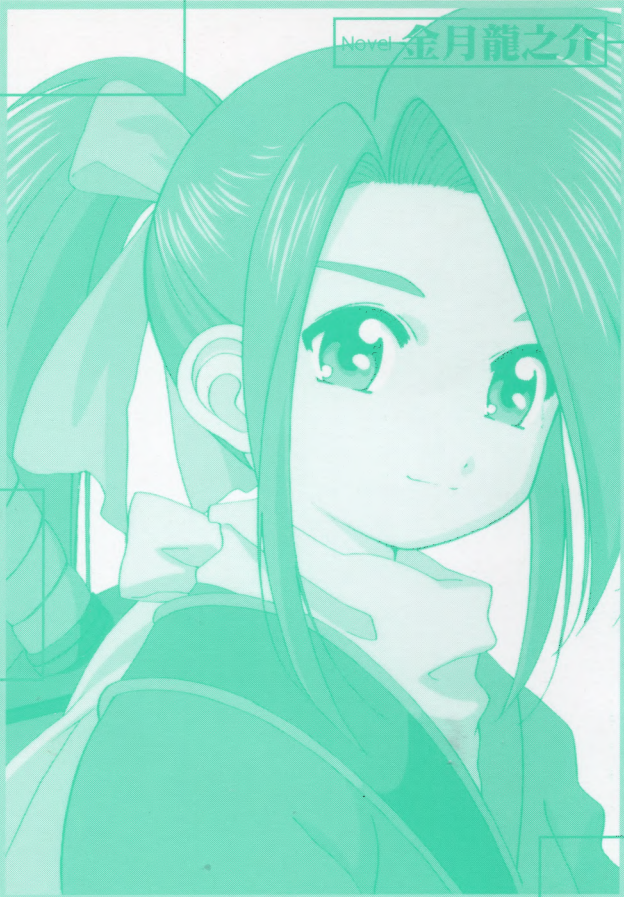
Movic Game Collection 18

Novel 金月龍之介

# テイルズオブファンタジア
## 魔剣忍法帖

It is now the year 4355
the evil King Dhaos has been defeated and the world is moving toward recovery.
The young ruler Suzu Fujibayashi is asked to search for the Sword of Time, which was sealed in the world of the past by Klarth.
How will the ancient heroes stand up to this conspiracy that spans space and time?

魔王ダオスが倒され、世界が復興へと向かうアセリア暦4355年。若き頭領藤林すずは、過去の世界でクラースが封印したはずの時間の剣捜索の任を依頼される。世界を包む時空を巡る陰謀に、かつての英雄達はどう立ち向かうのか!?人気RPG「テイルズ オブ ファンタジア」究極のノベライズ!!

Movic Game Collection 18

It is now the year 4355
the evil King Dhaos has been defeated and the world is moving toward recovery.
The young ruler Suzu Fujibayashi is asked to search for the Sword of Time, which was sealed in the world of the past by Klarth.
How will the ancient heroes stand up to this conspiracy that spans space and time?

ムービックゲームコレクション 18

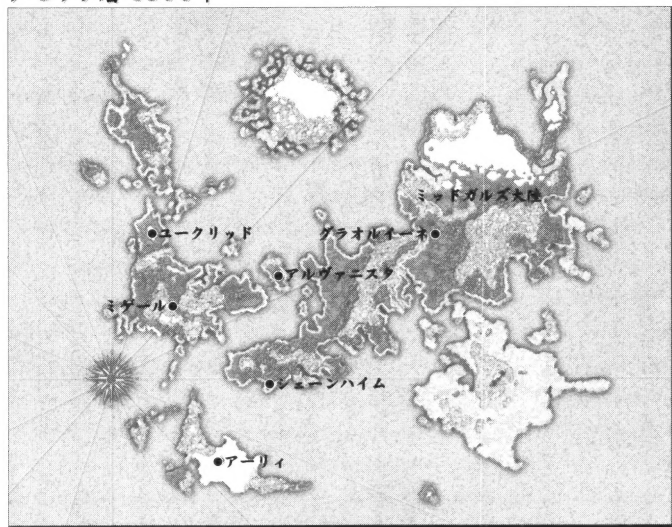
# テイルズ オブ ファンタジア
## 魔剣忍法帖

文　◆金月龍之介
原作◆株式会社ナムコ

MGC

イラスト　松竹徳幸

# テイルズ オブ ファンタジア 魔剣忍法帖

## アセリア暦4355年

<登場人物>

| | |
|---|---|
| ○藤林すず | 魔王ダオスを倒した英雄のひとり。<br>伊賀栗流忍術を使う少女。 |
| ○アーレス | すずと旅を共にする剛剣士。<br>ミッドガルズの首斬り役人。 |
| ○ファルケン | すずと旅を共にする少年。法術の使い手。 |
| ○藤林乱蔵 | すずの祖父。先代の伊賀栗忍軍頭領。 |
| ○リヒャルト | 治安維持連合軍、ユークリッドの指揮官。 |
| ○ルーングロム | 治安維持連合軍、アルヴァニスタの指揮官。 |
| ○クレス＝アルベイン | 魔王ダオスを倒した英雄のひとり。剣士。 |
| ○ミント＝アドネード | 魔王ダオスを倒した英雄のひとり。法術師。 |
| ○アーチェ＝クライン | 魔王ダオスを倒した英雄のひとり。魔術師。 |
| ○クラース＝F＝レスター | 魔王ダオスを倒した英雄のひとり。召喚術師。 |
| ○チェスター＝バークライト | 魔王ダオスを倒した英雄のひとり。弓術使い。 |
| ○ワイルドカーズ | 傭兵チーム。キング、クイーン、ジャック、ジョーカーの４人から構成される。 |

たびのおわり

――結局のところ、〈大いなる実り〉とはなんだったのだろう？
世界樹ユグドラシルを見上げながら、すずは思った。

魔王ダオスが渇望した世界樹の〈実り〉。
それを得んがために、魔王は時間の流れを遡行し、人類の歴史を変えようと目論んだ。
そして、傷つけられた歴史が放った悲鳴が、様々な時代から戦士たちを呼び寄せた。
激戦に次ぐ激戦。
いま、すべては終わった。
魔王は倒れ、戦士たちはその役目を終えようとしている。
マナが、世界樹の幹に沿って螺旋を描いて立ち上る。その様を見つめて、すずはいま思う。
結局のところ、〈大いなる実り〉とはなんだったのだろう？

ユグドラシルは黙して語らない。
ただ風が優しく、豊かに茂った木の葉をさざなみのように揺らしているだけである。
すずは仲間たちに――同じく無言のままユグドラシルを見上げている五人の戦士たちに視線を移した。
剣士クレス＝アルベイン。
法術師ミント＝アドネード。
召喚師クラース＝F＝レスター。
魔術師アーチェ＝クライン。
弓術使いチェスター＝バークライト。
彼らがいまなにを考え、感じているのかを、すずはまるで自分のことのように理解することができた。
長い戦いの旅が、すずと彼らをひとつに結びつけていた。各々の個性が――クレスの凛々しさが、ミントの優しさが、クラースの冷静さが、アーチェの無邪気さが、チェスターの皮肉っぽさが――いっしょくたになった一個の人格。そのなかに自分が含まれていることを、すずは染みいるような幸せとして全身に感じていた。
自分が世界という大きなものの一部であること。

すずは五人の仲間たちを通して、それを理解したような気がしていた。伊賀栗の里にこもり、修行に明け暮れていたかつての自分。自分は自分であり、世界は世界であったあの頃には想像もできなかったことが、いまでは当たり前のことのようにわかる。
ともに泣き、笑うことができる誰かが、どこかにいること。
それがどれだけの救いとなるかということを、すずは知ったのだ。
なのに。
なのにいま、なぜか仲間たちの姿は、霞（かすみ）を通したかのように遠く見える。
ふれあうくらいの隣に立っているのに……呼吸だって感じられるくらいの隣に立っているのに、なぜなのだろう？　魔王との死闘を終えた安堵が、気持ちの焦点をぼやけさせているのか？　使命を終え、本来ならばこの時代には存在するはずのない彼らの姿から現実感が剥離しつつあるのか？　あるいはもっと単純に、自分の目にうっすらとにじみはじめた……涙のせいか？
「――ここでお別れですね」
すずはうつむいていった。
仲間たちがいっせいに自分を見るのがわかる。
つらい。

けれども、誰かがいわなければならない言葉なのだ。

ここ、アセリア暦四三五四年は、クレスたちが生きる時代ではない。

彼らには彼らの時代があり、そこには彼らの生活がある。大切な人たちが待っている。

＜時間(とき)の剣＞を使って、彼らはそこへと帰っていく。そうするのが正しいことであるし、当然のことでもある。

（なんだか不公平だな）

すずは思った。始まったときと同じように、自分の意志とは無関係に旅は終わろうとしている。運命は一方的に自分を渦の中に巻き込んでおいて、用済みとなった途端どこかに放り出そうとしている。それが、ひどく不公平に思えた。

「さようなら、みなさん」

それでも自分がいわなければならない言葉なのだ。

「わたし、泣きません。みなさんとは笑顔でお別れしたいですから」

すずはそういって無理に笑顔を作った。

チェスターがなにかをいおうとして、言葉を飲み込んだのがわかる。アーチェがぽろぽろと大粒の涙を落として抱きついてくる。クラースは腕を組んでうしろを向き、ただ黙っている。クレスとミントは優しくほほえんでいるが、それが別れをこれ以上悲しく彩らな

いためのつくりものであることがわかる。
（わかるのも、いいことばかりじゃないな）
すずは思って、猛烈な勢いでこみあげてくる涙を必死にこらえた。

＊＊＊

時空転移の光が消えると、すでに仲間たちの姿はなかった。
先ほどとなんら変わることなく、世界樹だけがそこにたっている。風が、沈黙の空間を撫でて通り過ぎてゆく。なにごともなかったかのような静寂が、あたりを満たしている。
でも、あったのだ。
消えてしまったけれど、ここにはなにかがあったのだ。
手に触れて確かめられるくらいしっかりとした思い出が、すずのなかにはあった。笑いあう声を、言い争う声を、励ましあう声を、いまでも耳の奥に聞くことができた。
それでも旅は終わってしまった。
終わったのだ。
すずの目から、ついに涙がこぼれおちた。一度あふれてしまえば、もう止めることはで

きなかった。
——泣きたいときに寄りかかる胸くらい、まだ貸してやれると思う。そうだろ？
そういってくれたチェスターも、もうここにはいない。
この旅は、自分がひとりぼっちではないことを理解し、そしてまたひとりぼっちに戻るための旅だったのだろうか？　そこになんの意味があるというのだろう？　不公平だ。こんなの不公平すぎる——。
「すず」
穏やかで深い声に、すずは振り返った。
そこには懐かしい顔があった。藤林乱蔵を先頭に立つ、数十人の伊賀栗の里の忍者たち——ほほえみながら、みなが優しい目ですずを見つめている。その笑顔と瞳を目にして、すずは思った。
（そうだ。わたしはまだ、ひとりぼっちなんかじゃない）
すずは仲間たちのもとへ、一歩を踏み出した。
「よくやったな、すず！」
「かっこよかったよ、すずちゃん！」
「さあ、帰ろう！」

「帰ろう。伊賀栗の里に。わしらの家に！」

去り際に振り返り、すずはもういちどだけユグドラシルを見上げた。そしてつぶやいた。

さようなら。

さようなら、みなさん、と。

【第一部】

朧雲（おぼろぐも：雨がふる前兆）

# 第一章　首斬り男

# 一

グラオルイーネ。
大陸中央に位置する首都ミッドガルズ、その西部に広がる湿地帯をこう呼ぶ。
年中深い霧に覆われ、陽光射さず、さらには朽ち果てた古代の遺跡までもが点在するこの地は、住む者はおろか、近づく者すら少ない不吉な場所としてミッドガルズの人々に知られている。
そして、処刑場としても名高い。
ミッドガルズ大陸で重罪を犯した人間は、司法によって裁かれ、この陰鬱(いんうつ)な地に引かれてくる。
処刑は、主に斬首をもって行われた。頭部と胴体を切り離すことによって、犯罪者の魂はすみやかに――生者に害なすことなく冥界に引きずられていくと信じられていたからであり、また、これがもっとも効率的な処刑方法であったからである。
なにしろこの時代、多い時には年間二百人あまりがこの地で処刑されたと『アセリア・クロニクル』には残されている。ダオスとの戦いに終止符が打たれ、それまで地中に潜伏

していた芸術と文化の才能が一気に開花した泰平の時代として知られる四三〇〇年代後期であるが、同時に、戦後の混乱が人心の荒廃を加速させた時代でもあったのだ。ゆえに治世者は、一罰百戒の体制で犯罪者に臨む必要があった……。

二

アセリア暦四三五五年、冬のことである。
今宵もまた、グラオルイーネの大地は咎人（とがにん）の血を吸おうとしていた。
吸い込んだ空気が、氷粒となって肺の壁にこびりつきそうな冬の夜である。
月はない。
霧が出ている。
そこに、十数名の人間が、敬虔な巡礼者のようにひざまずいている。
無論、敬虔であろうはずがない。それが証拠に、ずらり横並びに連なった彼らの首と首は、頑丈なロープで数珠のように連結されているではないか。
家畜のようにつながれた彼らこそが今宵の主役——死刑囚の群れなのだ。
その年齢や性別には、奇妙なほど統一感がない。

白髪の老人もいれば、まだ顔にあどけなさを残す娘もいる。
そこに敢えて共通項を見いだそうとするならば——目だ。彼らの目には、ぎらり一様に抜き身の刀のような凄惨な光が宿っている。炎のような怒りが燃えさかっている。
それにしても、これがまもなく命を絶たれる人間の目であろうか？
そこには、見事なまでに恐怖や惑いの色はない。ただ強烈な意志だけが、空を裂いて飛ぶ矢の如き鋭さをもって、ひとりの男に注がれている……。
「——処刑人はまだか？」
その男がうめくようにいった。
罪人たちの憎悪の視線を全身に受け、さすがに声には居心地の悪そうな響きがある。
男は、高貴な身分の人間がこうした場所でしばしそうするように、仮面をかぶっている。
そのため表情を知るすべはないが、仮面の下には、おそらく苦虫を噛みつぶしたような顔が隠されているはずだ。
男は豪奢な防寒マントをいらだたしげにひるがえし、隣に立つ兵士にもう一度叫んだ。
「おい、首斬りアーレスはまだか！」
「しばしのお待ちを。さきほど彼奴の小屋に伝令の馬を飛ばしましたので、そろそろかと——」

その声が合図であったかのように、蹄の音が厚い霧の向こうから聞こえてきた。
続いて二頭分の馬のいななきと、どうどうと馬をいなす声が聞こえ、しばしの間をおいて軽装の兵士が霧の中から駆け出してきた。服に付いた紋章から、ミッドガルズの兵士であることがわかる。
「お待たせいたしました、リヒャルト様」
「遅いッ！」
一喝、リヒャルトと呼ばれた仮面の男は、霧の向こうに茫洋と立つもうひとりの人影の名を叫んだ。
「アーレス！」
「――あいよ」
ゆらり、と霧の中から巨大な影が歩み出た。
男である。
顔つきから見るに、年の頃は二十台後半であろうか。だが、その全身には年齢を越えた重厚の気がみなぎっている。
でかい。
二メートルを遥かに越える。

鋼鉄のかたまりを無造作にがっちりと打ち抜いたら、偶然人間のかたちになっていた。見る者にそんな印象を抱かせる男である。
名をアーレス。下の名は誰も知らない。
その異形に気圧され、仮面の男は思わず噴出した怒気をおさめかかったが、ぐっと背を正し、アーレスを怒鳴りつけた。
「今晩、この時間に行くと連絡をしておいたはずだぞ！　この寒空の下、かくのごとき不浄の場所に長々と待たせるとは……木っ端役人の分際で貴様、思い上がるのも程々にしろ！」
「いえね」
アーレスは悪びれずにいった。
「おっしゃるとおりのこの冷えようでしょう？　節々がきしみやがる。で、外に出るにはちびっと潤滑油がいるんでさあ」
なにやら呂律の回らぬ口調である。いわれて見ればアーレスの顔は赤く、吐く息はアルコール特有のにおいをはらんでいる。仮面の男は、あまりの怒りに硬直し、ぎりぎりと声を絞り出した。
「貴様……飲んでいるな？」

「そう責めなさんなって」
無礼な、とミッドガルズの兵士たちが色めき立った。総数十余名、その殺気が風となってアーレスに吹きつける。
しかし、アーレスはそんな怒りの気配をぬらりといなし、
「――なんなら、お前さんがたが斬るかね？」
と薄笑いを浮かべていい放った。
仮面の男をはじめとする全員が、うっ、と鉄丸を飲み込んだような声を漏らして沈黙した。
アーレスの笑いに含まれていた何か――怒り心頭の仮面の男を凍り付かせるほどの何か、触れただけで死に至る猛毒じみた何かが、全員を呪縛したのである。

三

首斬りアーレス。
このグラオルイーネ刑場のあるじである。
もっともあるじといっても、もともとアーレス一人きりの仕事場ではあるが――すなわ

ち、この処刑場の管理、および罪人の斬首を受け持つ役人が彼、アーレスなのである。
一応、ミッドガルズ王宮に属する役人ということになっている。
とはいえ、端っこも端っこ、最下級の役人である。
相手が罪人とはいえ、さすがに人間の首を切り飛ばすような仕事はなり手がない。ゆえに、〝役人〟という肩書きをつけて、なんとなく自尊心を満足させてやろうという程度の意味しか、そこにはない。
もっとも、なり手の不足には、もうひとつの大きな理由がある。
ああ見えて人間の首というもの、そう簡単に落ちるようにはできていない。首半分まで剣を食い込ませて、半狂乱で処刑人の首筋にかみついた罪人の例もあるという。
そしてなによりも、大根や藁束を斬るのとは話が違う。
切断の対象は震えて動き、なにかを叫び、すがるような目で見るのである。それを一刀両断するには、卓越した技術に加え、強固な、人間離れした精神力が要求されるのだ。
仮面の男の二の句を封じたもの、それはアーレスが持つ殺人プロフェッショナルとしての凄みであった。
いざとなれば、なんの躊躇もなく他人の首をぶっぱなせる。
それがアーレスという男なのだ。

ところがアーレス、そんな先刻の気配が霞幻であったかのように、次の瞬間にはだらりと弛緩しきっている。足下はおぼつかず、おっとっと、とたたらを踏む様は、まるで冬眠明けの寝ぼけ熊といった具合である。

「ま、そういうわけで相済みませんね、旦那」

「——とっとと済ませろ」

仮面の男は吐き捨て、数歩下がった。そして威厳を取り戻すかのように、高慢な顔をつくって足下の罪人たちを睥睨した。

「世の平和を乱し、混乱の時代を繰り返そうとする罪人どもよ！　貴様らはユークリッド王家からの依頼を受けながらそれを裏切り、国家鎮護の要となるべき品を強奪した。その罪は斬首をもってもなまぬるいが……」

仮面の男はここで罪人のひとり、白髪の老人につつと歩み寄ると、その耳元に囁いた。

「最後にもういちどチャンスをやろう。素直に白状すれば、貴様ら伊賀栗の忍びの身の振りかた、考え直さなくもない……さあ、言え。藤林すずはいずこに……〈時間の剣〉を持ってどこへ失せた……？」

## 四

藤林すず！
＜時間の剣＞！
われわれはその言葉の意味を知っている！
いうまでもなく、人類とダオスのあいだで繰り広げられた血戦を語るにあたって、共に欠かすことのできないキーパーソンであり、キーアイテムである。
百五十余年もの長きに渡り、人類の歴史に災厄と混沌を振りまいたダオス……かの天魔を倒し、世界に平和をもたらした英雄のひとり——若き藤林忍軍の頭領藤林すず。そして、ダオスを無敵たらしめていた時空転移の術を封じ、必殺の一撃を魔王に叩き込んだ武器——＜時間の剣＞。
しかし——。
仮面の男がいうように、ここに居並ぶ罪人たちが伊賀栗の忍びたちなのだとしたら……白髪の老人が藤林忍軍の長老、藤林乱蔵なのだとしたら……それは果たしていかなる次第によってのことなのか？　さらには、＜時間の剣＞を、英雄である藤林すずが強奪したとは、いったい……？

白髪の老人――藤林乱蔵はじっと地面をにらんだまま、黙して動かない。深く、複雑に皺が刻まれた顔は微動だにせず、蒼い星の光に照らされたその様はまるで苔むした岩のようである。
そんな乱蔵を無言で見つめていた仮面の男だったが、やがて我慢の限度がきたか、ふん、と鼻を鳴らし、振り返ってアーレスにやれ、と命じた。
「ただし」
仮面の男の声に、嗜虐の色が混じった。
「老いぼれは最後だ。まずは配下の忍者から、そっ首落としてやろう」
そうすれば老いぼれも気が変わるかもしれないからな、と仮面の男は笑った。さて誰にしてやろうか、と楽しそうに生け贄を選びはじめる。
「私にしなさい！」
「なに？」
見れば、まだ十代半ばのいかにも少女といった風情の娘が、屹然とにらみつけている。
仮面の男はいまいましげに舌打ちをした。
「ならば望みどおりお前からだ。――アーレス！」
仮面の男の声に、アーレスは無言で、背中に負った巨大な剣をずるり、と引き抜いた。

長い。
普通の人間の背の丈ほどはあろうかという鋼の大剣だ。しかしアーレスは、小枝を扱うみたいにたやすくその剣をぶんと頭上で旋回させ、それからぴたりと大上段に構えた。これだけの大剣を回転させたのだ、反動はいかほどのものであろう。しかし、わずかほどの乱れもその構えには残っていない。
アーレスはさながら魔王の彫像のごとく、剣を振りかぶったままがっちりと静止している。すでに、どこにも酔いの影はない。白い息がどこからも漏れないのを見ると、もしかしたら呼吸すら、凄絶なる剣の魔力に吸い取られているのかもしれない。
天を貫くがごとく振りかぶられた巨大な剣。
その落下軌道の先には、少女のほっそりとした白いうなじがある。
「おかよ！」
ここで乱蔵が初めて口を開いた。苦しげに、ひとことひとことを喉から絞り出していく。
「頭領を信じるが忍びの定め。しかし、おぬしまで巻き添えにしなくてはならぬとは……すまぬ」
「私も信じていますから。頭領を、すずちゃんを信じて――」
少女が健気にも応えるのをさえぎって、仮面の男が叫んだ。

「やれ！」
乱蔵をはじめ、すべての忍者たちが目を閉じ、息をのんだ。しかし、どれだけ堅く目をつぶろうと、頸骨が砕かれる衝撃が、残った胴体の断末魔の痙攣が、首に巻き付けられたロープから全員に電流のように伝わるのだ。
なんたる残虐。
なんたる無慈悲。
人間の首が斬り飛ばされると、濡れ手ぬぐいをはたいたような音がする。
乱蔵も修羅の巷をこの歳まで生き抜いてきた忍びである。何度もそんな音を耳にしてきた。
歯を食いしばった。
ところが——。
「小便」
この状況において口にされる言葉として、これほどふさわしくないものがあろうか。
アーレスの野太い声は、張りつめた場の空気を一気に氷解させてしまった。
「貴様……」
「出物腫れ物ところ構わず、あいすんませんね」

おのれ、といって仮面の男は、ついに腰の剣に手をかけた。上役である自分を散々待たせたあげく、酔っぱらって無礼を吐く。そのうえここまで面子をつぶされては黙っていられない。

そんな仮面の男の様子に気づかないのか、あるいは無視を決め込んでいるのか、アーレスは適当な場所を見繕うようにうろうろとあたりを徘徊しはじめた。やがて、呆然と様子を見守る伊賀栗の忍者たちから数メートル離れた場所で、

「このあたりかな」

とつぶやき、剣を背に収めて後ろを向き、ごそごそとズボンをまさぐり始めた。

いまならば——と仮面の男は思った。いまならば斬れる。いかに斬首の達人とはいえ、小便の最中、しかも背後からならば……加えて剣は背中に収められているではないか……。

そうした計算をめぐらせていたせいか、仮面の男は気づかなかった。かちり、という、アーレスの足下で生まれた堅い、微かな音に気づくことができなかった。もっとも、気付いていたとしても続く事態を回避できたかどうか——。

突如、世界がオレンジ色に弾けた。

地割れから溶岩が噴出するように、あるいは炎の龍が寝返りを打ったように、真っ赤な火柱が帯状に数メートルも立ち上る。

一瞬遅れて音が、続けて熱波が来た。
この時点で仮面の男と配下の兵士たちは、木の葉のように宙を舞っている。すべてがあまりに突然で、夢の中の出来事のように思え、そして――
爆発！
唐突な爆発であった。誰も予想だにしなかったタイミング――否、正確にいえば、アーレスだけはこの爆発を完全に予期していた。なぜならばアーレスこそが、砂絵を描くように自らが歩き回った軌跡に火薬を蒔き、先刻のかちりという音でその火薬への着火を行った張本人に他ならないからである。
しかしなぜ？
「な、なにごとだ！　なにが起こった！」
「う、腕が……」
「おい、アーレスがいないぞ！」
「い、いや、それよりも……」
「あーっ！」
ひとしきり沈黙が流れて、ひっそりとした刑場にただ白い霧だけが満ち、仮面の男は呆然として視線を周囲に泳がせたが、ついぞそこに求める者たちの姿を発見することはでき

なかった。
首斬りアーレスはおろか、十数名の死刑囚たちまでもが、忽然とグラオルイーネ処刑場から姿を消していたのである。

# 第二章｜すず目覚める

一

斬っても斬っても斬ることができない闇の悪夢から、すずはようやく目覚めた。
ずいぶん長い間眠っていたような気がする。
どうしてこんなベッドにいるんだろう……?
ここはいったい……?
起きあがろうとして、激痛が走った。
はじめは右腕が痛みの源に思えたが、すぐに話がそれどころではないことに気付いた。
全身が痛む。まるで身体が痛みそのものに化けてしまったようだ。
「――無理はしないほうがいい」
枕元からの不意の声にも反応できない。
すずはぎりぎりと――錆びついてしまったかのようなおのれの関節を意志の力でねじまげ、なんとか声の主を見やった。
一瞬、少女かと思えた。
が、仔細に観察すれば――たくましい首筋や、きりりと結ばれたくちもと、強い意志を

灯した目は、明らかに男のものである。男にしては長く、美しい青い髪が、思い違いを生んだのだろう。
優しい顔をしている。
切れ長の目には、春の日差しのような穏和なひかりがたたえられている。体つきも、おそらく一七、八であろう青年にしてはほっそりしている。なによりも、声が柔らかい。
そんな青年が、枕元に立ってすずの顔を見下ろしている。
すずの顔に浮かんだ警戒の色を察したか、青年はファルケン、と名乗った。
「ああ、ここ、おれの家」
「ファルケン……？」
「ラインタールの崖の下にきみが倒れていたのを見つけたのが一週間前。ひどい傷だった。一応手当はしておいたけど、そのあとひどい熱を出しちまって。どうなることかと思ったよ」
「ラインタール……？」
水底から泡が立ち上るように、記憶がよみがえる。次の瞬間、すずは身体の痛みも忘れて、弾かれたようにベッドから半身を起こしていた。
「剣！」

「無理すんなって！」
ファルケンは心配そうにすずに近寄った。が、当のすずは殺気にも似た壮烈な気配を漂わせて、ファルケンの接近を制した。小さな両の拳が、奇妙な形でぎゅっと握りしめられている。ファルケンには知る由もないが、親指を人差し指と中指の内側に握り込んだその握りは、まさに藤林流の必殺の突きの構えである。
「剣は……剣はどこですか？」
「これのことか？」
すずの気迫に気圧されてファルケンは下がり、背後の壁に立てかけてあった古い剣に手をかけた。が、手をかけた途端すずがベッドから飛び跳ねんばかりの体勢になったのを見て、慌てて手を引っ込める。
「大事そうに抱えて倒れていたから、一緒に持ってきたんだけど……正解だったようだな」
「離れて！　……そう！　そこから動かないでください！」
すずはそういってベッドから立ち上がり、足を引きずりながら剣へと歩み寄った。ただ、視線はファルケンをきつく制したまま動かない。わけも分からずにらみつけられたファルケンは、当惑顔ですずの一挙手一投足を見守るだけである。

すずは、ようやくといった体で立てかけられた剣までたどり着いた。途端、糸が切れたように床に崩れ落ちてしまう。
「おい、大丈夫か……！」
「来ないで！」
「しかし、そのままじゃ傷がまた開いちまうぞ！」
「いいからわたしに近づかないで下さい！　近づいたら――」
殺します、とすずは言い放った。
ファルケンは絶句した。
すずがダオスと刃を交えた英雄であることも、最高の技術を備えた忍者であることも知らないファルケンにしてみれば、「殺す」などという脅しが、どう見ても一〇歳を少し越えたくらいにしか見えない少女の口から出るとは信じられない。が、その警告が本当であることは――近づいたらこの少女が本当に自分の命を絶つつもりであることは、尋常ならざる殺気から感覚的に理解できた。
「わかったよ。近づかない」
ただし、とファルケンは続けた。
「治療だけはさせてくれ」

「だから動かないでくださいって……！」
「だから動かないって」
「……」
「……いいか、動くなよ」
「……」
「……攻撃もしてくれるなよ」
すっ、と目を閉じたファルケンの口から出た次の言葉は、果たして意外なものであった。
「──すべての母なる優しき大地よ」
「あ！」
思わずすずは驚きの声を上げた。
法術。
大地とその創造者である神の力を借りて、人知を越えた奇跡を現出させる技術である。
肉体の損傷をいやし、戦闘時の防御的サポートを行うその技を、すずはかつて目の当たりにしたことがある。
──ミントさんと同じだ……。
ダオスとの長く苦しい戦いを共にした美しき法術師、ミント＝アドネード。かつて彼女

の掌から流れ込んできたものと同じ、暖かい波動が、いま、すずの全身をゆっくりと充たしていた。血液がめぐるように、胸の奥から手足の先にまでエネルギーが染みわたっていく。乾いた大地が雨水を吸い込むように、傷ついた細胞がいやしの粒子を受け入れていく。気づいたときには、あれほどまでだった痛みがうそのように身体から消えていた。
「ファーストエイド」
ファルケンはそう呟いて、術を終えた。
「しょせん応急手当だ。ゆっくり寝て休まなければ、ほんとには直らない」
「……ありがとうございます」
「やっとお礼、言ってもらえたな」
「あの」
すずは口ごもった。なにから話せばいいのかわからない。事情は錯綜している。それに、この男が少なくとも敵でないことはわかったものの、味方である保証はいまだ、ない。それに、それに……。
「なんだかわけありで、どうにもこうにもって感じだけど」
ファルケンが言った。
「とりあえず動いてもいいかな？」

## 二

　ファルケンの家は二部屋しかないこぢんまりとしたログハウスだったが、隅々まで掃除が行き届いた気持ちの良い住みかだった。住人はファルケンひとりで、窓から見える木々の深さから察するに、人里離れた森のなかの一軒家というところだろう。
　そして、家の作りと比較すると、不相応なほどに立派なキッチンがある。
　そこでいま、ファルケンが料理をしていた。
　森で採ったものか、きのこや山菜を手早く刻み、フライパンでざあざあと炒めている。香辛料をふりかけ、バターをひとかけら落とすと、何ともいえない食欲をそそる匂いが小さなログハウスに満ちた。
　すずはベッドに腰をかけ、所在なさそうに足をぶらぶらさせて料理の完成を待っていたが、さすがに申しわけなく思い、何かお手伝いを、とファルケンに申し出た。
「だから病み上がりはゆっくり休んでいてくれっていっただろ？」
「でも」
「いいってば。こんな山奥にたまのお客さんなんだ。手慣れたところを見せたいじゃない

か、な？」
　それでもすずが訴えかけるような目でじっと見つめていると、ファルケンはついに根負けして
「それじゃあそっちのニンニクの芽を刻んでくれないか？」
「はい！　これですね？」
「ああ。適当に五センチくらいに切って、そっちのザルに入れてもらえるかな？」
「はい！」
　すずはニンニクの芽の束をわしっとつかんで宙に放り、ファルケンが声を上げるまもなく、腰から抜いた忍刀をひらめかせた。
「――忍法鎌鼬！」
　叫ぶと同時に、正確に五センチに切断されたニンニクの芽がばらばらと床に落下している。すずは満足気に床からニンニクの芽をかきあつめ、よいしょとザルに移した。
「……あのさ」
「あ、申し訳ありません。驚かれましたか？」
「……うん、驚いた。ちなみのその刀、なに？」
「忍刀血桜です。よく斬れます」

「……やっぱりそこらへんに座ってくれる？」

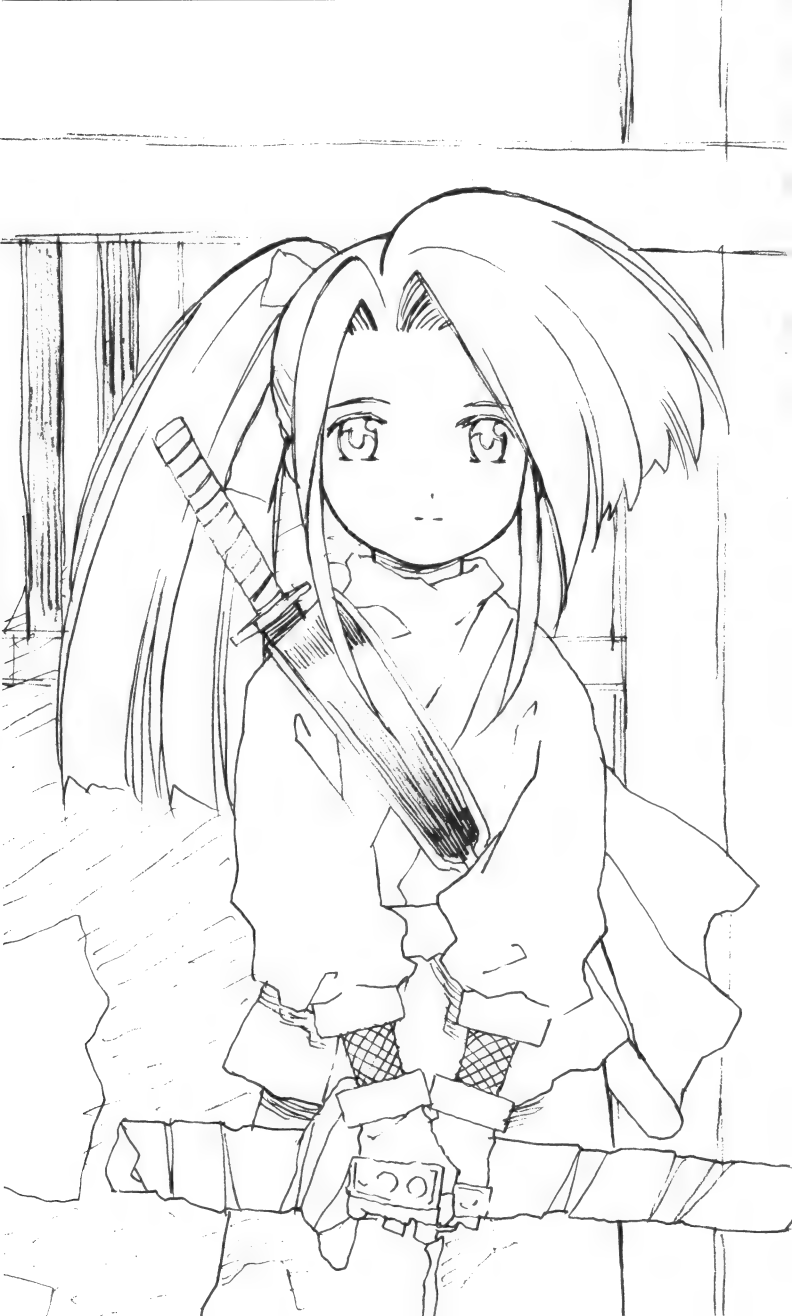
　完成した料理は、男の即席料理とは思えない出来だった。病み上がりで食が細っているはずのすずが、ぺろりと平らげてしまったほどである。
「ごちそうさまでした。とてもおいしかったです」
「よかった。栄養のバランスも考えてあるから、食べられればどんどん良くなっていくはずだよ」
「あの……ファルケンさんはいつもご自分で料理をなさっているのですか？」
「まあね」
　ファルケンは食器をかたずけながらいった。
「ばあさんの代から、うちは女が料理まるっきりでさ。じいさんも、おやじも、必然的にキッチンに立つことになった。おれも子供の頃からそれ見て育ったから。もしかしたら、すでに遺伝子に料理特性能力が組み込まれているのかもしれない」
　くすくすと笑うすずを見て、ファルケンは満足そうにいった。
「おかしいかい？」

「はい。わたし、とてもお料理が苦手なかたを知っていますので、そのかたを思い出してしまって」
「ふーん。ま、おれは絶対に料理上手な嫁さんもらって、うちの呪われた遺伝子に革命をおこそうって決めてるんだけどさ、へへ」
ひとしきり笑い合うと、なんとなく沈黙が落ちた。
こうして静まり返ると、窓の外からふくろうの声が聞こえてくる。
木の葉が揺れる音。
風の音。
やがて、すずが意を決したようにいった。
「あの、お洋服なんですけど」
すずはいま、だぶだぶの男ものパジャマを身につけている。ファルケンの物なのだろう。サイズがあまりに合わないため、袖や裾が四重五重に折り返されているのだが……
「ああ、悪いな。ひとりぐらしなもんで、女ものの持ち合わせなくて。大丈夫だよ、ちゃんと洗濯したきれいなやつだからさ」
「あの、そうじゃなくて。わたしの忍者服は……？」
「安心しろよ。あっちもばっちり洗濯して糊きかせてとってある。着替えるかい？」

「はい」
すずはいって、指先でだぼついたズボンの生地をつまんだり離したりしていたが、やがて
「着替えさせてくれたの、ファルケンさんですか？」
といった。
「着替え？」
「忍者服からパジャマに」
「ああ、おれだよ」
いってからファルケン、ようやくすずの顔が真っ赤なのに気付いた。
「あ！　いや、ほら、泥で汚れてたし、血が凄かったし！　それに、あの、寝てるときに熱も凄かっただろ？　汗かきっぱなしじゃ、治るものも治りゃしない！」
「……そうですね」
「だろ？　一週間も寝込んでたんだぜ？　身体だって拭かないと……あわわ！」
きまずい沈黙がログハウスに落ちた。
「……洗い物、お手伝いします」
「あ、ああ、そうだね、わはは」

重ねた食器を器用にキッチンに運ぶすずの後ろ姿を見ながら、ファルケンは深くため息をついた。

食器を洗い終え、着替えを済ませると、すずは古びた剣を手にしてぺこりと頭を下げた。
「――お世話になりました」
「おいおい！」
ファルケンは思わず椅子から立ち上がった。
「ずいぶんいきなりだな！」
「いきなりでしょうか？」
「いきなりだよ！　しっかり休まないと駄目だって言っただろう？　それに真夜中だぜ？　モンスターだって出るし、それに……」
「でも、行かないと」
「駄目だ」
ファルケンはぴしゃりと言ったが、すずは聞くそぶりもない。玄関口へと歩を進めるすずに、ファルケンはしかたがないといった感じで言った。

「――〈時間の剣〉だろう、それ」
すずの脳裏に、警戒の電撃が走る。
〈時間の剣〉の存在は、そこら一般人の知るところではない。魔王ダオスとクレス＝アルベインたち――そのなかにはすずも含まれているわけだが――の戦いは、すでに伝説化し、多くの尾鰭（ひれ）がついて広く世に知れ渡っているが、〈時間の剣〉についていえば話は別だ。
剣が意味するものは、知られてしまってはならないのだ。
そもそもあの戦いは、ダオスが時空転移の術を使い、歴史を改変せんと目論んだことから始まったものである。自分の目的のために、本来起きたはずの、すでに意味づけがなされた出来事の意味を塗り替える……。それが行われたために、多くの混乱が世界にもたらされた。多くの戦いが起きた。多くの人が死んだ。もう二度と、あのようなことが起きてはならない。
しかし、〈時間の剣〉は、それを可能にする。
時間を自由にさかのぼり、飛び越え、歴史を塗り替えることが、〈時間の剣〉があれば誰にでもできるようになるのだ。ダオスが使った時空転移の術を、使い手に授けるのだ。
人間は弱い。

たとえば、マルスという男がいた。
ユークリッドに仕えていたその騎士は、私欲に目をくらませてトーティスの住民を虐殺し、ダオスの封印を解き、あの激戦を生み出す原因を作った。〈時間の剣〉は、第二のマルスを生み出すに十分すぎるほどの魔性の輝きを持っている。
だからこそ、封印されたのである。
ダオスの時空転移を封じ、役目を終えた〈時間の剣〉は、アセリア暦四二〇二年——召喚師クラース＝Ｆ＝レスターの時代に運ばれ、そこでクラース自身の手によって封印された……。

「伝説の召喚師クラースが封印した〈時間の剣〉。どこに、どんな方法で封印されたのかはもう一五〇〇年間知られていなかったはずだけど」
ファルケンが沈黙を破った。
「どうやらきみが発見したらしい」
すずは無言のままである。
いかにもファルケンのいうとおり、すずは封印されていた〈時間の剣〉を発見したのである。ユークリッドはラインタール渓谷。垂直にそそり立つ絶壁から、延々とのびる洞窟

の奥深く。クラースが知恵を絞って設置した無数のトラップをかいくぐった最深部に……剣はあったのだ。
「さっきいったおかよっていうのも、ほんとうの名前じゃないんだろう?」
「……」
「おそらくきみは藤林すず。ダオスを倒した伝説の忍び」
「……」
「でも、ポイントはそこじゃない。きみがだれかということではなく、きみがどうするつもりなのかだ」
すずはその言葉に、なんらかの意志のかけらを読みとろうとした。そこに悪しき意志の影がわずかでもあれば——腰の剣に意識を集中する。
「おいおい。いっとくがおれは敵じゃない。剣を奪おうと思えば、いつだって奪えた」
「そうですね。でも、だからといって信用はできません」
「信用してくれなくても結構。でも、とりあえず手は結んでおいたほうがいいかもしれないぜ……」
ファルケンはすずを見つめたまま、つい、と軽く顎をしゃくった。

――うしろだ。

瞬間！
横っ飛びに走ったすずの背後を、銀光が薙いでいた。

三

かつっ！

数瞬前まですずが背にしていた壁にすっ、と筋が走ったかと思うと、続けて壁が音を立てて瓦解した。
すずは崩れた体制を瞬時に整え、壁を見やって息を飲んだ。
そこには幅一メートル、高さ二メートルほどの暗闇が広がっている。
定規で測って線を引き、はさみで切り抜いたような四角い空間がぽっかりと開き、壁向こうの夜闇をのぞかせているのだ。
ありえない。

壁である。
ただの板っ切れではない。
丸太を積み上げ、がっちりと固めた壁である。
それが、一瞬にして四角く切り裂かれた。
風。
そこから風が吹きこむ。
冷たい冬の風だ。
そして、びょうびょうと吹く風の向こうに、ふたつの影がある。
「——わざとはずした」
手前の人影が言う。
「不意打ちでは意味がないからな」
女である。
声には酔ったような響きがある。
剣を振り抜いた姿勢のままのところから察するに、壁を切り飛ばした剣客だろう。
「おれはやっちまえっていったんだけどよォ」
別の影がいった。今度は男だ。

「だって死体は喋らねえじゃねえかよ、不意打ちだったのか真っ向勝負だったのか。だから、やっちまえっていったんだ。でもクイーンはこだわるわけよ、どっちの腕が上かってな」

「おいおい、ひとんちの壁ぶっ壊しておいてずいぶんな態度だなあ、おっさん！」

おっさん、とファルケンが断じたのは、二人目の声が中年男のものだったからである。

「死体は喋らないとかなんとか、なんの恨みがある。ああ？」

「……お前ではない」

暗がりの中で、女剣士がいった。ぱちん、と剣を腰の鞘に収め、ゆっくりと、自らがくりぬいた壁の穴へと歩を進めた。

「だが、お前も斬る。損な拾いものをしたな、小僧……」

「逃げて！　逃げてください。この者たちのねらいはわたしの命です」

すずが叫ぶ。歩み寄る女剣士と距離を保つようにじりりりと後退し、ファルケンの真横まで移動したその顔には、珍しく、焦りの色がある。

察したか、男が嘲笑を漏らす。

「ま、おまえさんの命がどうしても欲しいってわけでもねえんだぜ。おれはその剣さえ貰えりゃ、おまえさんがどこ行こうと興味はねえよ。でも、クイーンはどうしてもお前を

ぶったぎるっていうし、それにその剣、渡す気ないんだろ？　……なあ、渡す気があるんならいまのうちだぜ？　おれならクイーンを説得できる。なにしろ、こいつはおれに惚れてるからなア」
いいつつ歩み寄る男はうひひひ、と下卑た笑いをもらしたが——惚れているとはよくもいったものである。
でっぷり太った、醜い男だ。
年齢は三〇代後半であろうか。
見事につるりとはげ上がっているせいか、異様に脂ぎっているせいか、全体にぬらりとしたつかみどころのない印象がある。細い太いの違いはあれど鰻にたとえるのが一番手っ取り早いかもしれない。握ってもつるりと手から逃げ出していく、あの鰻めいたぬらり感を、不快感を周囲に放出する肥満漢である。
そういえば、面構えも鰻的であるかもしれない。
ひょろりと滑稽な口ひげを鼻の下にのばし、目は奥まってちょこんと小さい。
この風体に世のどんな女が惚れるというのか？
しかも——この鰻男にクイーンと呼ばれたもうひとりの女は、このような息詰まった状況にあるにも関わらず、ファルケンが思わずみとれたほどの美しさである。

ただ、酷薄な美しさではある。
病的なまでに青白い顔と、燃えるような赤い瞳が、夜闇にぽっかりと浮かび上がってい
る。鋭くすずを見据えながら、腰まである黒髪を風に踊らせる様は、伝説に聞く冥界の使
いのようである。
「ラインタール渓谷では、まさかあのような高さから飛び降りるとは思わず取り逃がした
が……奇跡に二度目はない。ここでお前を斬って、わたしが最高の剣士であることを証明
する」
言うとクイーンは歩みを止めて、腰をすっと落として剣の柄に手をかけた。
「ファルケンさん、下がっていてください……」
〈時間の剣〉を背後の壁に立てかけて置き、すずもまた腰の小剣を抜いて応戦の体制に
入る。
壁の穴をはさんで、すずとクイーンの距離およそ五メートル。
それにしても遠い。
剣には一足一刀——すなわち、一歩踏み込めば相手を両断できる必殺の間合いがある。
相対する両者が通常の剣を構えている場合、互いの切っ先が触れ合うか触れ合わないかの
感覚、二メートル程度が必殺の戦闘圏である。

両者のあいだ、五メートル。
遠い。
しかし——。
クイーンの腰から、ざあっと銀光がたばしった！
一瞬を置かずして、横薙ぎに振り抜かれた剣の軌跡から前方に存在するすべての物体が裂けた！　テーブルが、椅子が、棚が、柱が、壁が、すべてが地上一メートルの高さで上下ふたつに、横一文字に切り裂かれたのである。
「……天地両断剣」
クイーンが陶然といった。
ぎぎ。
きしむ音がしたが、すでになにがきしんだのかわからない。なぜなら次の瞬間、輪切りにされたログハウスは轟然と音を立てて崩れ落ちたからである。
ひと振りで小屋一つを輪切りにする。
まさしく天地両断！
土煙をあげて倒壊するログハウスの前で、クイーンは残心の姿勢のまま、夢幻の境にいるかのごとく動かない。唇から熱い息を吐き、白い顔をほんのり上気させ、半眼に開いた

瞳にかかる睫毛はふるふると震えている。やや後ろで鰻男は、そんな相棒の姿をあきれて見やって
「バカ野郎、これじゃ剣を探すのもひとくろうじゃねえか」
と漏らした。
「とっとと済ませようぜ。遅れるとキングがうるせえ」
「……おまえ、先刻わたしがだれかに惚れているとか惚れていないとかいったな？」
「おっと、怖え怖え！　冗談だってばよ。毎晩剣を抱いて寝てるような女じゃ、おっかなくて裸にもなれやしねえ、へへへ」
もっとも、と鰻男は不敵にも付け加えた。
「前方数メートルを斬る天地両断剣といえど、おれの身体にゃ無意味だがな」
「……試してみるか、ジャック？」
「いずれな」
クイーンの殺気を軽くいなして、鰻男――ジャックはログハウスの残骸に向かった。クイーンもようやく殺戮の夢から覚めた様子で、アーレスの後に続く。
二人とも、すずとファルケンのことは気にとめる様子はない。そうであろう。間合いを無視し、防御はおろか回避すら不可能なこの神技を前に、命をつなぎ止められる者などあ

るはずがない。
たとえ若き天才忍者、藤林すずであっても……。

# 第三章　時間の剣

# 一

そもそも藤林の一族は、どうしてこのような死の座にすえられたのか。
それを語るには、時をさかのぼって二週間前、祝いに沸く伊賀栗の里に戻らなければならない。

藤林の忍者たちは、大陸南端に位置する水鏡ユミルの森で生活を送っている。
これを伊賀栗の里という。
その存在を知るのは、同じユミルの森で生活を送るエルフの一族、そして古くから有事発生の際に任務を依頼してきたミッドガルズ王国の高官のみである。が、これまで、どちらもすすんで藤林一党と関わりを持とうとしなかった。独得な文化様式を築き、忍術という驚異の技能を駆使する藤林の忍び衆が、得体の知れない、危険な存在として恐れられていたという部分が大きい。
もっとも、伊賀栗忍者のすずが、ダオスを倒した英雄のひとりとして名を馳せてからは、ひとの出入りは以前より増えた。噂の英雄をひとめ、と観光にやってくる気楽な人間もい

たし、忍者を雇いたい、というどこかの富豪もいた。なにより、忍者の能力を再発見した各国からの諜報任務が増えた。
伊賀栗の里に、あたらしい時代が訪れようとしていた。
そして、そうしたあたらしい波に対応すべく、頭領の交代がおこなわれたのである。
厳しい冬のさなか、エアポケットのように生まれた小春日和の日であった。
長きに渡って伊賀栗の里を統率してきた藤林乱蔵から、孫娘のすずへ。
打倒ダオスのあの冒険から一年が過ぎてはいるが、すずはまだ一二歳。
それでも異議を唱える者はなかった。藤林家の直系はすずひとりだったし、その技はこの一年でさらに鋭さを増して大人の忍びを遙かに越えていた。
「——しかし」
と乱蔵は就任式で一党に語った。
「わしが頭領の座をすずに譲るのは、血筋や、忍びの技術だけによるものではない」
乱蔵が隠居を決意した最大の理由、それは、すずが持つ確然とした意志——伊賀栗の里の今後かくあるべしというポリシーが、みなに受け入れられていたからに他ならない。
すなわち、人として生きること。
任務遂行を至上命題とし、非情の獣道に生きる忍びにとって、両立しがたい命題ではあ

る。しかし、すずならば――。すずの瞳には、ひとびとにそう希望を抱かせるなにかがあった。
両親を自ら手にかけるという試練を乗り越え、レアバードで世間を広く見聞したすずに備わりつつある資質。それは、相対した者を自らの懐に吸引する人間の大きさ、魅力――カリスマであった。

二

さて。
頭領就任の祝いもたけなわの伊賀栗の里に、ひとりの男がやってきたところから風雲は急を告げる。
連合軍指揮官、と男は名乗った。
名をリヒャルトという。
ユークリッドの大臣で、先のダオスとの戦いにおいて数々の武勲をあげた有名な武将でもある。そのリヒャルトが、数名の護衛のみを連れて、伊賀栗の里を訪れたのである。
報せを聞いた乱蔵はすずとともに祝いの席を外し、頭領の屋敷でリヒャルトと面会した。

リヒャルトは急の訪れをふたりに詫びると、すぐにこう切り出した。
「〈時間の剣〉が狙われている。力を借りたい」
ダオスとの戦いを終え、世界は新たなパワーバランス構築のときを迎えていた。なにしろ、広大な大陸を治めていた世界一の大国ミッドガルズが、ダオスによって消滅させられているのである。
ミッドガルズ大陸を制するものが、新たな世界の盟主となる――。
直系の王子ヴァルターが生き残っているのだから、ミッドガルズ王家は〝存続〟してはいる。しかし、しょせんは形式上。兵力を持たない国家など、この時代、国家たりえない。こうして、ならずものの群れや大戦の部隊の生き残り勢がミッドガルズ大陸を蹂躙し、住人を恐怖の渦に叩き込んだ。
アセリア暦四三五四年十二月。
世界を二分する勢力となったアルヴァニスタとユークリッドは、「かつて手を握り合って魔王と戦い抜いた友人として、いまいちど、存亡の危機にあるミッドガルズ王家に助力する」という有名な『十二月宣言』をもって、ミッドガルズ大陸に連合軍の派兵を実行した。

むろん名目である。
アルヴァニスタとユークリッドは共同戦線を展開して暴徒を掃討。かくしていま、ミッドガルズ大陸には、たがいに牽制しあうユークリッドとアルヴァニスタ、そして傀儡(かいらい)である現状を逆転させようと目論むミッドガルズ王家、三者の思惑が錯綜している。そしてリヒャルトこそは、連合軍のトップともいえる人物なのである。
「ここだけの話だが、われらユークリッドとアルヴァニスタは、表だって剣を交える気はない。可能な限り交渉でことを済ませようとしている」
リヒャルトは乱蔵たちに、そう説明した。
「きれいごとはいうまい。我らもミッドガルズ大陸は欲しい。だが、これまでの話し合いで、両国が納得できる領土分割の方法には手応えを持っているのだよ」
「しかし、ミッドガルズ王家は納得しないでしょうな」
「いかにも。とはいえ、ミッドガルズ王家に、打つ手はない。彼らにあるのは、かつてそこを支配していたという事実だけだ。そこでやつばら、思い詰まって凶行に出おった——」
「〈時間の剣〉」
「うむ。我らの間諜が情報をつかんだ。召喚師クラース＝F＝レスターが——」
ここでリヒャルトは、乱蔵の横に座って無言のすずをちらりと見やった。

「召喚師クラース＝Ｆ＝レスターがいずこかに封印したかの剣の所在をミッドガルズ王家が明らかにし、そこに幾度も調査隊を派遣しているとのことだ」
「剣を使って、なにを？」
「わからん。しかし、見当は付く。かの魔王と同じことをするつもりであろうよ」
座敷に息苦しい沈黙がおりた。

三

やがて乱蔵が、粘り着くような空気を押し破っていった。
「まさか。あのような辛酸をなめ尽くして、まだ一年あまりですぞ」
「それは我らのような普通の神経からの発想よ。滅ぶか残るか、追いつめられれば人はなんでもする。ヴァルター王子は粗暴の気質激しく、一説によると生き残ったのはダオスと裏で通じていたからだとともささやかれている」
「手はお打ちになられたのでしょうか？」
「我ら連合とミッドガルズ王家の関係は微妙だ。少なくともいま現在は、表面上は友好であり続けなければならない。たとえミッドガルズの剣の極秘探索が事実であったとしても、

抗議はできんのだよ。こうした背信行為が背後で行われていたという事実は、闇から闇へ葬らなければならん。そこで、おぬしたちに頼みたい。ミッドガルズ王家よりも早く〈時間の剣〉を奪取し、その再封印に力を貸して欲しいのだ！」

「――わたしが」

初めてすずが口を開いた。

「わたしが出向きます。封印の地まで、わたしが出向き、必ず〈時間の剣〉を手に入れます」

表情は変わらねど、目には決然たるひかりがある。

「うむ、ダオスを倒した英雄がそういってくれるとは頼もしい。しかし、封印の地にはすでにミッドガルズの手の者が厳重な警備についている。わがユークリッドから兵を貸し出せればよいのだが、あいにくことは隠密を要する。作戦は少数で迅速に行われなければならない。そこで、だ」

リヒャルトがぱんぱんと手を叩くと、警護の兵士たちが座敷に現れた。

「私の手飼いのこの四人を、おぬしの配下として貸し出そう。右から順に……キング。クイーン。ジャック。そしてジョーカーだ」

四人の兵士が頭を軽く下げた。

異様な面々である。

まずはキングという青年、総髪に流した髪が雪のように真っ白なのも異様だが、なにより、見る角度によってふと百歳の老人にも見えるときがあるのが奇怪だ。老人が若者の皮を被ったような、妙に枯れた雰囲気がある。それは、深い理知をたたえた黄金色の瞳からの印象なのかもしれない。

続くクイーンは、絶世の美女ながら底冷えするような殺気を振りまいているし、ジャックはといえば、ぬらりと鰻のようなとらえどころのなさ。

なによりも異様なのはジョーカーという男である。

いや、男なのかどうかも定かではない。

体格は確かに男のものではあるが、なにしろ着衣から露出している部分——腕、脚、頭をすべて薄汚れた包帯でぐるぐる巻きにしている。かろうじて目だけは包帯の隙間から露出しているが、その目もどんよりと底なし沼のように淀んでいる。墓場からよみがえったミイラ男そのものである。

「見てくれは奇怪だが百戦錬磨、頼れるやつらだ」

というリヒャルトの言葉を受け、キングが

「我らワイルドカーズと申します、すず殿」

と丁寧にいった。声にもまた、外見同様年齢不詳の響きがある。
「さしずめ切り札ともいうべきすず殿が加われば、キング、クイーン、ジャック、ジョーカー、そしてエースと、まさしくわれら向かうところ敵なしですな、はははははは」
しめしあわせたように、面々が笑った。
明るい笑いではあったが、なぜかすずはぞっとこみ上げてくるものを禁じ得なかった…。

# 第四章　剣術対忍術、そして魔術！

頼れるやつらだ――。

一

すずは、瓦礫の下でリヒャルトの言葉を思い返していた。
確かにリヒャルトの言葉は嘘ではなかった。
ただし、それは、彼らワイルドカーズが味方だったときに限る話だ。
こうして敵として対峙することとなったいま、かれらの戦闘能力は絶対的な恐怖でしかない。
「お、おい……いったいなにが……」
「しっ！　静かに！」
すずは、身体の下でうめくファルケンを制し、次の一手を求めて思考を猛回転させた。
クイーンの一撃をこうしてかわすことができたのは、僥倖に過ぎない。
すずは、ラインタール渓谷の洞窟――〈時間の剣〉が封印されていた洞窟を突破する際、洞窟を警護していたミッドガルズの兵士たちと戦闘をおこなっていた。それが吉と出た。

あのときクイーンが見せつけるように天地両断剣を使用したのを目にしていたからこそ、今回クイーンが構えをとった瞬間、次に起こることをいち早く悟って、まっぷたつの難を逃れることができた……。

クイーンと対峙した際、すずは手にした〈時間の剣〉を背後の壁に立てかけてみせた。その動きはいかにも自然だったため、クイーンには、すずが邪魔な荷物を手放しただけに見えたかもしれないが、はたしてその行為の真意はそんなところにはない。

彼らワイルドカーズの目的は、〈時間の剣〉回収である。

そして、問題の剣の長さは約一メートル。

ならば剣を壁に立てかけておけば、それよりも下の位置をクイーンが切断することはない。

要するに、すずは、クイーンが高さ一メートル前後の空間を横に薙ぐことを、あらかじめ想定していたのである。想定したというよりも、そうなるように誘導した。クイーンは誘導されたことに気付かないまま、無意識のうちに〈時間の剣〉をかわして空間を斬った。それがいかに早い斬撃とはいえ、あらかじめ軌跡を想定しきっていれば、ファルケンを抱えて身をかがめるくらいはできる……。

あまたの修羅場をくぐったすずならではの、即興トリックであった。

しかし、さすがのすずも、次のタネまでは仕込んでいない。
そうこうしているあいだにも、クイーンとジャックの足音が近づいてくる。彼らはすべての瓦礫を退かせて、〈時間の剣〉を回収するつもりでいる。見つかるのも時間の問題だ。
唯一のアドバンテージといえば、クイーンとジャックが、すずが死んだと信じ切っていることである。安心しきった彼らの虚を突いて、必殺の一撃を放つことができるかもしれない。ただ、敵はふたりいる。不意打ちで倒せるのはひとりが限界であろう。それに、こちらには足手まといともいうべきファルケンもいるから、不意打ち後の逃走もままならない。
「――おい、あったか?」
「いや。もう少し奥を探せ。藤林すずは奥の壁に剣を立てかけた。おそらくあちらだ」
瓦礫の上から、クイーンとジャックの会話が聞こえてくる。続けて足音。
「まったく、人使いが荒いぜ。こんな面倒なことになったのはてめえのせいじゃねえかよ」
ジャックの声である。
クイーンではなくジャックが近づいてきたことに、すずはわずかな安堵を覚えた。
不意打ちで確実な勝利をもぎとる相手としては、クイーンよりもジャックのほうがあり

がたかった。もちろんクイーンの天地両断剣は恐ろしい技であるし、対処法も皆目見当つかない。ただ、それ以上に驚異なのは、まだ片鱗すら見せないジャックの能力である。戦いにおいて、相手の手の内を知らないほど恐ろしいことはない。逆に、たとえ無敵の天地両断剣であれ、一度体験していれば先刻のように対処のしようもある。

すずとワイルドカーズの面々が洞窟探索行を共にしているあいだ、能力を明らかにしたのはクイーンのみである。＜時間の剣＞を手にしたとたん、仲間と思っていたワイルドカーズの面々に背後から襲われ、命からがら逃走したすずは、他のメンバーの能力を知らない。とはいえ、クラースが仕掛けたトラップを次々と突破した彼らの実力が三流であるはずはないし、あのジャックという男、クイーンとチームを組み、天地両断剣などおれには通用しないとうそぶくほどである。

——とにかく、こいつから倒す！

すずは決意を固めた。

「来たぜ……」

と、ファルケンが耳元でささやいた。

「おれも戦う」

「いいえ。ジャックがわたしたちのうえの瓦礫に手をかけた瞬間に、不意をついてわたし

がここから飛び出します。そのすきに、ファルケンさんは裏手の森へ駆け込んでくださ
い」
「逃げろってか⁉」
「クイーンの抜刀は信じられないほどの速さです。法術を唱えるだけの時間はありません。
ファルケンさんは〈時間の剣〉を持ってここを離れ、助けを呼んできてください」
いったが、すずは救援が間に合うとは思っていない。法術を唱えるだけの隙がないとい
うことは、すなわち、勝負が一瞬で終わることを意味している。ファルケンが胸を張って
逃げられるように、もっともらしい理由を作ったにすぎない。
「でも――」
「しっ！　近づいてきます！」
「む……」

数メートルまで近づきつつあるジャックの足音を聞き、ファルケンは仕方なく息を潜め
た。そして、沈黙が瓦礫下の狭い暗闇を充たすと、いやでも覆い被さっているすずの体温
と胸の鼓動が伝わってくる。そんな場合ではないのはわかってはいるが、やはり――
「……どきどきしていますね」

「えっ？」
思わず声を上げそうになったファルケンの口を、すずは手のひらでそっと押さえた。
「わたしもです。わたしもどきどきしています」
戦闘前の緊張をいっているのだとファルケンがようやく気付いたとき、事態は動いた。
がら。
砂を落として頭上の瓦礫が動く。
いかなる妙技か、うつぶせ状態だったすずがばねのように身を翻す。
「あーっ、て、てめえ生きてやがったか……！」
言い終わる間も与えず、すずは銀の刃をジャックの心臓にぶち込んでいた！

二

必殺！
短刀を用いる忍者にとって、必殺の間合いは敵の懐のなかである。そこに潜り込みさえすれば、勝利はゆるぎないものとなる。相手の攻撃を封じたうえで、人体の急所に蜂のひと刺しを加える。

まさにこの場合、必殺であった。
完全に無防備状態のジャック、その懐からのゼロ距離攻撃。必殺のセオリーがこれ以上ないほどまでに忠実に実行され、完璧に遂行されたのである。ジャックがいかなる特殊能力を持っていたとしても、回避のしようがない。勝負ありである。
「走って!」
ファルケンに叫びながら、すずは地を蹴って遥か夜空に舞い上がっている。すでにジャックには、なんの意識も残していない。次なる標的――クイーンに全神経を集中させる。
さすがの剣鬼といえど、空中に向けて天地両断剣を放つのは至難の業のはず!
そう読んでの跳躍である。先刻、天地両断剣を放つ際にクイーンがすっと腰を落としたのを、すずは見逃していない。あの必殺剣が、腰の溜めと、それなりの姿勢制御を要求するのは明らかである。ならば、空中に活路を見いだせるのでは……。
祈りながら、流星のようにすずは落ちる。遥か下方、地上にあるクイーンの姿が、ぐんぐんと近づいてくる。その顔に見えるのは、明らかな動揺の色。動揺が迷いを産み、迷いが対応の遅れを生む。遅れ――一流と一流がしのぎを削る戦いにおいて、その遅れはまさしく文字通りの致命傷となる。

——勝った！
しかし、すずの確信は、すぐに驚愕に取って代わられた。
突如、背中に激痛が走ったのである。
「あっ⁉」
叫ぶとすずは体勢を崩し、クイーンから数メートルも離れた地面に肩から激突した。
その背中に、数本のナイフが深々と突き刺さっている。
背後からの、まさかの一撃であった。さきほどとは逆に、今度はすずが完全に不意を突かれたかたちとなった。
通常であればすずほどの忍者が、このような無様な落下をすることはありえない。どんな高所から落下しようとも、ダメージを最低にする着地体勢をとる。ところが今回はあまりに予想外の一撃を受けたため、頭からの落下を防ぐだけで精一杯だった。まずいことに、激突の衝撃で、身動きどころか呼吸すらままならない。
「不意打ちですまねえな」
背後からの声に、すずは信じられないといった様子で振り返って
「まさか！」

思わず叫んだ。
左胸をぼりぼりと掻きながら歩み来るその男は、確かに心臓を貫いたはずのジャックではないか！
ジャックはにやにやと笑いながらいった。
「まあ、おあいこさまだ。さっきは驚いたぜ。おかげであの兄ちゃんに逃げられちまった」
「……男を逃がしただと？」
クイーンの非難に、ジャックはせせら笑いを返した。
「そりゃねえぜ、クイーン。おれがナイフを投げなきゃ、おまえは無惨唐竹割りだったと見るがね。どうだい、大将？」
「くっ！」
クイーンは無念を噛みしめていった。
「借りは返す！」
不機嫌そうに剣を鞘に収め、吐き捨てる。
「今晩あたりにたっぷりと頼むぜ、けけけ」
ジャックは下品に笑い、そして足下にうずくまっているすずにいった。

「残念だったな。悪いがおれの身体は特別製でね、どんな攻撃も受けつけねえんだよ」
ジャックはすずの手から離れて転がった短刀を拾うと、おもむろに自分の喉にそれを突き刺した。
目を剥くすずの前で、短刀はずぶずぶとジャックの喉に突き刺さっていく。
なんたる奇怪！
短刀は完全にジャックの首を串刺しにしているのに、ジャックは笑い続けているではないか。
「俺の肉は限りなく液体に近いんだ。水は斬れないだろう？　だから、おれを斬ることはできない。水は殴れない。だから打撃も通じない。要する何をいいたいかというと、おれは無敵だってわけだ、うわはははは！」
液体人間とも呼ぶべきか、戦慄の肉体を持つジャックはぷるぷる震えながら哄笑した。
「ふん、早く始末しろ。剣を持って逃げた若造を探しに行くぞ」
クイーンがいった。
「そう慌てるなって。リヒャルトの旦那が治めるこのミッドガルズに逃げ場はねえよ。それよりも」
ジャックはすずを見下ろしてにたりと笑い、

「まだネンネのガキだが……お嬢ちゃん。熱く抱きしめて、おれの胸のなかで溺れさせてやるぜ、ひひ」
ああ、胸のなかで溺れさせるとはいかなる意味か！
好色そうに舌なめずりするジャックの様子から察するに、おそらくは……ああ、おそらくは……。
絶体絶命。
この危地を乗り越えるすずの次なる秘策は、いかに!?

## 三

ない。
ありはしないのだ。
傷つき、動くことすらできないすずに、策などあろうはずはない。
クイーンへの奇襲に失敗したときから、すでにすずは死の覚悟を決めていた。
せめてもの救いは、〈時間の剣〉がファルケンの手でここから持ち去られているということである。どこか謎めいたファルケンに世界の命運を握る鍵を預けるのは不安だが、ワ

イルドカーズの面々に剣が渡るよりははるかにましだ。
覆い被さって生臭い吐息を顔に吐きかけるジャックをにらみながら、すずはただ、ファルケンがなんとか無事に∧時間の剣∨を守り抜いてくれるよう、それだけを祈っていた。
「はあああ。女を抱いておれの肉のなかで溺死させるのが、唯一の趣味でな。おまえのような小娘は初めてだが、さて、どんな感触かな？」
ジャックのぶよぶよした胸の肉が、ぐぐ、とすずの顔を覆った。
「あーっ！」
ところが悲鳴をあげたのは、クイーンである。
「どうした！」
跳ね起きたジャックに、クイーンはあれを見ろ、と森の方角を指さした。
「なにっ、あの光は……やべえ！」

――天光満つるところにわれはあり

すずは確かに聞いた。
かつて耳にしたことのある、歌うように響くのあの言葉を！

——天光満つるところにわれはあり
　黄泉の門開くところに汝あり
　　運命の審判を告げる銅鑼にも似て
　　　衝撃をもって世界を揺るがすもの
　　　　こなた天光満つるところより、
　　　　　かなた黄泉の門開くところへ
　　　　　　生じて滅ぼさん

　ぱりぱり、と周囲一体に紫電が走った。
「しまった——！」
「ま、魔術かッ！」
　獣がほえるような雷鳴が轟いたかと思うと、次の瞬間、蒼いいかずちが天を裂き、クイーンとジャックめがけて龍のように走った！
「うおおおおおっ！」
「ぎゃあああああっ！」

さすがの剣鬼も液体人間も、雷の直撃を受けてはたまらない。絶叫をあげてばたばたと地面に倒れ伏した。

魔術、インデグニション！

地、水、火、風、光、闇、無属性、そして雷。八つの体系から構成され、さらに細かく無数の種類がある魔術のなかでも、かなり高位に属する術である。かつてトリニクス＝D＝モリスンがダオスを封印する際に使った術としても名高く、魔術を志す者にとっては、遠く、達しがたい目標のひとつである。

それを使いこなす魔術の使い手とは、いったい——？

「ファルケンさん……」

そう——紫電を帯びて空気がはぜるなかに立つその人物は、他ならぬファルケンである。

そして、蒸発して立ち上る空気に流されて、ゆらゆらと揺れるその長髪のしたには、エルフ族特有のとがった耳がのぞいているではないか。

「すずちゃん！」

ファルケンはすずに駆け寄った。

「大丈夫か？　ああ、くそっ、背中を刺されてるな？　待ってろ、いま法術で治してや

る」
「ファルケンさん……あなたは法術師ではなかったのですか……？　それに……」
朦朧と尋ねるすずの意識を保とうと、ファルケンは大きな声ですずに語りかけた。
「いや、魔術は聞きかじりだ。なにしろエルフの血が流れてるからな。生まれつき魔術を使う才能が備わってるから、とくに努力しなくてもそこそこは……よし、ヒール」
ファルケンの手から淡い光が放たれると、みるみるうちにすずの背中の傷口が閉じていった。
「ふう。これでなんとかオッケーだろう」
「……逃げてくださいっていったのに」
すずは非難するようにいった。
「＜時間の剣＞がやつらに奪われたら、世界はおしまいです。それがわかっているはずなのに」
「おいおい、そりゃないぜ！　おれは――」
ファルケンは息を飲んだ。
鋭い剣が、いつの間にか背後からのどに回されている。
「……私に雷系の術を使ったのが不運だったな」

耳元で囁いたのはクイーンである。
「雷系の技は強力だが、剣を地面に突き立てて電流を放電することで、ダメージを最小に押さえることができる……・。こちらにも魔術のプロがいる。おかげで、対処法は完璧さ。……さあ、まずはおまえに死んでもらうぞ。次は藤林すず、おまえだ。そして最後に∧時間の剣∨をいただく」

四

逆転に次ぐ逆転！
この数刻のあいだ、めまぐるしいまでに、すずたちとワイルドカーズの攻守は入れ替わってきた。そして最終的にワイルドカーズが攻めきった——かにみえる。
しかし読者諸兄よ、まだ気を抜いてはならない。
ここにもう一度、逆転劇が展開されたのである。
「——そうはいかねえなあ」
野太い、しかしどこか場にそぐわない気の抜けた声は、クイーンの背後五メートルの位

置から発せられた。
クイーンはファルケンの喉に剣を回したまま、新たな敵を振り向けないでいる。
振り向いたが最後、ファルケンを挟んで前方にいるすずの剣が飛ぶ。
とはいえ、このままでは背後から一刀両断にされる……。
相棒のジャックが気絶しているのが恨めしい。
クイーンは冷静に状況を計算した。まずファルケンの首を跳ね飛ばし、その勢いで身を転じて背後の新手を斬ることは可能か？　すかさず襲い来るであろう前方のすずの初弾の威力を、ファルケンの死体で殺すことは可能か？
——可能！
生と死の狭間を日々歩んできたクイーンの計算に、狂いはない。感情や思いこみを引き算して、状況を冷静に足していけば答えはおのずと明らかになる。単純ながらも常人には不可能なこの計算ができたからこそ、クイーンはここまで生き残ってこられたのだ。
「おかしなことは考えないほうが身のためだぜ？」
見透かしたように、背後の男が第二声を放った。
「まだ気付かねえかい？　おめえ、囲まれちまってるんだよ」
「……なに⁉」

いわれて気配を探れば――クイーンは歯ぎしりした。ファルケンの背後を取った時点で心に隙が生じたか、いつの間にか、クイーンを取り囲むように人影が展開している。数はざっと二十。

「……何者だ？」

「名乗るほどの男じゃねえ。ミッドガルズから給金もらってその日を暮らす、しがない首斬り役人さ。そんでまわりの御仁たちが――」

「伊賀栗忍軍、推参」

「おじいさま！」

すずは思わず声を上げた。

藤林乱蔵をはじめとする伊賀栗の忍者たちが、鎖鎌を手にクイーン包囲網をじりりと狭めた。

寝込んでいたすずは知る由もないが、処刑場から脱出したアーレスと藤林の忍者たちは、失踪したすずを求めてミッドガルズ大陸をめぐっていたのである。そしてついに、絶妙のタイミングでこの再会をはたした次第……。

「いちど捕らえれば何者も逃さぬ伊賀栗の円縛陣。おぬし、死ぬるぞ？」

乱蔵がいった。

「……ただでは死なん。とりあえず貴様の孫娘、魔術師の若造、後ろの男は道連れにする」
クイーンはそう応えたが、さすがに冷や汗が額を伝っている。
「ふむ」
しばしの思案を経て、乱蔵がいった。
「そこでじゃ。百日将棋にならぬよう、ここはひとつ痛み分けといこうではないか」
「痛み分け？」
「いかにも。剣を納めてここを立ち去れ。さすればわれらも追いはしない」
「〈時間の剣〉はこちらがもらう」
「だめじゃ。それは置いていってもらおう」
クイーンはかなりのあいだ無言で、凍りづいたように動かなかったが、やがて
「了解した」
と剣を収めた。
「いっておくが、私は鞘から抜刀して、貴様ら雑兵なら一瞬で五人は斬れる。約束は守ってもらおう」
「いうまでもないことじゃ」

乱蔵が請け負った。

「……ふん」

クイーンは、くらげのように地面にひしゃげた相棒を肩に担ぎ、じりじりと後退して包囲網を脱した。そして忍者たちの飛び道具の攻撃範囲を完全に抜けると、ひとすじのつむじ風のごとく、森のなかへと走り去った。

「いいのかい、じいさん？」

アーレスが訪ねたが、乱蔵は

「∧時間の剣∨とすずが無事ならそれでも構わぬよ。それに、あやつには上役に伝えてもらわぬとな。最強の忍びたちが復讐に乗り出したとな」

と不敵に笑うのみであった。

## 【第二部】

## 風巻（しまき：風が吹き荒れること）

# 第五章　群雲破軍（むらくもはぐん）

一

暁光のなか、白い砂塵をあとに引いて、ミッテルベルグ街道を二騎、南に駆けてゆく。
ジャックとジョーカーである。
彼らは、一晩で大陸を走破そうなほどの勢いで馬を駆っていく。目指すはミッドガルズ大陸南端の港町・シェーンハイム……。

＊＊＊

連合軍指揮官リヒャルト＝ホニヒスが、消息を絶った藤林の忍者たちの足取りをようやくつかんだのは、その日早朝のことであった。すず、ファルケン、アーレスとおぼしき三名が、シェーンハイムに宿泊しているというのだ。シェーンハイムは、辺境にありながらも、ミッドガルズで現在機能している数少ない港のひとつである。そこに足を向けたとなると、賊のねらいはただひとつ、海路を使ってのミッドガルズ大陸脱出であろう。
シェーンハイムには、五十余名の連合軍兵士たちが駐在している。

しかしこの場合、敵が敵である。ダオスを倒した藤林すず。魔術を使う者もいると聞くし、それにあのアーレスもいる。精鋭五十名をもってしても、その動きをくいとめられる保証はない。

なによりも、アルヴァニスタ側の兵隊に情報が漏洩するのがいちばん困る。

忍者を使って〈時間の剣〉を私物としようとした事実が露見した場合、リヒャルトは絶体絶命の窮地に立たされる。最悪、それがきっかけで連合体制が崩壊する可能性すらある。

すなわち、なんとしてでも自ら手を下さねばならない。

そこでワイルドカーズを呼び出した。

不審人物の数を三人と聞いて、キングはいった。

「おそらく忍者ども、ばらばらに行動しているのでしょうな。二十数名もまとまって行動していては、目立って仕方がありません。もしかしたら、陽動かもしれませぬな」

「陽動？」

「いかにも。われらワイルドカーズをあの港町に集結させ、その隙に――」

キングはリヒャルトを見て冷たくいった。

「リヒャルト様のお命を奪う算段かと」

「な、なに？　私の命を！」

「ご安心を。シェーンハイムには、ジョーカーとジャックを送り、リヒャルト様は私とクイーンでお守りいたす。このミッドガルズには数千の軍隊もおりますゆえ、そう簡単にはことは運びませぬよ」
「私の命を……」
リヒャルトは青ざめて繰り返した。
彼は、使い捨てるはずだった忍者たちが、まさかこのようにいつまでも邪魔になるとは考えてもいなかった。それに、キングに指摘されるまで、忍者たちはただ怯え逃げまどっているものとばかり思いこみ、よもや自分の命を狙って牙をむくなどとは想像だにしていなかったのだ。
「て、天下鎮護の志を持つ私に、忍者ごときが弓を引くとは！　よ、よいか。シェーンハイムの賊どもをかならずや捕らえろ！　捕らえて拷問にかけて仲間の居場所を吐かせ、残さず誅戮(ちゅうりく)してくれるわ！」
リヒャルトは怯えを払うように叫んで、自室に引き上げた。
リヒャルトの背中を見送りながら、ワイルドカーズの面々はにやりとほくそ笑んだ。

## 二

「いきなり囲まれてるとは先方を舐めすぎたかね」
アーレスがいった。
港町の中央にある宿屋の二階、四人用の一室である。
アーレスとファルケン、ふたりだけが部屋に陣取って、窓から市中の様子をうかがっている。
窓からは、活動を始めたばかりのシェーンハイムの中央通りが見下ろせるが、その人どおりのなかに、不自然に行ったり来たりしている連合軍兵士の姿が見える。
「そもそもよ、港はチェックされて当然ってもんだ。やっぱりここに来るのはまずかったんじゃねえか？」
「あんたみたいなでかぶつが一緒じゃ、どんなとこに行ったってじゅうぶん目立つさ」
ファルケンがため息をついていった。
「しかたないだろ、ここからしかアーリィには行けないんだ。それに、本当はおれだってあんなところには行きたくない」
「それよ。逃げるっていっても、なんでアーリィなんだ？　ここんところあんまりいい話聞かねえぜ？」

「……〝雪の魔王〟だろ？」
「ああ、そいつ、そいつだよ！　おまえも聞いてるか？　アーリィ近くの森の奥に住む化け物で、夜な夜な爆発やら悲鳴やらが聞こえるっていう。町の人間に頼み倒されて調査に出向いたミッドガルズ連合の兵隊を、まるごと氷づけにして送り返したらしいじゃねえか。噂じゃ人間をさらって鍋でどろどろに溶かして食うらしい。他にも聞いたぜ。なんでも口から地獄の炎を吹いて一キロ四方の森を焼け野原にしたとか、てっぺんを吹き飛ばして山の形を変えたとか」
一気にいったアーレスに、ファルケンは
「そいつだよ」
と返した。
「なに——？」
「そいつに力を借りようっていうんだ」
「魔王にか？　おいおい、おまえさん、正気かい……？」
ファルケンがなにかをいい返そうとしたときに、天井の板がずずず、とスライドし、そこから人影が飛び降りた。すずである。
「あたりは完全に包囲されていますすね」

すずはいつもの感情を込めない口調で、偵察の結果を報告した。
「このままでは、とてもではありませんが船には乗れそうもありませんね」
「おいおい、お嬢ちゃん！」
大丈夫です、とすずはアーレスを制して続けた。
「宿に泊まって正体が露見するようしたのはわざとです。わたしたちがここにいるという情報は、昨晩ここを立って今朝がたミッドガルズに伝えられたはずです。とすれば、ちょうどのはずです」
「ちょうどのはず？」
ファルケンの問いに、すずはにこりと笑った。
「朝ご飯をとりませんか？　朝、しっかりご飯を食べないと身体に悪いですから」
アーレスとファルケンは思わず顔を見合わせたが、すずは天使のような笑顔でくに、と小首をかしげるだけだった。

三

「――どう、どう！」

ジャックとジョーカーがシェーンハイムに到着したのは、昼も近い十時過ぎであった。曇天のシェーンハイムには海を渡った風が吹き、それはもう耳がもげ落ちそうな寒さである。
「畜生め。こんなくそ寒いなか長いあいだ馬に乗らせやがってよ。痔血になったらどうしてくれるってんだ、なあ？」
ジャックはジョーカーにいったが完全に黙殺され、愛想のねえ野郎だ、と吐き捨てた。
ジャックたちは馬をつないで町に入り、ミッドガルズ連合軍の兵舎に向かった。
「お待ちもうしあげておりました！」
「おう。状況はどうだ？」
「はっ。昨晩から宿屋をとりかこんで見張っておりますが、やつら動く気配はありません。藤林一党の事件に関しては、可能な限りワイルドカーズの皆様が到着するまで待機しろとの下知を受けておりますので、包囲後待機のまま現在に至っております！」
「よしよし」
ジャックは兵士の頭をなでてから
「そんじゃま、始めますか」
といった。

ジャックの命令を受け、シェーンハイム駐在の兵士五十人あまりが兵舎にかき集められた。全員が武装を整え、賊三名のうちふたりは殺して良し、ひとりは生かして捕らえるようにとのジャックの指示を受けた。監視に残った兵士から、敵いまだ動かずの伝令を受け、十時半過ぎ、ついに捕縛隊は動いた。

逃走に使われそうな道を完全に封鎖し、それから一気に宿屋を取り囲む。邪魔になる市民を周囲から排除し、混乱を避けることも怠らない。

ジャックは、兵舎にあったサンドイッチをかじりながら、整然と動く兵士たちを満足げに眺めていたが、

「できればあの魔術師の若造だけは生かして捕らえて、ゆっくりとおれの手でかわいがってやりたいもんだ。……けけけ、年貢の納め時だぜ、坊や。ところでジョーカーさんよ？」

といった。

「――ところでエルフと忍者は年貢納めてんのか？」

冗談が気に入らなかったのか、元来無口であるのか、ジョーカーは無言のまま、宿屋二階の窓を見つめているだけだった。その顔を覆う包帯を、潮風がはためかせていく。

風すさぶシェーンハイムに、さらなる嵐が吹き荒れようとしている……。

## 四

岩盤のごとき堅固な包囲網を見下ろしながら、アーレスとファルケンはさすがに焦りを感じ始めていた。

まかせてください、とふたたび天井穴から消えたすずを信じてはいたが、はたしてあの忍者少女、この状況をどのようにするつもりなのだろうか？　ダオスを倒した英雄ということは知っているが、だからといって、さすがにこのような大群を倒せるということはないだろう。しかも、朝食などをとってぐずぐずしていたおかげで、ワイルドカーズの二名までもが包囲陣に加わってしまった。ひとりはあらゆる物理的攻撃を受けつけないジャック、もうひとりはまだ謎に包まれたジョーカーである。

それでも二人が、すずがこのまま自分たちを見捨てて逃げたとは考えないのは、ひとえにすずの瞳にある純粋なひかりを信じてのことだ。

「——おおい、聞こえるか！」

窓の向こうから、聞き覚えのある声が飛び込んできた。

「いるんだろ。わかってるから返事しろって！」

ジャックの声である。
　アーレスとファルケンはしばし顔を見合わせていたが、やがてあきらめたようにアーレスが返事をした。
「朝っぱらから耳障りな声出してんじゃねえ、ハゲ！」
「おう、威勢がいいじゃねえか。おまえさん、首斬り役人のアーレスだな？　リヒャルトの旦那を爆弾で吹っ飛ばしたらしいな。旦那、かんかんになって怒ってたぜ？」
「そりゃどうも！」
「ひとつ聞きたいんだが、おまえさん、ミッドガルズにおまんま食わせてもらってて、どうして忍者なんかの肩ぁ持つ？　空に向かって唾吐けば、自分の顔にぶっかかるだけじゃねえか」
「あいにくガキの頃から忍者のファンでよ」
「ふざけた野郎だ！」
「おたくの顔もな！」
「ふん。投降する気があるか聞いてみるつもりだったが、時間の無駄だったぜ」
　ぺえっ、と音を立ててサンドイッチの破片を吐き捨て、ジャックが叫んだ。
「突撃！」

「来るぞ！」
「南無三！」
アーレスが斬首刀を構え、ファルケンが魔術発動の精神集中を始めたときである。
「――おい、突撃だ！　突撃しろってのが聞こえねのか！」
なぜか兵士たちの突撃の鬨の声はなく、ただジャックの命令だけが聞こえてくる。ひどく狼狽した様子の声だ。
アーレスが弓矢の一撃を警戒しながら窓から見ると、なにが起きたのであろう、兵士たちが一様に地面にうずくまって身もだえしている。なかには、うめきながらのたうち回っている者の姿もある。その異様のなかに、呆然の体でジャックとジョーカーが立ちつくしているのである。
「お、おい、いったいどうしたってんだよ、こら！」
ジャックは不気味なものに触るような具合で、おそるおそる足下の兵士に声をかけたが、
「うわっ、臭え！」
と突然、弾かれたように飛び退いた。
「ま、まさかおまえら、こりゃあ……やりやがったな、くそーっ！」
ジャックは叫んで手にしたサンドイッチを地面に叩き付けた。

「て、て、てめえら、あ、朝飯になに入れやがった！」

ど、ど、ど、ど。

大地と空気を震わせて、なにかが来る。
通りの遙か向こうから、人々の悲鳴と怒号をかきわけてなにかが迫る。
「おおっ！」
窓枠に身を乗り出して叫んだのはアーレスかファルケンか！　彼らの目に飛び込んできたのは、予想外の増援部隊の姿であった。
「なんだってんだよ！」
しかし、地上にいるジャックは、いまだ不気味な地鳴りしか聞くことしかできない。何かが迫りつつある。何かはわからない。しかし、破滅の気配は痛いほど肌に感じ取れる…。
「畜生めっ。なんだってんだよ！」
「――畜生だ」
はじめてジョーカーが口を開いた。外見に似合った、不気味なしゃがれ声である。
「ち、畜生って……」

「けだものだよ。けだものの群れが来る！」

# 五

「はいやっ！」
鋭く鞭をいれながら、すずは叫んだ。
鞭に応えて、体長三メートル半にも及ぶ巨大な怪物二十頭が、土煙をあげて市中を走る。逃げまどう市民の悲鳴を切り裂いて、巨大な軍勢が町を走破する。

伊賀栗流群雲破軍の計！
動物の群を使って敵を混乱させる兵法をいう。
グレートタスクという、鋭い角を持つ、このバッファローにも似た猛獣の群れが食用素材として十時半に入港してくることを、すずは事前に調べ上げていた。歴史に名高いヴァルハラ戦役のさなかでも遅れたことがなかったといわれるくらい時間に正確なシェーンハイムの貿易船である。すずは安心して、この猛獣を中心に据えた作戦を組み上げたのである。

入港した船に潜り込み、檻の鍵をはずし、先頭のグレートタスクを誘導すれば、群れで活動する性質を持つ彼らを目的地に突撃させることができる。そして、このどう猛な援軍を有効に活用するためにも、敵兵には正確に十時過ぎに宿屋を襲ってもらわなければ困る。とすれば……。

すずは周到に計算をめぐらせた。

警戒厳重なシェーンハイムの宿屋に宿泊することで、すずは敢えて、敵に自分たちの位置を知らしめたのである。深夜に宿屋に入れば、その情報は夜を徹して千里を走り、翌早朝、ミッドガルズに伝えられる。リヒャルトはワイルドカーズ投入を決定し、彼らをここシェーンハイムに派遣する。そして、ワイルドカーズが到着して宿屋を取り囲むのは、ほぼ確実に十時過ぎになる。そして、

——朝飯に何をいれやがった！

とジャックが悲鳴をあげたとおり、すずは十時過ぎに効果を発揮する毒薬を、兵士たちの朝食に盛った。数々の猛毒が伝わる伊賀栗の里でも「最悪の毒薬」といわれる、四五日は便器から離れられない強力なヤツである。

猛スピードで走るグレートタスクの背中にすっくと立ち、すずは走る。

港を抜け、町外れを抜け、大通りを抜け、仲間の待つ宿屋、宿屋を包囲した敵のどまんなかへと！

走る！

走る!!

走る!!!

宿屋の屋根が目に入ったかと思うと、あっというまに目の前まで宿屋の全景が迫る。突撃先には、尻を押さえて必死に逃げる兵士たち、そして、通りの真ん中に、魂が抜けたようにグレートタスクを見つめて立ちつくすジャック……それにあの包帯の男はジョーカーか！

「うおおおっ、藤林ッ！」

叫んでジャックは、グレートタスクのひづめのしたに飲み込まれて消えた。あらゆる物理攻撃を受けつけない魔人とはいえ、ここまでの絶対的な力の奔流に巻き込まれてしまってはなすすべがない。

すずは、二階の窓から様子を見下ろしているファルケンたちに、叫んだ。

「ファルケンさん、アーレスさん！」

「すずちゃん！」

「跳んでっ。跳んでください！」
「おうよ！」
アーレスは小脇にひょい、とファルケンを抱え、
「南無三ッ」
とひとこえ窓から身を躍らせた。なんとかバランスを保って、連なって絨毯のように広がる猛獣の背中にどっかと着地する。
「か、勘弁してくれよ、寿命が縮まる！」
ほっと安堵の息を吐くファルケンに、アーレスは鋭く警告した。
「気ぃ抜くのは早いぜ、あんちゃん。まだ終わってねえ……」
すずが慌てて振り返ると、いかなる妙技をもってしてか、同じくグレートタスクの背の上にひとりの男がゆらり立っている。疾駆する群れの先頭に位置するすずから、中程に位置するアーレスとファルケンを挟んでほぼ最後尾。距離およそ一〇メートル先に、ほどけかかった包帯を風になびかせて立つその怪人物は……。
「ジョーカー！」
すずは叫んだ。
「ジョーカーってガラの楽しい外見かよ！」

アーレスはすでに、背中から斬首剣を引き抜いて肩に背負うように構えている。どんより濁った目でそれを見つめるジョーカーはといえば悠然と徒手、空拳のままであるのがかえって不気味だ。
「気をつけてください、アーレスさん、ファルケンさん！　リヒャルトの手下、ワイルドカーズのひとりです！　どんな技を使うのか、まだわかりません！」
「頼もしいアドバイス……ああっ⁉」
ファルケンが驚愕の声を上げたのも無理はない。不安定きわまりない足場を蹴って、ジョーカーがふわりと宙に舞い上がったのである。
両腕を広げて猛然と躍りあがったジョーカーは、怪鳥のようにアーレスたちに襲いかかった。
「こなくそ！」
空中をなぎ払ったアーレスの巨大な剣ではあったが、ジョーカーはその剣をたん、と蹴ると、さらに空中をはしってすずへと飛んだ。あまりに身軽、人間離れした体術に、さすがのアーレスも度肝を抜かれて声をあげる。
「しまった、お嬢ちゃん！」
「行かせない！」

ファルケンが叫び、頭上を越えていくジョーカーに魔術を放った。
「ストーム！」
威力としては風系最弱の魔術を敢えて放ったのは、詠唱時間の短さを重視したせいもあるが、猛烈な風圧を利用しようという意図もある。
はたしてファルケンのねらいは見事的中し、突然の向かい風にジョーカーはぐらりと体制を崩した。その隙を見逃すすずではない。間髪入れずに投げつけられた短刀が見事ジョーカーの腹を射抜き、次の瞬間、そこに向かって幾条ものいかづちが走っている！
「見たか——伊賀栗流忍法、雷電！」
凄まじい閃光と肉の焦げるにおいがし、そしてジョーカーの身体は短刀が刺さった部分から上下まっぷたつに裂けて、きりもみしながら落下した。ジョーカーの死体はどん、とグレートタスクの背中に落ち、それから転げ落ちて消えた。
「やっと、ひとり……」
独り言ちたすずの肩を、アーレスはぽんと叩いて
「お見事」
といった。
「で、このあとの算段は？」

「十一時に港を出るアーリィ行きの船があります。兵隊たちが混乱して動けないあいだに、それに乗り込んでここから脱出しましょう」
「船員がごねたら?」
「シージャックするしかないですね」
こともなげにいうすずに、ジャックは肩をすくめて、最近の女の子は、と笑った。
「ほんと、こわいねえ」

# 第六章　再会

# 一

日に日にファルケンは不機嫌になっていく。
船を下りた日よりも二日目が、アーリィで一泊した二日目より三日目が、そして四日目の今日がいちばんひどい。苦虫を噛みつぶしたような顔で、黙々と雪原を歩いてゆく――。
アーリィで物資を補給したすずたちは、ついでにと、住民たちから雪の魔王の情報を聞き込んだ。ほとんどがすでに耳にしている、やれ山を吹き飛ばしただの、やれ人間を食べるだのといったものだったが、ひとつだけ、背中に生えたコウモリの羽根で空を飛ぶらしいという新情報も入手できた。しかしファルケンはこの情報収集活動にも加わらず、「寝る」といって宿にとじこもりっきりであった。
そもそも、この悪名高い雪の魔王を仲間に引き入れようと強硬に言い張ったのはファルケンである。無論、すずもアーレスも、そのような怪物など仲間にしても意味がないし、そもそも力を貸してくれるはずがないと主張したのだが、ファルケンは「魔王は魔術に詳しく、絶対に役に立つ」の一点張り。穏和なこの男にしては珍しく譲ろうとしない。

そうこうするうちに雪原行は進み、すでに魔王が住むと噂される雪の森、シュヴァンの入り口に一行はいる。日が傾き始めているのを見て、森の入り口にキャンプを張って野営を行います、とすずは仲間たちにいった。

＊＊＊

夜中。
見張り交代の時間になって、ファルケンは寝袋から這い出した。むっつりとした顔で、先の見張りをしているすずの元に向かう。
ぱちぱちと音を立てるたき火を前に、すずは座って手を火にかざしていた。お疲れさん、とファルケンが声をかけると、すずはにっこり笑って
「あ、ファルケンさん！　もう交代の時間ですか？」
と立ち上がり、手をこしこしとこすり合わせた。
「寒いですね、ほんとうに」
「まあ、雪のなかだからね」
ファルケンはぼそぼそといって、すずが座っていた倒木に腰を下ろした。ふう、とため

息をついてしばらく揺れる炎を見つめていたが、背後ですずがもじもじと立ち止まってい
るのに気づき、どうしたの、と尋ねた。
「いえ。なんでもないんですけど」
「早く寝たほうがいいよ。明日、森のなかを歩くのは今日以上に厳しい」
「はい」
いったがそれでもすずは、ファルケンの顔と足下の雪を交互にちらちら見ながら立ち去
ろうとしない。
「おしっこ？」
ファルケンが訪ねると、
「ち、違います！」
と真っ赤になってふるふると首を横に振る。
「じゃあ、なに？」
「いえ。あの——」
すずは視線をつつ、とおろした。そして行進するように脚を交互に上げ下げしながら、足
下の雪をしばし踏み固めていたが、ようやく決心が付いたのか
「どうして怒っているんですか？」

といった。
「怒ってないよ」
「怒ってます」
「怒ってないってば」
「怒ってます」
「だから！」
「怒ってますね？」
ファルケンははあ、とため息をついた。ふたりは白い息が空気にとけていくさまを見つめて無言のまま、互いに相手が口を開くのを待っているような具合だったが、けっきょく最初に口を開いたのはすずであった。
「わたし、なにかしたでしょうか？」
「え？」
ファルケンは意味をとらえかねて、間の抜けた返事をした。
すずはまた黙って雪を踏み固めはじめた。きゅっ、きゅっ、という音が静寂に響く。
「なにかしたって、どういう意味だい、すずちゃん？」
「あの、わたし、忍者なんです」

「知ってるけど」
「小さなころからずっと伊賀栗の里で育ちました」
「らしいね」
「ですから、世間一般の常識がないというか、ぜんぜん気がきかないというか」
すずは足踏みをとめると、ぺこりと頭を下げた。
「だからなにかお気に障ることをいってしまったり、してしまったのだとしたらごめんなさい」
ファルケンはあんぐりと口を開いてすずを見つめていたが、やがてふふふ、と優しく笑った。
「……なにかおもしろかったでしょうか、わたし？」
「いや、そうじゃないんだ。ごめん」
ファルケンはよいしょ、と倒木から腰を上げ、それからぺこりとすずに頭を下げ返した。
「ごめんな。すずちゃんのせいなんかじゃないんだ。大人げないよな、ホント」
ファルケンは倒木に座り直し、横に積もった雪を手で払ってから、座らないか、とすずに勧めた。
すずは遠慮がちにそこにちょこんと腰を下ろし、どこを見ていいのかわからないといっ

た感じで自分の膝や、手や、たき火のはぜる炎をちらちらと見やった。
「噂に聞いていたとおりだ。すずちゃんは優しいんだね」
「いえ。そんなことはありません」
すずは恥ずかしそうに身を丸く縮めた。
「ガキの頃からずっと聞いてたよ。藤林すず。世界を救うために時間を超えて戦った英雄のひとり。天才忍者。責任感があって強くて。でも本当はちっちゃくて優しい女の子なんだって」
「ちっちゃいのだけ本当ですけど」
「世界を救うために時間を超えて戦った英雄……か」
ファルケンはどこか遠くを見るような目でいった。
「アルベイン流剣術の使い手、時空剣士クレス＝アルベイン」
「ミント＝アドネードさんは法術を使うんですよ。きれいなひとです」
「チェスター＝バークライトのことは覚えてる？」
「もちろんです！」
チェスターの名前を聞いて、すずの顔にほんわりと暖かい笑顔が広がった。
「チェスターさんは弓の名手で、とても優しいひとなんです。わたしがいろいろつらかっ

たときになぐさめてくれて……ふふ、わたしのお兄ちゃんみたいなひとなんですよ」
「おれのおやじなんだ」
「え？」
「アーチェ＝クラインは覚えてる？」
「も、もちろん覚えていますけど……」
「そいつが雪の魔王なんだよ」
ファルケンは頭を抱えていった。

二

「きゃあああああああっ！」
ドアを開けたアーチェ＝クラインの第一声は、悲鳴のような歓声だった。
「ひっさしぶりじゃん、すずちゃん！　うわー懐かしいなっ！　あたし、わかる？　あ、わかるって、わかるから来てくれたんだよね、えへへ。うわー、うわー、それにしてもよくこんな森の奥まで遊びに来てくれたねぇ！　ちょっと待ってて、ココア入れるからココア！　入って入って、ささささ、ちらかってはおりますが、ま、ささささ、入った入った！

こっちこっち！」

アーチェは手足をばたばたさせながら小屋の奥に駆けていき、廊下の角を曲がるあたりで急にぴたりと立ち止まった。そして、ぎぎぎ、と錆びた音がしそうな具合でゆっくりと顔だけ振り返り、

「あ、ファルケン」

といった。ファルケンはあきれていった。

「あ、ファルケン、じゃねえよ！」

「……ういっす」

「ういっすでもない！」

ファルケンの後ろで、アーレスがべっくしょん、とくしゃみを放った。

「おい、ファルケン。悪いんだが親子喧嘩はあとにしてくんねえか？　とりあえず家んなか入れてほしいんだけどな」

＊＊＊

ちらかってはおりますが、と紹介された部屋は、本当にちらかっていた。

森のなかに数十年も前から放棄されていたどこぞの貴族の別荘を、アーチェが半年前に無許可で別荘にしたものだという。二階建てで部屋数も十余りと多いが、時間の流れが与えた痛みも激しい。結局使えるのは数部屋だけで、その数部屋も、アーチェによって目を覆うまでに散らかされていた。

床にもソファにも魔術の研究書が転がり、台所には汚れた皿が積み重なって塔を作っている。さすがにアーチェも照れくさかったのか、「オリーブヴィレッジ炎の塔、なんちて！」とギャグを放って、皿の山を魔法の炎で消し去ってしまった。

「あ〜あ。ふとんくらい畳んでベッドの上に置いておけよ。だいたいなにが起こると、ふとんが部屋の真ん中に落っこちるようになるわけ？」

ファルケンはぶつぶつと文句をいいながら手早くあたりをかたずけ、なんとか人間四人が座れるスペースを確保した。

「えへへ、お恥ずかしい。一人暮らしだとどうしてもね、うん」

「一人暮らしじゃなくても掃除なんかしないだろ」

「あによ！」

険悪になったアーチェとファルケンを分けるように、すずがあいだに入っていった。

「ア、アーチェさん、ずいぶん難しい魔法の本、読んでいるんですね！」

それを聞いて、アーチェははああ、と深いため息をついた。
「そうなのよ～。さすがにこれだけ生きると、こういうのを読まないと時間を持て余すっていうか、ズバリいってヒマひまになっちゃうわけ。あ～あ、やだなあ。こうやってどんどんおばあちゃんになってくんだよねぇ」
「わたしにはぜんぜん変わっていないように見えますけど」
「ぱっと見はね。でもお化粧のノリとかがぜんぜんだめ。……いいよなあ、すずちゃんの場合、ダオス倒してから一年しか経ってないんだもんね。ぜんぜんあのときと変わってないや」
「でも、ちょっとだけ身長が伸びました」
「へえ！　どれくらいどれくらい？」
「あの……ほんとにちょっとなんですけど……・一センチ」
「ずるっ。でもでも！　女の子の場合背じゃないわよ、背じゃ！　こうボイーン、バキュッ、バイーンと――」
「いい加減にしろ、脳味噌スポンジ女！」
ファルケンが叫んだ。
「の、脳味噌……あんた、ママに対してそんな口きいていいと思ってんの⁉」

アーチェが怒鳴りつけたが、ファルケンはひるまない。
「こういうときだけ母親ぶるな！　掃除洗濯家事全般、みんなおれとオヤジにやらせておいて。しかもおやじのことほっぽりだしていきなり家出とはどういう了見だ！　おやじ心配して、白髪増えたって嘆いてたぞ！」
「白髪って、とっくの二十年前から白髪じゃん！」
「あんたが浮気なんかするから、おやじは若くして白髪になっちまったんじゃないか！」
「し、してないも～ん！」
「した！　泣いておやじに謝るのを、おれがあいだにはいってとりなしてやっただろ！」
「しーてーまーせーん！　したっていうなら、アセリア暦何年何時何分何秒にした⁉」
「まあまあまあまあ」
アーレスが見かねてあいだに割って入ったが、すずは口に手を当ててくすくすと笑うだけである。
「こら。笑ってねえで嬢ちゃんも止めろって！」
「すみません。なんだか懐かしくって」
すずは笑い涙を指でくい、とぬぐっていった。
「チェスターさんとアーチェさん、ずっとこんな感じでしたから」

ファルケンがぶすっと黙ってすずを見て、それにあわせたようにアーチェも口を閉じた。
それがきっかけで急にトーンは下がり、部屋に沈黙がおりた。
一同はしばし無言でココアを飲んでいたが、やがてぽつりとファルケンがいった。
「……雪の魔王って、なんだよ？」
「しらないもん。勝手にバカっちどもがいってるだけだもん」
「人間溶かして食ってるらしいじゃないか」
「冗談！　雪原に迷い込んだ子供を町まで送り返してあげてるくらいよ」
「ミッドガルズ連合の兵隊を氷づけにしたってのは？」
「だってあいつらひどいんだよ？　家の外からいきなりなんの挨拶もなしで火矢撃ってきて！　あ～、思い出しただけでちょうあたまくる！」
「口から火を噴いて森を焼いたってのは？」
「あ、あれは開発中の火の魔法が暴発して……」
「山のてっぺん吹き飛ばしたのは？」
「あんなところに山があるのが悪い！」
ふふん、と胸を張るアーチェに、あきれかえったのかファルケンも反論できない。
「まあいいや。悪党になっちまったわけじゃないいんだな」

「あたりまえじゃん！　実の母親を疑うとはあんたいったいーー」
「黙ってろ」
　ファルケンはぴしりといった。
「頼みたいことがあってここに来たんだよ」
「ほえ？　ミゲールに連れ戻しに来たんじゃないの？」
「違うよ。すずちゃん、例のものを」
　うながされてすずは、袋に入れた〈時の剣〉をアーチェの前に置いた。
「あっ、これは⁉」
　アーチェの大きな目が、さらに見開かれた。
「……なんだっけ？」
「おいおいおいおいおいおーい！　〈時間の剣〉だよ、〈時間の剣〉！　あんたたちがダオスと戦ったときに、ダイヤモンドの指輪と、炎の剣フランヴェルジュと、氷の剣ヴォーパルソードを使って……」
「あ、そうそう！　クラースがオリジンを召喚して創ったあの剣か！　うーん、懐かしいなあ。あのころはわたしもまだ若かった……」
「はいはいはいはいはい。で、この剣は本来、クラースさんがアセリア暦四二〇二年に封印し

たものなんだ。ところがいま、その封印を解いて剣を悪用して、第二のダオスになろうとしている連中がいる」
「ダオス」
アーチェの目に鋭い光が宿った。まぎれもなく、かつて世界を救った英雄の目である。
「詳しく聞かせてちょうだい」

三

「なるほどね」
ことの次第を聞き終えて、アーチェはどん、と胸を叩いた。
「あたしたちがやったことを台無しにしようとしてるやつらがいる。そりゃあもう、やるしかないでしょう！　任せてよ。うーん、ひさびさ血が騒ぐじゃん！　相方はもう白髪のじいさんだけど、生涯現役、永遠ぴちぴち、救国の大魔術師、このアーチェさんが味方になったら、そりゃあ矢でも魔導砲でも持ってこい、もうひゃく……ひゃくにんりょく？」
「百人力(りき)」
「そうそう、それよ、わは、うわーははははー！」

ファルケンは頭がいたい、とこめかみを押さえてうつむいてしまったが、アーチェの実力を知るすずは、誇張ではなく百人の友軍を得たような気持ちだった。なによりも、またアーチェと旅ができるのが嬉しかった。

いうまでもなく、打倒ダオスの旅は、すずにとって過酷な旅であった。

すずは旅の過程で、ダオスに洗脳されて敵となった多くの伊賀栗忍者たちを倒さざるをえなかった。そして敵のなかには、すずの父親銅蔵と、母親おきよの姿もあったのだ。

それでもあの旅で、すずははじめて人の心の温かさを知った。クレス、クラース、ミント、チェスター、そしてアーチェという無二の親友を、第二の家族を得た。多くのことを学び、それらは現在のすずを語るうえで外すことのできない大切なものばかりである。

――チェスターさんがいたらな。

すずは思う。

いままでも、ミゲールに渡って、チェスターと逢うことはできた。実際、任務でユークリッド大陸に出向いたことも数回あった。それでもすずは、ミゲールには立ち寄らなかった。

すずは、五十年の歳月を重ねて年老い、変わってしまったチェスターを見るのが怖かった。大切なチェスターが、自分の知らない人間になってしまっているのではないかと、そ

して、もしかしたらチェスターは死んでいるのかもしれないと思うと、怖くて足が止まってしまったのだ。
それでもこうして昔となんらかわらないアーチェを見ていると、逢いたい、という思いが押さえきれなくなる。そして、自分たちが体験した冒険の特異さ、時間を越えるということの奇妙さを、改めて深く想うのであった。

＊＊＊

せっかくだからあたしが作る、と腕まくりするアーチェを一同総掛かりで止め、結局ファルケンがこしらえた卵料理が夕食となった。
「ところでアーチェ姐さんよ」
食後、ぱんぱんに膨れた腹をさすりながら、アーレスが尋ねた。
「なに？」
「時空転移の術ってのは、〈時間の剣〉さえあれば誰でもできるってもんじゃなくて、呪文唱えたりなんだりのしちめんどくせえ手順がいるわけだろ？」
「まあね。クレスみたいに、英雄としての……特性？　そういうのが備わってる選ばれた

人間であれば簡単に使いこなせるけど、まあ、そんなのはレアよね。あのクラースでさえも、四二〇二年に戻ったときには、えらい複雑な呪文を唱えてたくらいだから。かなりそっち系に精通してないと、だめでしょうね」
「姐さんにはできるのかい？」
「うーん。あたしはいうまでもなく天才だけど、専門は魔術だかんね。よくわかんないけど、時空転移の術はたぶん、精霊オリジンあたりの力とふかーく関係してる術だと思うわけよ。魔術の要素もミックスされてるかもしれないけど、どちらかというと召喚術の領域に入る術なんじゃないかな？」
　それに、とファルケンが補足した。
「その儀式のやりかたも、いまは失われてしまったんだ。クラースさんが時空転移の呪文やシステムを記した魔法書、『レスターズ・エヴォケイション』って本があるらしいんだけど、世界に数冊しかないといわれる伝説の品でね」
「レスターズ・エヴォケイション……」
「ああ。時空転移の秘法はクラースさんが古代の文献から発掘して編み出したもので、真髄はクラースさん本人しか理解していなかったのさ」
「ということは」

とすずがいった。
「リヒャルトの腹心には、少なくともクラースさんに匹敵するくらいの召喚師がいて、おそらくは『レスターズ・エヴォケイション』を手に入れているということですね」
「キングとかいう野郎がそいつじゃねえことを祈るぜ、おれは」
アーレスがめずらしく真剣な顔でいった。
「……クラース＝F＝レスター……レスターズ・エヴォケイション……」
眉根に山を作ってアーチェがつぶやく。
「なんか聞いたことあるような気がするんだけどなあ。クラースがよぼよぼじいさんになってた頃、そんな本を書くとか書かないとかいって、あたしが年寄りに冷や水とかいったらすっごく怒ってたような……あれって、その本だったのかなあ」
「よぼよぼじいさんって、クラースさんがですか？」
すずが驚いていった。
すずの頭のなかには、すらりとして自信と野心に満ちた青年クラースの姿しかない。あのクラースが老人になった姿など想像もできないし、したくもない。
「そりゃクラースだって人間だもの。歳くらいとるわよ。あたしゃ、お葬式にだって参列したんだから。それで傑作なのはさあ、クラース、倒れる前に自分で自分の伝記を書きた

めててて、それをお葬式のときに参列者に読んで聞かせるようにって、奥さんのミラルドさんに頼んだわけよ。びっしり三百ページとかあって、読むのに半日がかり。しかも全部自慢話っぽいわけよ〜。自分はこんな活躍をしたとか、こんな発見をしたとか、ミラルドさんがどうしても結婚してくれってごねたからしょうがなく結婚したとかさあ！　もう、なんだかクラースらしくって、泣きながら笑っちゃったわよ、あたしは！」
うしゃしゃ、と手足をばたつかせて笑うアーチェだったが、すずには、一年前に別れたばかりのクラースが、もう百年もの昔にこの世を去ったことになっているという事実が、たまらなく寂しく思えた。
そんなすずの気持ちに気づいたか、アーチェはふと笑いを止めて、しみじみとした実感を込めていった。
「ねえ、すずちゃん。人が死ぬ。それは自然なことなんだよ。古い命が消えて、新しい命が生まれる。廻ってるの。ぐるぐるぐるぐる。死は終わりじゃないし、始まりでもなく、途中なの。だから天寿を全うしたら、笑って見送ってあげるのが正しいお別れのしかただと、あたしは思うな。……ま、かくいうあたしもそう簡単には割り切れてないんだけどさ！」
アーチェは少し寂しそうに、えへへ、と笑った。

そんなアーチェをファルケンは複雑な表情で見やり、いった。
「おい……」
が、ファルケンの言葉は、かつっ、という鋭く高い音によってさえぎられた。
一同の視線がキッチンの奥の壁に突き刺さる一本の矢に注がれ、それからそれが飛来してきた窓へとスライドした。
「——伏せろ！」
さすがは戦い慣れしたアーレス、一瞬の判断であった。叫ぶと同時に、窓に向けて垂直にテーブルを倒した彼の機転がなければ……。

かかかかかかかかっ！

数十本の矢によって、テーブルは一瞬にして矢ぶすまに変えられた。
「あーっ、しょうこりもなくミッドガルズのバカ兵隊どもがやってきたな！　今度という今度は氷づけじゃ済まさん！　カチンコチンに凍らせてからかき氷にしてシロップかけて食べてやる！」
アーチェは怒り狂ったが、テーブルから窓の向こうをのぞき見ていたアーレスは

「どうもそう簡単にゃあ、いきそうもないぜ」
と苦しげにつぶやいた。
「ワイルドカーズのお出ましだ」

# 第七章　レスターズ・エヴォケイション

一

小屋を包囲した弓兵たちは、アーリィに駐在していた連合軍の者たちで、数は十数と少ない。
しかし今回は、一騎当千のワイルドカーズの面々が揃ってそこに加わり、遠目に様子をうかがっている。
ジャック。
クイーン。
キング。
そして目を疑うのは、そこにジョーカーの姿があることである。
われわれは確かに、港町シェーンハイムで雷電を受け、ふたつに裂けたジョーカーを見た。しかしこの包帯姿、腐り水のような目、全身から漂う不気味な殺気。このような異様をすべて兼ね備える人物は、世界広しといえどもジョーカーただひとりだ……。

＊＊＊

シェーンハイムからアーリィまで、すずたちの所在探索まで含めたすべての時間的遅れを取り戻したのは、ひとえに魔科学の産物、レアバードの手柄である。ミッドガルズ王家が所有していた大戦の遺物をリヒャルトが徴用し、ワイルドカーズたちは海を越え、山を越えてここまでやってきた。

決着をつけるつもりでいる。

リヒャルトは、これからみずからの陰謀を〝第二段階〟に進めるつもりでいる。そのためにも早急に〈時間の剣〉を奪還し、すずたちを始末しなければならない。さらに、再度にわたるワイルドカーズの無様な敗走ぶりに、リヒャルトの堪忍袋の緒にも限界が迫っている。

「休まず火矢を放ちつづけろ」

キングの命令に従って、次から次へと炎の矢が赤い軌跡を引いて天を走る。そして突き立った矢から壁へと、さながら蛇のように火が走っていく。

あっというまに屋敷の外壁は完全に炎に包まれた。

その様子を、クイーンが震えて見ている。

「……頼む、キング。勝負させてくれ」
うめくようにいった。
剣の地獄に生の喜びを見いだす剣鬼クイーンにとって、すずとの決闘で一敗地にまみれた最強の誇りは、絶対に取り戻し、ふたたび自らの頂点に据えて輝かさなければならないものである。
しかし、キングは冷たい視線を投げただけだ。
「勝負はついている。すでにおまえは藤林すずに負けたのだ」
「……さらなる修練を積み、私の天地両断剣は死角なしの無敵剣へと成長した！　いまいちど、果たし合いの機会をくれ！　藤林すず、火で焼き殺すにはあまりに惜しいやつ。このあと生涯をもってしても、あれほどの使い手に巡り会えるかどうか、わからないのだ！」
血を吐くようにいう。
「——おれからも頼むぜ、キングさんよ」
すずたちに散々煮え湯を飲まされ続けてきたジャックがいった。
「焼き殺すだけじゃ足りねえ。手足バラバラにしてカラスの餌にしなきゃ気がすまねえ。やらせてもらえねえなら、おれはもうおりる」

「おりる?」
「おりる。あんたと組むのもここで、この瞬間、金輪際最後ってこった。もうついていけねえ。おれはおれの生きたいように生きさせてもらう」
「そう簡単に途中下車できると思うか?」
「おりてみせるさ」
ジャックの目に、すっと危険な影がおりた。キングは困ったものだ、とため息をつき、ジョーカーに
「おまえも同じか?」
と尋ねた。
ジョーカーはしばらく黙って炎上する小屋を見つめてから
「おれは約束の金さえもらえればどちらでも構わん。ただ、このままやつらが素直に焼け死ぬとは思えん。突入してとどめを刺した方がいい」
といった。
「私は藤林すずを斬る」
ジョーカーの言葉を受けてクイーンがいう。ジャックがそれに続ける。
「だったらおれはアーレスと、アーチェ＝クラインと、優男をやる。ジョーカー、おまえ

さんのぶんはねえぜ？　おまえさんはやつらの逃げ道でもふさいでろや」
クイーンの声にもジャックのそれにも、はらわたをむりむりと絞り出すような苦い響きがある。究極まで煮詰めた殺意がある。
「仕方あるまい。好きにするがいい」
キングもさすがに匙を投げた。
「ただし、おまえらのプライドを満たすために、ここまでほぼ完璧となった計画成功を危険にさらすわけにはいかない。このまま私の結界ははらせ続けてもらうぞ。――行け！」
魔人たちが、三条の稲妻となって走った。

二

「学習能力がないなあ、ほんと」
机の影から敵の様子を見やって、アーチェは鼻で笑った。
「そうやってごちゃごちゃ固まってるから、すぐ魔法の的になるってまだわからないかなあ？　――ファルケン？」
そういたずらっぽくいって、隣にしゃがみこんでいるファルケンにウインクをとばす。

「ひさびさに一発、ダブルでぶっ放しますかあ！」
「ちぇっ。なんでおれが……」
ぶつぶつつぶやくファルケンの頭を、アーチェはぽかりと殴りつけた。
「あ、てめえ！」
「ママのことが嫌いなのはしってますけどね、魔術はあんたの才能だよ？　無理して法術なんか習って、このバカ息子！」
「うるせえ！　おれはあんたみたいには、絶対になりたくないんだ！」
アーチェはふざけてオヨヨと嘆いてみせて、すずにもたれかかっていった。
「ね？　かわいくないでしょ？　口が悪いところばっかりチェスターに似ちゃって。家庭崩壊だわ！」
「わかったよ！　いくぞ」
ファルケンはそうアーチェを制して目をつぶり
「――天光満つるところにわれはあり」
と唱えた。
「ほう」
アーチェはそれを聞いて感嘆の声を漏らした。

「それも使えるようになったかあ。親はなくとも子は育つ、ってやつ？　ま、選択センスはいまいちだけどさ。こういう火事のなかだったら、火系の魔術を使ったほうが精霊力の関係で威力がアップするんだけど——」
「うるせえ、あんたも早くやれ！」
「あ、もしかして、まだ火系の術は苦手なわけ？」
「おい！」
「へいへい」
ようやくアーチェも目を閉じ、ファルケンを追って呪文を唱えはじめた。

——天光満つるところにわれはあり
　黄泉の門開くところに汝あり
　　生きとし生けるもののすべてにも似て
　　　空よりきたりてまた空へと帰るもの

アーチェとファルケンの周囲に、光の粒子が収縮していく。
これをマナという。

ユークリッド大陸南方の森の奥深くにすっくと立つ巨大な木、ユグドラシル。世界樹とも呼ばれるこの木が大地の恵みを根から吸い上げ、その代わりとして空気中に生み出す特殊な粒子のことである。

目には見えない。しかし、空気のなかにたしかに満ちているこのマナという粒子を操ることで、魔術師は奇跡を現出させる。魔術師とはすなわち、マナの組み立て職人に他ならないのである。

余談ではあるが、一時は、魔科学の急激な発展がマナの大量消費をよび、魔術の存続が危機にさらされたこともあった。しかし、魔科学の危険性が認知されたいま、魔科学はようやく〝便利なだけではなく代償を要求する技術〟と理解され、研究はほぼ凍結状態にある……。

閑話休題。

アーチェたちの呪文詠唱は続く。

――輪転するもの

はぐくむもの

無限のかたちを持つもの
ひとつのかたちも持たぬもの
天光満つるところより黄泉の門開くところへ
生じて滅ぼさん

アーチェとファルケンの周囲に集ったマナが、ふたりの口から紡がれる魔法の言葉に反応して動く。蛍のように明滅しながら、螺旋を描いてアーチェたちの身体のまわりを立ち上っていく。それに揺られて、ふたりの髪が無重力下にあるように自在になびく。そして――

「タイダルウェーブ！」

アーチェとファルケンの口から、数瞬のずれもなく同じ言葉が走った。
その名が示すとおり、洪水を生み出して敵を一掃する水系最強の魔術である。現在のような火災発生時には、消化というサブの効果も派生する。まさに現状に即した、一石二鳥の選択といえるだろう。
しかし――。

「だめだ」
ファルケンが呆然といった。その顔は真っ青で、額には脂汗すら浮かんでいる。
「どうしたのですか、ファルケンさん!?」
「これじゃ魔術は使えない。どういうことかさっぱりわからないけど、マナが呪文に反応しない!」
「マナが反応しない……?」
「凍り付いたみたいに、術の最後でマナが空中に固定されたんだ。お袋、こりゃいったい!?」
「わかんないよ!」
アーチェもファルケン同様、ひどく青ざめている。
「こんなの生まれて初めてだよ! ねえ、ファルケン。法術に、魔法を使えなくするサイレンスってのがあったと思うけど——」
「違う! サイレンスは敵の口を封じて、呪文を唱えること自体を禁止する術だし、おれたちくらいの魔術師になったら、大抵は対抗して破ることができる。……こいつは違う! おれたちにじゃなくて、マナ自体に影響を及ぼす術だ!」
「でも! すべての術がマナを使って形作られてる以上、そんなこと不可能——」

「わからない！　まるでマナが凍り付く結界のなかにいるみたいだ！」
結界。
ファルケンが口にしたその言葉は、いみじくも、突撃するワイルドカーズの面々に対してキングが放った言葉でもある。
――このまま私の結界ははらせ続けてもらうぞ。
確かにキングはそういった。ならば魔術が使用できないということの事態を生み出したのは、キングの仕業なのであろうか？
しかし、ここでそれを検証するには時間がたりなすぎる。
ドアを蹴破って、三人の魔人たちが小屋になだれ込んできたからである！

三

魔術の使用が不可能とわかった時点で、すずたちの行動は素早い。
ワイルドカーズが飛び込んでくる姿を見るやいなや、すでに撤退を始めてる。
「こっちに！」
アーチェの誘導に従って奥の部屋に駆け、ドアを閉じて鍵を落とす。

アーレスが豪奢な作りの衣装ダンスを軽々と抱え、どん、とドアの前に置いてバリゲートを作る。しかし、小屋をまっぷたつに裂くクイーンを前に、どれだけの意味があるかはこころもとないところだ。ファルケンは、パニック状態でうろうろしているアーチェに叫んだ。

「おい、姐さん！　出口は他にはないのか⁉」

「ない！」

「貴族の別荘だったんだろ、抜け道くらいねえのかよ！」

「ない！　そういうのあったら面白いなあって、来たときに散々調べたけど……どこにもなかった！」

「ってことは、戦うしかないってことかよ！　ファルケン、全員に法術を頼む。ほら、防御能力をアップさせるヤツがあっただろ？」

バリアです、というすずのフォローを受けて、アーレスが続ける。

「そう、それだ！　ほかになんでもいい。攻撃が命中しやすくなるやつやら、威力を上げるやつやら……戦いの役に立つような術は、全部おれと嬢ちゃんにかけてくれ！」

がっ！

洋服ダンスごと、扉が縦に裂ける。すかさず横に、斜めに、次々と裂け目が走り、それから体当たりをする音が続く。クイーンの仕業であろう。一気に部屋ごとまっぷたつにしないのは、<時間の剣>までまきこんで斬らないようにするため、そして直接すずと対峙したいという欲求からであろう。

「くそっ、もうひとつ奥の部屋に逃げるぞ！　逃げながら法術、頼むぜ！」

一同はさらに奥の部屋へ駆け込み、扉に鍵をかけ、こんどは巨大な鉄の壷を前に置いた。

「ここもすぐに破られるぜ。ファルケン、まだか⁉」

いわれるまでもなく、ファルケンは必死で呪文を唱えていたが、やがて

「だめだ！」

と叫んで膝をついてしまった。

「法術は神と大地の力を借りるものだけど、それを伝播するのはマナだ！　マナの動きを封じられちゃ、どうしようもない！　ここじゃ、どんな術も使うことはできない！」

「そいつぁ――」

アーレスが絶句した。

すずが尋ねた。

「アーチェさん、この奥の扉はどこに？」
「地下室だよ！　行き止まり！」
「アーレスさん」
「おうよ」
「ここはわたしたちが」
「だな」
アーレスとすずは顔を見合わせてうなずきあった。
それからすずは〈時間の剣〉をファルケンに渡し、いった。
「ファルケンさんとアーチェさんは、その階段から二階に上って空飛ぶほうきで逃げてください。ふたりのりならぎりぎり大丈夫ですよね、アーチェさん？」
あたしも戦うよ、とアーチェは叫んだが、ワイルドカーズの力を知るファルケンが、
「魔術が使えないおれたちじゃ、足手まといになるだけだ」
と制した。
「だからってあんた、すずちゃんを見捨てて逃げるってわけ!?」
「あんたの友達でもあるけど、おれの友達でもあるんだよ！」
ファルケンは叫んで、アーチェをひきずるように階段を上っていった。

「——マナが封じられてたら、ほうきだって使えないよ！」
「やってみなきゃわからねえだろうが！」
「でも……！」
「すずちゃん、アーレス！　すまない。かたきはかならず——」
「よせやい、縁起でもねえ」
アーレスは鼻で笑った。
「まだ決まったわけじゃねえ」
「そうです」
すずがいった。
「ダオスと戦ったときも絶対にあんな怪物は倒せないと思いました。でも、そうじゃなかったです。可能性はゼロではありません」
しかし、いいながらもすずは、今回ばかりは生き残れないかもしれない、と考えていた。いままでなんとかワイルドカーズの鼻を明かし続けてこれたのは、敵がひとりづつ襲ってきたか、あるいはすずがあらかじめ対応策を練っていたからである。今回は、どちらの後押しもない。

がが っ。
鉄の壷があっさりとまっぷたつに裂け、ドアと共に音をあげて左右に倒れた。
「……ようやく逢えたな」
剣を振り抜いた格好のクイーンが、血笑ともいうべき壮絶な笑顔でいった。その後ろには液体人間ジャック、不死身の怪人ジョーカーが、死神の祭壇のように連なって立っていた。
「抜け。そして死ね」

三

「どこに行くんだ、バカ！　この窓から飛べばいいだろうが！」
一方、屋敷二階へと逃走したファルケンは、手近な窓に見向きもしないで廊下の奥へと向かうアーチェに手を焼いていた。
「お袋！　すずちゃんたちの時間稼ぎを無駄にするつもりかよ！」
「思い出したのよ！」
ファルケンの手を振り払って、アーチェは二階奥の部屋へと駆け込んでいった。ファル

ケンがそれを慌てて追う。はたしてアーチェは、書斎とおぼしきその部屋で、次から次へと本を宙に放り投げていた。
「思い出したって、なにを！」
「レスターズ・エヴォケイション！」
「レスターズ――」
「クラースが書き残したっていう魔法の本よ！　あたし、持ってた！　クラースのお葬式が終わったあと、ミラルドさんから形見わけだっていってもらったのよ！　そんでここに引っ越してくるときに、ひまつぶしに実家の倉庫の魔法書をいっしょくたに放り込んで持ってきて、ここにホッポラカシてあった！」
「それがいまなんの役に――」
いってファルケンはなにかに思い当たったのか、はっと息を飲んだ。
「――まさか！」
「なんども枕元でおはなししてあげたでしょ！　アセリア暦四三〇四年！　封印の地下墓所で、なんの力もないままダオスと出くわしちゃったクレスとミントは、トリニクス＝D＝モリスンの術で地下墓所を脱出した。その術こそは……あった！」
アーチェはついに、ぼろぼろになった革表紙の本を、本棚のなかからぐわっと取り上げ

て叫んだ。
「レスターズ・エヴォケイション！　時空転移の呪文を記した究極の魔法書！」
「マナが封印されているんだぞ！　それに、召喚術と魔術は別物だ。いくらお袋だって時空転移なんか無理だ！」
「うっさい！　気が散る！」
アーチェはどっかと床にあぐらをかき、おもむろにレスターズ・エヴォケイションの表紙をめくった。
ファルケンはいらいらと部屋を歩きながらその様子を見守っていたが、恐るべきことに気がついて悲鳴を上げた。
「おい、まさかいま初めて読んでるわけじゃないだろうな！」
「そうだよ」
ファルケンは頭を抱えてのけぞった。
「史上最高の召喚師が書いた分厚い専門書だぞ！　絵本読むのとはわけが違う！」
「子供のころは、魔術書が絵本代わりだったわよ、ふん」
「ああ、もう！　くそったれ！」
「汚い言葉使うんじゃありません！」

「畜生、見てらんねえぜ。おれはすずちゃんたちに加勢しに行く！」
叫ぶとファルケンは壁に飾られていた弓を手に取り、部屋を飛び出した。
「ファルケン！」
その背中に、アーチェが声をかける。
「なんだよ！」
「――気をつけていってらっしゃい」
「わかってるよ！」
ぶっきらぼうに叫んで、ファルケンは消えた。
ひとりになったアーチェは、食い入るように手元の本を見つめて、読み進めていく。
階下から、激しい剣戟の音が聞こえてくる。アーレスのものとおぼしき裂帛の気合いも聞こえる。児雷也、と叫んでいるのはすずであろう。しばらくして、合流したファルケンらしい声も聞こえてきた。
そうした音が、ともすればアーチェの意識を、複雑な文章から引き離していく。こんな状況で読むには、レスターズ・エヴォケイションはあまりに複雑な本であった。
内容自体の複雑さに加え、劣悪な保存状態のせいでところどころかすれて読めない部分もある。文章のなかに突然クラースお得意の衒学(げんがく)趣味が顔を覗かせ、延々と内容が本題か

ら逸れるような読みにくさもはらんでいる。
　それでもアーチェがこれだけの速さで本を読み進めていけるのは、さしたる修行もなく魔術を極めたほどの生まれ持っての才能と、難解な言葉の裏にある意味――クラースのいいたいことはだいたいこういうことなんだろうな、ということが想像できる力、仲間としての阿吽の呼吸がアーチェに備わっているからである。
　もっとも、適当にあたりをつけて数ページづつ読み飛ばしているというのもあるが……それでもおおよその内容を把握できるのは、このお調子者の才能といえば才能であろう。
「よし！」
　叩きつけるようにクラースの遺品を床に置き、ついにアーチェは立ち上がった。
＜時間の剣＞をすらりと引き抜き、天井に向けて掲げる。
「いまいちわからない部分もあるけど……やってみるしかない！　あのさえない中年にもできたんだもん、このアーチェさんにできないはずがあってたまるかっての！」
　強がってみせたものの、自信はない。
　特に、術者自身も対象と共に時空転移する方法はあまりに難解で、とてもではないが理解するには時間が足りない。さえない中年、とアーチェに評されたトリニクス＝D＝モリスンが、かつてクレスとミントを時空転移させた際に自身が転移できなかったのも、ここ

に起因するのだろう。
さらにいえば、転移先の時代と場所を任意に指定する方法も理解不能だった。
「ま、なんとかなるっしょ！」
ここらあたりのアバウトさがアーチェの欠点ではあるが、万策つきた今回に限っては逆に強みといえよう。召喚術、魔術、法術の発動の成否には、術者の自信が確実に反映される。自らが成し遂げようとしている物理法則を無視した奇跡を信じ、堂々と、大胆にマナを組み上げていかなければ術の成功はない。だからこそ、高レベルの術の使用には、術者としての年季が要求されるのである。
自信はある。
根拠はないが、アーチェには自信があった。その自信の源となっているのは、時空転移がクラースが残してくれた術であるという親近感。正しき道を歩む戦士には、かならず運命が味方をするものであるという確信。そして、かつて伴侶チェスターが同じ状況で仲間のために危地に残り、仲間たちがそこへ戻ってきたという事実である。
繰り返そう。
根拠はない。
しかしこれ以上、なにを望もうか。

アーチェは目を閉じた。そして脳裏に焼き付けた時空転移の呪文に音をのせ、すべらせるように口から解き放っていった。

四

炎に包まれ、崩れ落ちつつある屋敷を見ながら、キングは笑っていた。
「アーチェ＝クラインか。なにが究極の魔術師だ。ダオスを倒して世の表に出ただけで究極を名乗られては、長年に渡る私の苦心惨憺があまりにもみじめというものよ。魔術など、こうしてマナを封じてしまえばなんの役にもたたぬ」
兵士たちが不審げに見ているのも構わず、キングはひとりつぶやき続ける。炎に照らされて、その顔には狂気じみた色がちろちろと躍っている。
「魔術のみならず召喚術から法術まで、この世に存在するあらゆる奇跡を極め、それらを組み合わせて生み出した我が秘術体系——天術こそが究極にもっとも近いもの。しかしいまだ究極ではない。そのためにも、いる。実践を伴ってこそ、初めて時空転移を体得できる。体得してこそ、天術へ組み込める。組み込んでこそ、究極。ふふふ……はははははは！」

キングは高笑いを上げ、隣に立つ兵士の胸ぐらを突然つかみあげた。
「見たか、わが天術を！」
兵士は、怯えてがくがくと首を縦に振った。
「そうか。ならば見物料をもらうぞ」
いうが早いか、キングは兵士の顔を一気に右手で鷲掴みにし、そのままぐいぐいと締め上げた。するとどうであろう。キングの手のなかで、兵士の頭が紙屑を握りつぶしたかのようにくしゃり、とひしゃげてしまったではないか！
周囲の兵士たちは、あまりのことに悲鳴を上げることすらできず、仲間がしわがれていくのを凍りついて見つめているしかない。しかし残酷ショーはまだ終わらない。頭部に続いて兵士の首が、胴が、腕が、脚が、くしゃくしゃと同様に潰れて縮まっていく！　あとには、しぼんだ風船のような人間型の皮と、服だけが残っただけである。
キングは変わり果てた兵士の死体をゴミのように放り投げて、満足そうに笑っていった。
「――天術、吸生大法」
ああ、これは――。
見よ、先刻まで雪のように白かったキングの総髪が、黒々としたものに変わっている。
その髪にあわせたかのように、顔にも若々しい精気がはじけんばかりに照り輝いている。

目には陶酔の色が、口には溢れそうな笑顔が浮かんでいる。
人の命を吸い取ってわがものとする——天術、吸生大法！
年齢不詳の感があったキングではあったが、これではっきりとした。
この男に年齢などという概念は意味をなさなかったのである。はたしてこの悪魔の術を使い、この魔人はどれだけの歳月を生きてきたのであろうか？　魔術、召喚術、法術すべてを極めるのに、どれだけの年月が必要なのだろうか？　その歩んだ道の下に、どれだけの人間の革袋が埋まっているというのだろうか？
「同じ運命をたどりたくなければ、どんどん火矢を打ち込め」
恐怖に震える兵士たちにそう告げると、キングは空を見上げてささやいた。
「ふふふ。私はあなたが屈した死の運命さえ乗り越えた。すでに、わたしはあなたを越えている。ただ、奥歯に引っかかった食べカスのように、いつまでも私の心をなやませるのは、ただひとつ時空転移の未習得。しかし、それもすぐに手に入る。そして、私こそが究極と——」
キングは突然、ぷっつりと押し黙った。
まじまじと屋敷を見つめていう。
「マナが動いている！　私の封魔大法を破って発動するとはこの術、まさか……お

おっ！」
閃光！
屋敷のあらゆる窓という窓から、真っ白なひかりが鉄砲水のようにほとばしって見る者の目を貫いた。
それはまさしく、アーチェが時空転移を完成させたことを意味するしるしであった！

## 【第三部】

## 鳴神（なるかみ：雷のこと）

# 第八章｜転移

## 一

目を覚ますと、すずはファルケンと折り重なるような格好で、平原の真ん中に倒れていた。
もぞもぞとファルケンの下から這い出して、すずは周囲をあらためた。
敵影はない。
見渡すかぎりの草原に、ただ暖かい風だけが流れてゆく。
春の風だ。
すずはすぐに異変を察知した。
——あの雪深いアーリィから、なぜこのような場所に移動してしまったのだろう?
答えはすぐに、遅れて立ち上がったファルケンが出してくれた。
「成功したんだ！　すげえ、さすがはおふくろだ！　即席で時空転移を成功させちまうとはな！」
ファルケンからことの次第を聞き、すずはひとまず胸をなでおろした。逃げ場のないあの屋敷、絶体絶命の状況からはとりあえず脱出できたのだ。しかし、すぐに新しい不安が

むくむくと浮かび上がってくる。
「アーレスさんは？」
そう、アーレスの姿がどこにもない。一瞬前まで共に戦っていた剛剣士が、消え失せてしまっているのである。気絶しているあいだにどこかに行ってしまったのか、あるいはかつてチェスターがそうであったように、なんらかの理由で時空転移に失敗したのか？
「それにしても、ここはどこだ？」
ファルケンの現実的なつぶやきを耳にして、すずは気持ちを切り替えた。とりあえず現状を把握することが先だ。すばやく太陽の位置からだいたいの時間と、方角を割り出す。
午前も早い時間であろう。
草原の彼方、東に山脈が見える。
見覚えのある山々だ。
おそらくはセレフファイス山脈、ということはここはユークリッド大陸南部で、ユークリッドの都の近くであるはずだ。
もっとも、この時代にユークリッドの都がまだ存在していれば、あるいはすでに存在していればのはなしではある。もしかしたら都どころか、人間が世界に誕生する以前の時代にいるのかもしれないし、人類絶滅後のはるか未来世界にいるのかもしれないのだ。アー

チェが好んでそのような時代に自分たちを送るとは思えないが、ファルケンの話から判断するに、ひどく適当な一夜漬けの学習だったらしい。自身が転移できなかったのと同様に、転移先の時代や場所を指定しきれなかった可能性は、おおいにある。

「できることからするしかありませんね」

すずはいった。

「とりあえずユークリッドの都を目指しましょう」

そうして歩き始めたふたりだったが、道中はいきおい重い空気に包まれていた。暗澹たる状況にわずかながら希望のひかりが射したのは、道中、ようやく人間の姿を発見したときであった。

いまはアセリア暦何年ですか、と勢い込んで尋ねるすずたちはいかにもうさんくさかったが、その旅人はいまが四三五四年であることを教えてくれた。

「武闘大会の日を忘れるとは、おまえさんがたここの人間じゃないね？」

旅人は笑っていった。

「武闘大会ですか？」

「ああ。ユークリッドの王様が、ダオスをやっつけられるような腕の立つ戦士を捜すっていうんで毎月開いてる大会さね。そりゃあすごい迫力でなあ。せっかくここまで来たんだ、

一回観ていったほうがいいよ」
旅人はそういってから、ファルケンに向かって小声でいった。
「それにチャンピオンは、すげえべっぴんさんだしな、へへへ。それでいて信じられねえような使い手なんだよ。こう、スパーっとどんなもんでもまっぷたつにしちまう！　触れたら斬れるくらいの美貌ってのは、ああいうのを――」
「ちょっと待ってください！」
すずは旅人の言葉をさえぎって尋ねた。
嫌な予感がした。それに、その時代にそんな凄腕のチャンピオンがいたなどという話はいちども聞いたことがない。
「そのチャンピオンはなんという名前なのでしょうか？」
「名前はだれも知らないんだよ。どこから来たのかも知られてない。半年前にふらりと闘技場に現れて、当時のチャンピオンを一瞬でやっつけちまったんだ。まあ、通り名っちゅうか、みんながそう呼んでるっちゅう名前はあるけどな。――女王(クイーン)ってんだ」
すずとファルケンは、思わず顔を見合わせた。
ユークリッドの都に到着するまでに、すずとファルケンは大体の事情を整理し終えてい

た。
おそらくは不安定な時空転移が、対象者がこの時代に到着する時間に、多少のずれを生じさせているのではないか？
クイーンとおぼしき剣士が闘技場に現れたのが半年前だということも、そしてアーレスが自分たちと一緒にいなかったことも、そう考えれば説明がつく。二階のアーチェからより近い位置にいた人間ほどより早くこの時代に到着したのではないか、との推理もファルケンから披露された。魔法のセオリーから考えて、ありえないことではないという。二階にいちばん近い位置にいたのはクイーンであり、その次にアーレスが、続いて転倒したず、そしてそれをかばって重なり合うような格好だったファルケン、いちばん遠くにはジャックがいた。おそらくジャックは、これからしばらくあとにこの時代に転移してくるのではないか……？
「クイーンがおれたちより先にこの時代に到着してるってのがやっかいだな」
ファルケンはうなった。
「〈時間の剣〉はいま、だれの手にあるんだい？」
「クレスさんが持っているはずです。まだ、歴史が変えられていなければの話ですけれど」

「待てよ。もしクレス＝アルベインが〈時間の剣〉をワイルドカーズに奪われるとなると、ダオスは倒されなかったことになって、その後の歴史もずいぶん変わっちまうわけだけど……どうなるのかな？」

「いろいろな説があります」

すずは説明をはじめた。

「あらゆる可能性から派生したいくつもの別世界が並列して存在しているともいわれていますし、時間には自己修復能力があって発生したちいさなゆがみは本来の流れに飲み込まれて結局は元に戻るともいわれています。タイムパラドックスという概念もあります。たとえば、この時代に時空転移してきたクレスさんがミゲールに行ったとしたら、そこには普通に時間を過ごしてきた年老いたもうひとりの自分がいるのか？　そして、その年老いたクレスさんが転移してきた若いクレスさんを——」

「わかったわかった！」

ファルケンは降参した。

「要するに？」

「要するに、なにもわかっていないということです」

「なるほどね。で、もしもすずちゃんがクイーンだったらどうする？」

「そうですね。たぶん、ひとつだけはっきりしているところに目標を設定すると思います」
「おれもだ。つまりは〈時間の剣〉を手に入れるってこった」
「でも、この頃のクレスさんたちはレアバードで世界中を行ったり来たりしていますから、どこにいるのか所在をつかむのは難しいと思います。クレスさんたちがいつ、どこにいたのか、詳しい記録は残されていないはずですし——」
そこまでいって、すずは急に黙り込んだ。
「どうした、急に？」
すずは黙ったまま答えなかったが、武闘大会の熱気に沸くユークリッドの都に到着してから、ようやく重い口を開いた。
「きょうの武闘大会で、事件が起こるんです」
「事件？」
「はい。歴史にも残されている有名な事件です。アセリア暦四三五四年、クレスさんたちがユークリッドの武闘大会に参加して、優勝するんです」
「あっ！」
ファルケンは思わず叫んだ。そしてすずの次の言葉を聞くまでもなく、ある事実を思い

出していた。
「それじゃ、きょうは――」
「はい。クレスさんたちが優勝した後、ダオスに洗脳された伊賀栗の忍者が闘技場に乱入します」

二

有名な歴史学者、ゲオルグ＝ブルジュベッドの手による『大陸実録』に、こうある。
『第一四回ユークリッド武闘大会に起きたダオス配下の忍者乱入事件は、英雄クレス＝アルベインを死の直前まで追いこんだ悪夢のような事件として記憶されている。ただ、ここに疾風のように現れ、忍者を斬ってクレスを助けたのが藤林すずであり、これが彼女とクレスたちを結びつけるきっかけとなったことを考えると、結果的には幸運な出来事であったといえるかもしれない――』
ここにいわれる〝ダオス配下の忍者〟というのがすずの実の両親、銅蔵とおきよであることは一部の人間にしか知られていない。
ファルケンはそれを知る数少ない人間のひとりである。アーチェから聞いて、詳細を知

識としておさめている。しかし、知っているからこそ
「どうする?」
そう尋ねることしかできない。
すずの表情は暗い。
両親が死ぬところを二度も目にしなければならない。
しかも、それを実行するのは過去の自分なのである。
——とめることができるんじゃないか?
ファルケンはなんどもそういいそうになって、思いとどまった。
恣意的に歴史を変える。
どこまでが許されるものであるのか、線引きの基準は存在しない。細かいことをいえば、こうして道を歩いているだけで偶然に蟻を踏み潰し、その蟻の死が大きく未来を変える可能性もある。ただ、それはあくまでも偶然が生む結果だ。意識的に、しかも自分の都合の良いように起きるはずの出来事を起きなかったことにするようなことは、やはり間違っているように思えた。しかも、すずの両親の死は、すずがクレスたちと合流する大きなきっかけとなっている。歴史的な重みも——ひとつのものごとが歴史に影響を与えうるとしたらではあるが——重かろう。

ただ、それは理屈である。
たとえば未来、父であるチェスターが事故死するその日に、事故の原因を知っている自分が現場に立ち会っていたとしたら、とファルケンは思う。理屈など、そこにはなんの意味も持つまい。
しかし、すずは決然といった。
「歴史を変えるつもりはありません」
ファルケンはすずの顔から、なにかの感情を読みとろうとした。歴史を変えるつもりはないといったその言葉の裏にあるはずの心の揺れを見いだし、そしていおうと思ったのだ。とめることができるんじゃないか、と。
しかしすずの顔には、いつもどおり、無表情という表情が張り付いているだけだった。
「いいのかい？」
「はい」
「いいのかい？」
ファルケンは繰り返した。
「本当にそれでいいのかい？」
「はい」

すずはいった。
「取り返しのつかない一瞬一瞬に、必死で考えて、悩んで、判断を下して、その結果を受け入れていく。それが生きていくということなのだと思います。わたしはあのとき、そうして父上と母上を斬りました。それが正しかったのかどうかはわかりません。けれども――
――あ！」
すずの驚きの声を、ファルケンは胸元で聞いていた。説明しがたい衝動に背を押されて、思わずすずを抱きしめていたのである。
生まれて初めての、制御できないくらいの熱い感情だった。その激しい波はすぐにファルケンのなかからひいていき、あとにはすずを抱きしめているという状況だけが残った。
ぎゅっと身体をこわばらせているのがわかる。
ほんとうに小さな身体である。
最強の忍者と人はいう。
伝説の英雄と人はいう。
けれども胸のなかにいるこの少女は、まちがいなく一二歳の女の子なのだ。
「あの、苦しいです、ファルケンさん……」
「ご、ごめん」

ファルケンは慌ててすずを解放した。
鞠のように弾力のあるすずの身体の感触が、まだ胸のなかにある。すずの真っ赤な顔を見て、ファルケンは改めて自分の行動に驚きを感じた。
「ひ、控え室にいってみましょう！」
すずがいった。
「ク、クレスさんが武闘大会に参加するのは午後の部です。まだ午前の部も始まっていませんから、いまのうちにクイーンを捜して、やっつけてしまいましょう！」
「そ、そうだな！」
小走りに選手控え室に向かうすずの背中を追いながら、ファルケンは自分のなかにある理解できない感情を必死で定義しようとあがいていた。

三

一般選手とは別室だと聞かされて向かったチャンピオン控え室。そこにいたのは、はたしてワイルドカーズの剣鬼、クイーンであった。
豪奢な椅子に深く腰掛け、杖のように剣を前についてそこに両手をのせているその姿に

は、まさに女王と呼ぶにふさわしい風格が備わっている。
「久しぶりだな。半年待ったぞ」
すずたちを見て、クイーンは薄く笑った。
「ここで待っていれば、必ず逢えると思っていた」
「勝負しなさい、クイーン！」
すずは叫んだ。しかしクイーンからは、いっこうに殺気が感じられない。
「どうした、怖じ気づいたかよ！」
ファルケンの挑発をも嘲笑でかわし、クイーンはいった。
「いまは戦わない」
「なぜ⁉」
「今日がどんな日なのか、私が気付いていないとでも思うのか？　英雄と名高いクレス＝アルベインが午後、ここを訪れることに、気付いていないとでも？」
「〈時間の剣〉を奪うつもりか⁉」
「それもある。だがそれよりも、私は全盛期のクレス＝アルベインを斬ってみたいのだ」
クイーンはうっとりと笑みを浮かべて続けた。
「クレス＝アルベインは小細工を弄せず正面からぶつかってくるタイプの剣士。私の天地

両断をもってすれば、十割の勝利を確信している。だが、藤林すず。おまえと戦って勝てるかどうか、正直にいってわからないのだ。ほぼ九割九分の勝ちは間違いないと信じてはいるが、残りの一分、おまえに斬られるかもしれないという思いが私のなかにある」

聞いてすずは、肌が泡立つのを禁じ得なかった。

いっそ、絶対に自分が勝つ、と大言壮語してくれれば気が楽だった。その思い上がりの間隙を突くことができる。しかしいまのクイーンの言葉には、思い上がりどころか、一片の主観すら含まれてはいないように思える。起こりうるあらゆる事態を想定して、平然と自分の死すら秤にかけての分析の結果、クイーンは九割九分自分が勝つ、と答えをはじき出してみせたのである。

不動の真実を、ただ述べている。

そこに恐ろしさがある。

「私はどうしてもクレス＝アルベインを斬ってみたい。おまえと戦ってしまっては、未練を残したまま死ぬことになるかもしれぬ。だからに先に戦うのは奴だ。安心しろ、それから必ず、おまえと戦ってやる」

「おまえ、バカか⁉　クレスになにかがあったら、ダオスを倒されなかったことになって世界は滅びるかもしれないんだぞ！」

無言のすずに変わってファルケンが叫んだ。しかしクイーンは、私には関係のないことだ、とうそぶいただけである。そして、すずが手を剣に向けたと見るや、素早く

「衛兵！」

と叫んで、ユークリッドの兵士たちを控え室に呼び寄せた。

なぜ、とすずは思った。一般の衛兵に自分の動きを阻む力があろうはずはないことはクイーンも百も承知のはずなのに――そんな疑問が、すずの動きを一瞬遅らせた。そして、控え室に数人の衛兵がなだれ込んできてから、ようやくすずは気付いた。

斬るつもりでいる。

すずが動いた瞬間に、クイーンはすずではなく、この衛兵たちを斬殺するつもりでいるのだ。

――いいのか？

クイーンが笑った目でそう告げている。

身動きとれず、歯ぎしりしながら控え室から立ち去るすずたちにの背に、クイーンはいった。

「なあ、藤林すず。あらかじめいっておくが、空中からの奇襲はもう通用しないぞ。私にもう死角はない。ふふ、ふふふ……」

## 四

数十分後、ユークリッドの裏路地で、すずは着替えを済ませていた。
しげしげと自分の格好を眺めてから、路地の入り口で見張りをしていたファルケンを呼び寄せる。
「おお、終わったかい？」
「はい。でも……」
すずは恥ずかしそうに身体をもじもじさせた。
「あの、変じゃないですか？」
すずはファルケンに尋ねた。
「変じゃないよ。最高にかっこいいぜ？」
いいながら、ファルケンは思わず吹き出しそうになっている。
確かに奇妙な格好である。
目だけが露出した頭巾に、赤いマフラー。肩にごついパッドをつけ、スーツの背中には手裏剣を意匠した十字マークが派手に描かれている。

「あの、どうして十字マークなんでしょうか？」
「かっこいいからだよ！」
ファルケンが胸を張った。
「完璧な正義の味方ファッションじゃないか！」
「そうでしょうか？」
すずは不満そうにぶつぶつとなにかをつぶやいて、ぷい、と後ろを向いてしまった……。

こういうことである。
クイーンに対戦を拒まれたすずたちは、一計を案じた。チャンピオンという立場をクイーンが利用するというのなら、こちらもそれを利用し返そうというのだ。すなわち、すずが武闘大会午前の部に参加して順当に勝ち上っていけば、チャンピオンであるクイーンは逃げることはできない……。
なによりもすずは、クレスたちが闘技場にやってくるよりも早く、ことを済ませておきたかった。クイーンは自分の敵であって、この時代のクレスたちが戦わなければならない敵ではない。打倒ダオスという巨大な使命を背負ったクレスたちに、これ以上余計な重石をぶらさげるようなことは避けたかった。

ただ、〝藤林すず〟として参加するのはまずいのではないか？
そういう思いがあった。
藤林すずが歴史の表舞台に現れるのは本来、今日の午後の部であるはずだ。現在のすずが藤林すずとして午前の部に参加してしまえば、過去のすずの行動に影響が出るのではないか……？
時間の迷路にどれだけの意味を定義することが可能なのかはわからなかったが、余計な混乱は避けるのが吉、とすずたちは判断した。

その結果の変装である。
「参加登録用の名前も決めないとまずいな。なにかいいの、あるかい？」
ファルケンがいった。
「そうですね」
すずは真剣な顔でしばし考え込み、そして、血祭幻妖斎というのはどうでしょうか、といった。あまりといえばあまりなセンスに、思わずファルケンはずっこけた。
「も、もうちょっとマシなのはないかな？」
「……毒蛭暗鬼坊？」

「わざといってないか？　それじゃ世界征服をたくらむ悪の秘密結社の幹部だってのＩ　あのさ、せっかくだからもうちょっといいものっぽい名前にしようぜ？　おれたち歴史の流れを守る正義の味方だろ」

「それでは忍者マンではどうでしょうか？」

「はあ、そりゃえらくいいものっぽいけどさ」

すずにネーミングセンス皆無と判断したファルケンは、眉根を寄せて考え込んだ。

「藤林だから……ウッド……すずだからベル……そうだ、ウッディベルってのはどうだい!?　正義の忍者ウッディベルって、なんだかこう、かわいいじゃないか！　ステッキとかペンダントとかで変身しそうな感じで！」

「いやです」

すずは間髪入れずにいった。

「いやって、どうして？」

「恥ずかしいです」

「血祭幻妖斎より恥ずかしくないさ！　よし、おれが登録してきてやろう！」

「あっ、ちょっと待ってください、ファルケンさん！」

すずの制止を無視して、ファルケンは脱兎のごとく路地裏を駆け出していった。午前の

部の参加申し込みの締め切り時間が迫っているのだ。
路地裏に取り残されたすずは、はあ、とため息をついてしばらくたたずんでいたが、周りに人の気配がないのを確認すると、やがて、えい、とう、とポーズを決めはじめた。
不満を漏らしながらも、実は内心、まんざらでもない。
首に巻いたマフラーが、無意味なまでに派手になびくのがなんとなくかっこいいような気がする。とはいえ、かっこいいとはしゃぐのは自分のキャラクターではないような気がして、敢えて苦虫を噛みつぶしたような態度を貫いているのである。
（なにか決めぜりふがあったほうがかっこいいかな？）
すずが思わずうふふ、と笑ったそのときであった。
「――動かないでください」
その声は、すずの耳元から唐突に飛び込んできた。はっと息を飲んだときにはもう、首筋に剣をまわされている。
相手のあまりに鮮やかな気配の殺しかたにも驚いたが、それにも増してすずは、その声自体に肝をつぶしていた。
「質問に答えてください。その内容如何では命まではとりません」
淡々と感情を込めずにそういうその声は、まさしく自分の声だったのだ。

# 第九章　ふたりのすず

一

まさかこのようなところで過去の自分と鉢合わせしてしまうとは！
すずはパニックに陥った。
思い返せばこの日、過去の自分は確かにユークリッドで調査をおこなっていた。だからこそこの日、武闘大会に乱入した両親と偶然にも接触できたのだ。もしかしたらその調査の途中、こうした路地裏にも足を踏み入れていたかもしれない……。
どうすればいいのだろう？
事情を説明すべきなのか？
それはできない。過去の自分がこんな話を信じるとは思えないし、なによりも未来の出来事を語って聞かせることに危険が含まれているような気がした。
「あなたは何者ですか？」
すずの葛藤などお構いなしに、過去すずが低くいった。
我ながら見事だ、とすずは思った。たとえ背後を取られたとしても、すずの体術をもってすれば相手を一気に背負って投げ飛ばすことも可能である。しかし、過去の自分にはわ

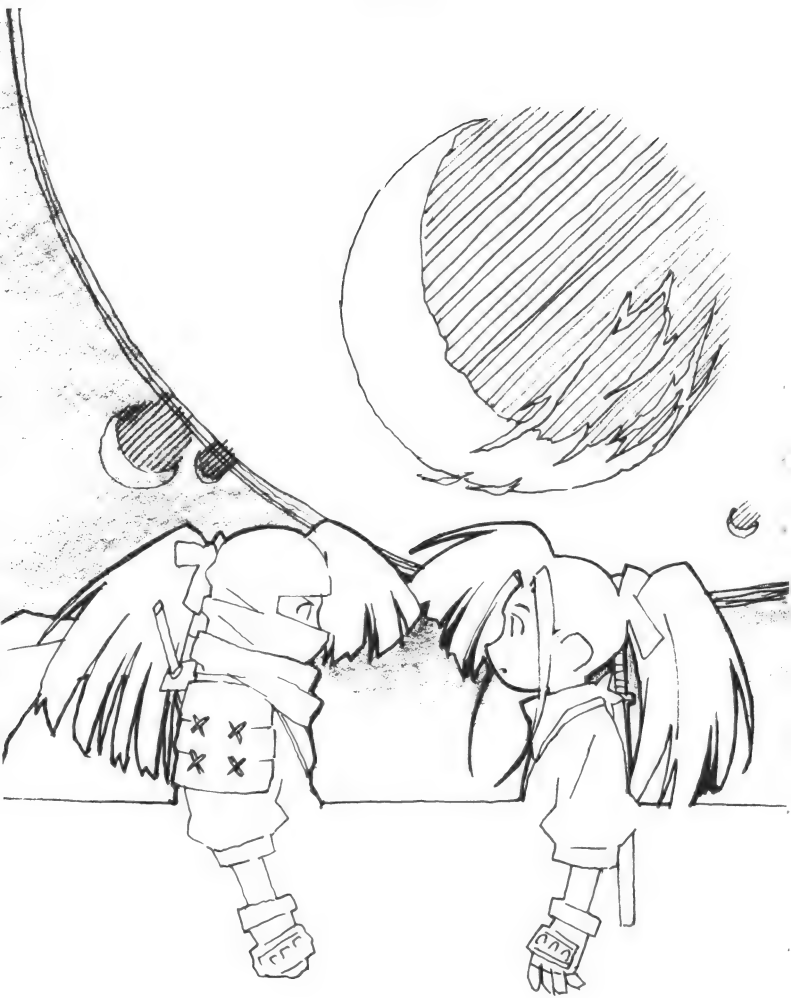
ずかの隙もない。しかし、いまはそんな自分の優秀さもただ恨めしいだけである。
「伊賀栗の忍者がダオスに洗脳され、世間を騒がせています。あなた、身のこなしから忍者と見ましたが……詳しく話を聞かせてもらいましょう」
すずは困った。詳しい話など聞かせようがない。どうやら変装前の素顔を見られていないようなのが唯一の救いではあるが……。
「い、いかにもわたしは忍者です。でも、伊賀栗忍者ではありません」
と苦し紛れにいったものの
「この世界に、伊賀栗以外の忍者がいるという話など聞いたことがありません。それは嘘ですね」
とすぐさま看破された。それはそうだろう。自分だってそんな話にだまされたりはしない。ということはとりもなおさず、過去すずもだまされるはずがないということだ。
すずは思案した。
自分がだまされそうな嘘とは、はたしてどんな嘘なのだろう？　でも、それがあらかじめわかるようならば、そもそもだまされるはずがない。嘘と理解していながらも、その嘘にだまされる……矛盾している。矛盾も矛盾、大矛盾である。
「——しかたがありませんね。恨まないでください」

過去すずが、喉に突きつけた刀にぐっと力を入れた。
「お待ちなさい！」
ようやく思いついて、すずはいった。
「正義の忍者ウッディベルとは世を忍ぶ仮の名前。わたしの正体は、忍者の星から来たニンジャリア星人です」

二

しばし、沈黙が流れたあと、
「ニンジャリア星人」
過去すずがようやくいった。
「ほんとうにあなたはニンジャリア星人なのですか？」
「そうです。わたしはほんとうにニンジャリア星人なのです」
「ほ、ほんとうにいたんだ！」
するとどうであろう。過去すずは刀をからりと地に落とし、放心したようにへなへなと地にへたりこんだではないか！

こんなばかげた嘘が効果を発揮したのには、もちろんわけがある。
忍者の星ニンジャリアは、すずが子供時代に強く空想していた世界なのである。
空の彼方のどこかにあるニンジャリア星は、住人すべてが忍者で、すべてのことが忍法で行われている。料理も忍法。掃除も忍法。法律も忍法。そしてスーパー忍者マンが空を飛んで悪を退治している世界、それがニンジャリア星である。幼少時、すずはつらいことがあると、ほんとうは自分はニンジャリア星の姫君で、なにか故あってこの世界に送られてきたんだ、と考えることで自分を慰めていた。そのうち成長して、さすがにそんな星の存在は忘れかけていたが、まだときどきは夢に見て、本当にそんな星があったらいいな、とせつない気持ちになることがあった。
子供の頃から無口で友達も少なかったすずは、この空想を他人に話したことはない。自分以外、誰も知るはずのない忍者の世界がニンジャリアなのである。
その名が、怪しげなコスチュームの人物から口に出された。
過去すずが腰を抜かすのも無理はない。
「ニ、ニンジャリア星人さん、は、はじめまして」
過去すずが、言葉を詰まらせながら頭をぺこりとさげた。

「わたしは藤林すずです。この星の忍者です。さきほどはたいへん失礼しました！」
「いえ、いいのです」
すずはいって、さらばです、と立ち去ろうとした。
しかし過去すずは、彼女にしては珍しい積極さをもって、ぐいい、とすずの頭巾のうしろを引っ張った。
「な、なにをするのですか、藤林すずさん！」
「も、申し訳ありません！　あの、ず、ずっとお逢いしたかったので、いろいろお話したいのです！」
「申し訳ありませんが、この星の忍者とあまりお話しすることは禁止されているのです」
「では空を飛んでください！」
「この星で空を飛ぶことは、ニンジャリアの掟で堅く禁止されています」
「す、すみません！　では、どうして武闘大会などに参加されるのですか？」
すずは困った。自分にこのような好奇心があるとは思ってもみなかった。このままではいつまでたっても離してくれそうにない。一回戦はまもなく始まってしまう。このままでは不戦敗で失格になり、クイーンと剣を交える機会を逸してしまう。
「実はこの武闘大会に、悪の忍者星人が潜り込んでいます」

すずはいった。
「悪の忍者星人……・それはドクロカッパ星人ですか⁉」
「そうです。暗黒星雲の彼方から来た、悪の忍者星人ドクロカッパです。やつらはこの星の人間に姿を変え、この武闘大会で人間の力をテストしています。人間の力を計り終えて、それが大したことがないと判断したら、百万のドクロカッパ星人がこの星に攻めてきます。わたしはニンジャリア星から、ドクロカッパ星人の野望をくじくためにやってきたのです」
「すごいです！　わたしもお手伝いさせてください！」
「駄目です。あなたにはあなたの任務があるはずでしょう？」
すずは過去すずの両肩にぽん、と手を置いていった。
「あなたは観客席で応援していてください」
「——わかりました。あの、ニンジャリア星人さんだからこそいいますが、わたし、いま、父上と母上を捜しているんです」
過去すずは小声でいった。
そんな過去すずを見て、すずは胸が締め付けられる思いだった。
過去すずは今日の午後、両親を自らの手で殺すことを運命づけられているのだ。いまの

過去すずは、それを露ほどにも思っていない。憧れのニンジャリア星人に逢えて、目を輝かせている自分。ずいぶんと幼く見える一年前の自分……。

「藤林すずさん」

すずはいった。

「強く生きてください。つらいことがたくさんあるでしょう。けれども、それとおなじくらいの楽しいことが未来には待っています。あなたはニンジャリア星には行けないかもしれないけれど、もっと素敵な場所にいつかはたどり着けるはずです。だから足を踏ん張って、生きてください」

「はい！　ありがとうございます！」

感激極まって涙ぐむ過去すずに、わたしのことは他言無用ですよ、と念を押して、すずは闘技場控え室へと向かった。過去すずはその背中を、いつまでもいつまでも見つめ続けていた。

三

決勝まで勝ち上ってきた挑戦者の姿を見て、クイーンは小さく舌打ちした。

闘技場を満たす歓声のむこう、挑戦者入場ゲートに小柄な戦士が立っている。
奇妙なコスチュームに身を包んではいるものの、まぎれもなく藤林すずである。
裏をかかれたいらだちと同時に、こみ上がってくる押さえがたい興奮もある。
前菜としてクレス＝アルベインを斬るつもりではあったが、クイーンのなかにはメインディッシュを待ちきれないという思いも根強くあった。控え室でも、かなりの無理をして決戦を後送りにしたのだ。
しかし、こうなっては是非もない。
斬る。
クイーンはぞくぞくと背中をかけ上ってくる快感に、切れ長の目を細めて舌なめずりをした。

「みなさんお待たせいたしました！　本日の決勝戦を行います！」
司会進行役の小男が吠えた。
「挑戦者は、すべての敵を二〇秒以内で撃破してきた正体不明の正義の忍者、ウッディベル！」
てくてくとすずが入場ゲートから現れると、万雷の拍手が闘技場に響きわたった。

「かっちょいいぞ！」
「ラブリー！」
そんなからかいの声もとぶ。
歓声のひとつひとつに、すずはぺこりぺこりと丁寧に頭を下げてみせた。その仕草に、さらなる笑いと歓声が飛んだ。
「そしてこれを迎えうつは、大陸一の技量と美貌を誇るわれらが女王だ！」
その声にあわせて、クイーンは風のように駆けて闘技場の中央に躍り出た。
歓声が爆発する。
これまでの戦いで、ユークリッドの人々はクイーンの剣技にすっかり心を奪われてしまっていた。素人である観客にも圧倒的な力をもって迫る、魔性ともいうべき鮮やかな太刀筋。強い。そして美しい。この謎めいたチャンピオンの正体が、斬殺の快感のためならば世界の滅亡すら気にかけない怪物であると知っても、もしかしたら、彼らはその信奉をやめないかもしれない。
もっとも、そんな評価などクイーンは気にもかけていない。
今回の戦いにおいても、必要とあれば天地両断剣の余波が観客全員をまきこむこともやむなしと考えている。

それを利用しようという考えすら、ある。
必殺を期して五メートルの間合いをとってはいるものの、天地両断剣の効果範囲は前方一〇メートルに及ぶ。この闘技場は直径五〇メートルの円形であるから、およそ四〇メートルの安全地帯が生まれる計算になるわけだ。しかし、闘技場の円周を取り囲むように位置する観客の存在が、すずの安全地帯を狭めることになる。あまりに近く観客を背負えば、それらが天地両断剣にまきこまれることになる。ヒューマニズムを信奉するすずにとって、望むところではあるまい。いきおい、すずは闘技場中央に動きを封じられることになる。
卑怯、という思いはクイーンにはない。
背後からのだまし討ちや、一対多の物量作戦ならともかく、基本的に剣の戦いに正道非道は存在しないと考えている。周囲の状況を利用して、勝つ。その臨機応変な対応もまた、使い手の技量の一部であろう。その柔軟な対応も含めて、必殺技は評価されるべきであろう。ならばこそ、
——わが天地両断剣、最強なり！　いかにしてこれを破るか、藤林すず！
クイーンは絶対の自信を持って、すずに殺気を放った。
老人や子供であれば、それだけで卒倒してしまいそうな殺気である。しかしすずは平然とそれを受け流し、腰の剣を抜いて構えた。

距離は二〇メートル。
「そ、それでは」
司会者がじりりりと後ずさって
「試合開始！」
叫んだ。
ついに！
決戦の時である！

## 四

この勝負の凄まじさを悟ったか、われんばかりだった観客の声は徐々に小さくなり、ついには闘技場に完全な沈黙がおりた。呼吸することすらはばかられるような緊迫の世界が生まれる。
そのなかで、二匹の闘犬がにらみ合う。
互いに、胸に燃やすは必勝の決意。
互いに、牙に宿すは必殺の一撃。

しかし——しかし、われらが戦士藤林すずに、魔人必滅の策はあるのか⁉
すずよ！　こうしているうちにも、クイーンはじりじりと間合いを詰め、すでにすずとの距離は一〇メートル……八メートル……五メートル。天地両断必殺の間合いが形作られているではないか！
かくなる状況が形成されてしまえば、残されたすずの選択肢はただふたつ。
上に跳ぶか。
下に這うか。
横一文字に絶対の死の直線が引かれるとするならば、すずが選びうる選択肢は、その直線を基準にした上下ふたつしかありえない。
そして、そのいずれの選択肢も、最終的には死に帰結するのだ。
跳んで第一撃をかわしたとしても、滞空中に生まれるタイムラグで第二撃の装填が完了する。一度は空中からの襲撃に遅れをとったが、いまのクイーンには、対空性能を強化した第二の必殺剣がある。
天空両断剣という。
空をゆく燕を斬った。崖から落ちる岩を斬った。滝から流れくる倒木を斬った。そうした特訓から編み出された、完璧な対空版の天地両断剣である。

すずがしゃがむなり這いつくばるなりして天地両断剣をかわしたとしたら、それこそクイーンの思うつぼだ。そのように不自然な姿勢から、次の攻撃など放てるはずがない。放てたとしてもそれは腰砕けの斬撃、クイーンの技量をもってすればかわすことは造作ない。そして、しゃがめば第二撃目の天地両断剣が、地面に沿ってひくく走る。すずに残るのは跳ぶことのみであり、飛んだが最期——天空両断剣の的だ。

クイーンの唇が、きゅーっと三日月のように吊り上がった。

笑っている。

剣の道は、死を覚悟した苦悩の果てにしか完成しえない。血反吐を吐き、その血反吐の上にさらなる血反吐を吐く。剣士とは、そんな血まみれの努力に磨き上げられた至高の芸術品である。

それを破壊する。

子供が、他の子供が作った砂山を踏み崩すような、また、美しい雪に真っ黒な足跡をつけて回るような、そんな快感が染みるように四肢にゆきわたる。あるいは——自分が斬られてもいい。世界最高の芸術品である自分が粉々に砕け散るさまを体感するのもまた、クイーンの究極の願いであった。

剣鬼。
まさしく剣に魅入られた怪物であった。
「ゆくぞ」
動こうとしないすずを見て、クイーンはいった。あまりの興奮に、思わずごくりと生唾を飲み込む。
「——天地両断剣！」
裂帛の気合いを伴って、クイーンの鞘から銀光がほとばしった。

しかし、すずは上にも下にも動こうとはしない。
ああ、すずよ、甘んじて必殺の一撃を受けようというのか⁉
しかし否！　すずは猛然と動いていた。
前に！
すずは地を蹴って、弾丸のように前に走った。弧を描いて振り抜かれるクイーンの剣の軌道へと、一直線に飛び込んでいったのである。
——こいつ、狂ったか！
クイーンの脳裏に動揺が走った。しかし剣の動きには寸分の遅れもない。空気をぶった

斬って走り、そのまま軌道に突っ込んできたすずの右肩にくいこんだ。
すずの右肩から、ががっ、と火花が散った。
——違う！
肉を断つ感触ではなかった。肩のプロテクターのなかに鉄の塊を仕込んでいたか、と気付いたときはすでに遅く、次の瞬間、火のように熱い塊がクイーンの胸にぶち込まれていた。
「——天地両断剣、破れたり」
懐にもぐりこんだすずがいった。
いかなる物質もまっぷたつに切り裂く天地両断剣。しかし、その両断の魔技は、剣先から放たれる真空波が生むものであり、真空波を発生させる本体、すなわち剣自体が斬り裂くことができるものは肉であり、木でしかない。剣自体は、あくまで物理法則の次元に縛られているのである。そして、いかにクイーンの猛烈な斬撃をもってしても、鋼鉄の塊を両断することはできなかった——。
がふっ、とクイーンは血の塊を吹いた。
そして懐のすずを見下ろして、にい、と壮絶な笑みを浮かべた。三秒後、クイーンは糸が切れた操り人形のように、どうと地に崩れ落ちたのであった。

# 第十章　裏切り者の末裔

# 一

アーリィのはずれの森に、魔王が住むという。
人間を頭から丸かじりに喰い、腕のひとなぎで木々を何十本も打ち倒す。
熊を素手で殺し、火の玉を発射して山のてっぺんを吹き飛ばしたという。
住民の懇願を受けて調査に向かったミッドガルズの兵士たちは、ボロ雑巾のような姿になって、命からがら逃走した……。

どこかで聞いた話である。
すずとファルケンは、噂をたどってここ、アーリィまでやってきた。
衝撃の結末に騒然とするユークリッドの闘技場から脱するのは容易ではなかった。しかし、観客席に潜んで煙幕展開の準備を済ませていたファルケンと、そして同じく観客席にいた過去すずの協力を受け、すずはユークリッド脱出をはたすことができた。
そしてかつて辿ったのと同じ道程を経て、アーリィを再訪したのである。

この時代に、雪の魔王がいるはずがない。
雪の魔王ことアーチェ＝クラインが、ミゲールの実家を飛び出してここに住み着くようになるのは、これから半年後のはずである。
ならばこの地に半年早く現れた雪の魔王とは、誰か？
「アーレスさんだといいですね」
「おれたちより早く転移して、そしておれたちにしかわからないネタを広めて合流を待っている、と。そうだと助かるな」
すずとファルケンは祈るようにいった。
以前と同じく、アーリィのはずれの森の入り口、倒木に腰をかけ、たき火にあたりながらの会話である。たき火を使ってファルケンは、携帯用の肉を湯がき、森で摘んだ野草を混ぜて煮込んでスープを作った。いつも腰のベルトにぶら下げている袋から香辛料を取り出してぱっぱと振ると、即席とは思えないうまさの立派なポトフの完成である。
すずとファルケンはそれを飲みながら、会話を続けた。
「アーレスさん、ご無事だといいですね」
「どうかな。だいたいアーレスって決まったわけじゃないんだぜ？　ワイルドカーズの生き残りがおれたちをおびき寄せるために噂を流してるって可能性もある」

「ワイルドカーズ……誰と誰が時空転移しているのでしょうか？」
「クイーンとジャック。屋敷に突入してきておれたちと戦ってた二人だけだと思う。一般的にいって、効果範囲をちょっと拡大するだけで魔術の難易度は一気にはねあがっちまう。おふくろは多分、おれたちを中心としたごくごく狭い範囲に時空転移の術を使ったはずだ。だから、おれたちの退路をふさぐように離れて立っていたジョーカーと、屋敷の外にいたキングはあのまま、あの時代にいるんだろうよ」
いってファルケンは、複雑な表情でむっつりと押し黙ってしまった。
——アーチェはいま、どうしているのだろうか？
そう思うと、いてもたってもいられない気持ちになる。一刻も早く元の時代に戻ってアーチェを救わなければならないと思う。しかし、厳密にいえば、いますぐ転移しても、三日後に転移しても、アーチェが追いつめられている瞬間に転移しなおすことに変わりはない。つまり、一刻も早く、などと焦ることにはなんの意味もないのだ。時間を飛び越えるという本来ならありえない体験が、奇妙な現状を生んでいる。母親の死を目前にしながらも泰然自若としていていいとは……時間軸に沿って物事を考えることに慣れた頭では、すぐには納得しがたい。
そんなファルケンの思いを察し、すずは話題を別の方向に切り替えた。

「あの……ファルケンさんはほんとうにお料理が上手ですね」
「え？　料理？」
「はい！　このスープもとてもおいしいです」
「そうかい？」
ファルケンはまんざらでもなさそうな顔をして、
といった。
「魔法の粉が決め手だな」
「魔法ですか？」
「あ、いや、魔法みたいな、って意味なんだけどね。魚の身とか肉のうまみとか香辛料とか……そういうのを一緒くたにまとめて粉末にした、おれ特製の万能調味料なんだ。これさえ入れれば、どんなひどい料理でも、なんとか食えるようにはなる。いつも持ちあるいてるんだよ」
「すごいですね。コックさんになったらどうですか？」
「コックさん？」
「はい、コックさん」
それを聞いてファルケンは大きな声で笑った。

「コックさんか。悪くないなあ。ファルケン食堂とかいって、安くて早くてうまい料理を食わせる店……うーん、本気で考えてみようかな！」
「お店を開いたら、わたし、お手伝いします」
「ほんとう？　でも野菜はその刀以外のもので切ってくれよ？」
ふたりはそんな会話をかわして笑いあった。
笑いが途絶えてしばらくして、ファルケンがぽつりといった。
「おふくろが悪いんだよ」
「おふくろ……アーチェさん、ですか？」
「ああ。あいつ、なんの料理もできやしねえんだ。肉を使っても魚を使っても、できあがるのは自称アーチェスペシャルってやつでさ。まずいんだ、これが。おやじは食い慣れたのか黙って食べてたけど、おれには耐えられなかった。で、魔法の調味料を編み出さざるをえなかったってわけ」
「ふふふ。アーチェさん、お料理はあまり得意じゃないですものね」
「ああ、そうか。すずちゃんも食ったことあるんだったよな。昔、一緒に旅をして……」
「はい。でも、アーチェさんはお料理は苦手ですけれど、そんなことを帳消しにするくらい、素敵なところがいっぱいある人じゃないですか！　アーチェさんがお母様だなんて、

なんだかうらやましいです」
そうかな、とファルケンは冷たくいった。
「おやじをほっぽらかして家出するような女だぜ？」
すずは言葉に詰まった。
それは、ずっと気になっていたことである。どうしてアーチェは、アーリィの廃屋などにひとり引っ越してしまったのか？　チェスターとのあいだになにかがあったのではないかと、それが心配だった。
「あの……アーチェさん、どうしてお家を出ていってしまったんですか？」
「ここ二、三年、おやじの具合が良くなくてさ」
ファルケンがぽつりぽつりと語ったところによると、すでに齢七十も近いチェスターは床に伏せがちで、衰弱の度合いが著しいらしい。その看護はアーチェとファルケンが受け持っていたが、ある日、突然アーチェがそれを放棄して家を出ていってしまったのだという。チェスターもファルケンも、特に彼女となにをもめたというわけでもない。本当に突然、ぷいといなくなってしまったのである。
腹を立てたファルケンは、アーチェを追って家を出た。病身のチェスターを残していくのは不安だったが、とにかく、腹の底からこみ上げてくる怒りをアーチェにぶつけなけれ

ば気が済まなかった。ミゲールに残るクレスとミントに父のあとを頼み、ファルケンは旅に出た。そして、アーチェがミッドガルズ大陸に渡ったという情報を得て、すずと出逢ったあの山小屋を拠点に、日々母親の足取りを追い続けていたのである。
「で、挙げ句の果てにはアーリィで雪の魔王なんて呼ばれてる始末だ」
うんざりだよ、と付け加えてファルケンは話を終えた。
なんといえばいいのか、すずにはわからなかった。
たしかにアーチェは自由奔放で、空をゆく雲のような気ままさを持っていた。打倒ダオスの旅で、すずはそれをたっぷりと見てきている。
それでも、アーチェがチェスターを見捨てるなどとは信じられなかった。
アーチェとチェスターは、暇さえあれば喧嘩ばかりしていた。けれどもそれは不器用なふたりの愛情表現であり、その裏には断ちがたい絆が隠されていた。チェスターを兄とも慕うすずには、チェスターとアーチェの、互いを想う気持ちが本物であったことがわかる。
——時間がすべてを変えてしまったのか？
いちばん恐れていたことが……仲間との再会をためらわさせていた不安が、現実となったのだろうか？　あの世界樹ユグドラシルの下で、自分の分身とも思えるくらいに分かり合っていた仲間たちが、時間の波に洗われることで別の誰かに変わってしまったのだろう

か？
「きっと、なにか理由があったんだと思います」
すずはいったが、それはあたかも自分に言い聞かせているかのように、不自然に響いた。
「どうだかな。おれが魔術ではなく敢えて法術を学んだのは、おふくろに対するささやかな反抗のつもりなんだ。あんたみたいにはならないぞ、ってさ」
ファルケンはそういって立ち上がった。
「暗い話になっちまってごめんな。すずちゃん、先に寝てくれよ。見張りはおれが立つ」

## 二

魔王の屋敷は、ほとんど以前と変わっていないように見えた。
もっとも、〝以前〟というのはあくまでもすずたちにとっての体感時間的〝以前〟であり、歴史の流れ的にいえば、いま目の前にある屋敷のほうが、すずたちが見た屋敷よりも一年も〝以前〟の屋敷なのだから話はややこしい。
すずとファルケンは、気配を殺して慎重に屋敷の様子を観察した。屋敷から一〇メートルも離れているため細部までは観察しきれないが、確かに屋敷には生活の息吹が感じられ

る。あとはそれが、アーレスのものであることを祈るばかりである。
早朝から木の陰に隠れて観察すること四時間。
魔王が現れた。
正面玄関の扉を勢いよく開いて現れた魔王は、アーレスではなく、かといってジャックでもない。
熊である。
呆然と見守るすずたちのほうへ、巨大な熊が、のっしのっしと二本足で直立歩行してくる。途中、ぼりぼりと後頭部を掻いたりするさまはまるで人間。この奇妙な熊が雪の魔王だというのか？
「熊ですね」
なんといっていいのかわからず、すずは見たままをファルケンにささやいた。
「熊だな」
ファルケンもどう答えていいのかわからない。
熊は、すずたちにはまったく気付く様子もなく、ずかずかと歩み寄ってくる。最後にはすずたちが隠れている木から三メートルもの近くまでやってきて、それからごそごそと腹の辺りをまさぐりはじめた。

すずたちは息を殺して熊の様子を見つめていたが、熊がチャックを開けるように自分の腹を開いて音をあげて豪快に立ち小便を始めたのを見て、ようやくそれが熊ではなく、熊の皮を被った人間であることに気がついた。
「アーレスさん？」
おそるおそるすずは声をかけた。
「んああ？」
熊は間抜けな返事をしてから
「おおっ、お嬢ちゃんじゃねえか！」
と叫んだ。紛れもなく、アーレスの声である。
「おうおう、ファルケンもいるじゃねえか！　いやあ、待ったぜ！　いま時空転移してきたばっかりかい？　おれはもう何ヶ月もこの時代にひとりぼっちで、そりゃあ心細かったんだぜ⁉　地元の人間がうるせえもんで、こんなかぶりものまでしてよう！」
「前隠せ、前！」
ファルケンは真っ赤になってうつむいているすずにかわって、アーレスにいった。
「おう、すまねえすまねえ！　なにせあのボロ屋敷、トイレなんてしゃれたもんは完全にぶっ壊れてちまってよ。寒いなかわざわざこんな離れたところまでこなきゃならねえも

んで、そりゃ難儀してた――」
「そんなことはどうでもいい！」
ファルケンがいった。
「とにかくそのかぶりものをとれって！」
「おう。でも暖かくて、結構捨てたもんじゃないんだぜ？」
ファルケンは両手で熊の頭部を抱えて、よいしょ、と上に抜き取った。すっぽりと取れたその下から、不敵な笑みを浮かべたアーレスの顔があらわれる。
「ようこそ魔王の屋敷へ！　ま、散らかってるが入ってくれや！」

＊＊＊

すずとファルケンは、アーレスに導かれて屋敷の地下室へと向かった。
途中、クイーンとの決着がついたことと、アーレスが三ヶ月前にこの時代に転移してきたことを確認しあう。そうしてたどり着いた地下室は、食料やワインの貯蔵庫だったとおぼしき、一〇メートル四方の部屋である。いまは無惨に荒れ果てて、棚の残骸や割れた瓶が転がるだけの場所に見える。

「この地下室が、なにか……？」
不思議そうに尋ねるすずに、アーレスは
「まあまあ。この三ヶ月間の苦労の成果をご覧あれ、とくらあ」
といって、壁をどん、と拳で叩いた。
すると、ぎぎぎ、と音を立てて壁がスライドし、その後ろにぽっかりと洞穴があらわれた。
「これは……」
「秘密の抜け穴ってやつさ」
アーレスはニヤリと笑って、すずにウインクを送った。
「貴族の別荘のくせに抜け穴の一つもありやがらねえってのは、あとあと不便だろう？というわけで、アーチェ姐さんも知らなかった脱出口が、過去の人間によってここに作られたってわけだ」
「なるほど！　これであの瞬間に戻っても、屋敷から脱出できますね」
「苦労したんだぜ？」
「アーレスさん、すごいです！」
抱きつかんばかりのすずを見て、アーレスは照れくさそうに頭を掻いた。

「ガキの頃から知ってる伝説の英雄に誉められると、ま、悪い気はしねえな。さてと。残る問題は、どうやってこの時代から元の時代に転移しなおすかだが……」
「トールに行けば問題はありません」
すずがいった。
「トール？」
「はい。超古代都市トールには、時空転移装置が隠されています」
「初耳だな」
戸惑いを見せるアーレスに、ファルケンが説明する。
「はるか昔、人間を越える知識を持った誰かが作った海上都市のことさ。滅亡して海の底に沈んでいたのを、おふくろやクレスさんたちが浮上させたんだ。この時代では、ユークリッドが完全に管理している。だから、時空転移装置も含めて、ユークリッドの一部のお偉いさんだけしかその存在はしらないってわけさ。アーレスの旦那が聞いたことがないのも無理はない」
「待てよ。この時代って、たかだかおれたちの時代の半年前だろう？　いま……じゃなくて、おれたちの時代、四三五五年にもまだそんなモンがあるってのなら、敵さんはわざわざ＜時間の剣＞なんざに頼らなくてもいいんじゃねえのかい？」

「いや。四三五五年には、もうトールはないんだ」
「ない?」
「おふくろたちが、時空転移装置が再び惨禍を招かないようにと、トールを海底に沈めなおしたんだ」
「ふーむ、なるほど」
わかったのかわからないのか、アーレスはあやふやな声を上げた。
「ま、頭脳労働はおれの担当じゃねえ。おまえさんがたが大丈夫っていうんなら、大丈夫なんだろうよ。ただ、もう一個、確実に問題が残ってるぜ」
ジャックの野郎さ、とアーレスはいった。
「これだけ派手に魔王の噂を流したんだ、おまえさんがたの代わりにあの液体野郎が来るんじゃねえかと毎日警戒だけはしてたんだが、やっこさん、一向にあらわれる気配がねえ。トーティスのクイーンと合流していなかったところから考えても、たぶん、アーチェ姐さんに近い位置にいた人間ほど早くこの時代に到着するってえファルケンの学説が正しいんだろう。とすると、やっこさん、どれだけ後かわからねえが、これからこの時代に現れるぜ。あんな化け物をこの時代にほっぽらかしにしていくわけにはいかねえだろ?　なにをしでかすかしれたモンじゃねえ」

すずは腕組みをしてうなった。
「困りましたね。ワイルドカーズの雇い主はユークリッドの有力者です。もしかしたらこの時代のリヒャルトと接触して、よからぬことを企むかもしれません」
「それこそ〈時間の剣〉なんざ必要なくなっちまうくらいのよからぬことを、な」
三人のあいだに重苦しい空気が流れた。
そのとき、背後から
「そいつはいいかもしれねえなあ」
との声が走った。
愕然と振り返ったすずたちの目に、地下室の入り口に逆行気味に立つ人影が飛び込んできた。
「おれはついてる。突然すっとばされてこんな時代に来たと思ったら、さっそくパーティー会場にいきあたるとはよ、けけけ」
ジャックである。

三

間髪をおかず、すずの両手から無数の手裏剣が飛んでいる。
しかしジャックは身をかわす様子すらなく、平然とそのすべてを全身に受けてみせた。
深く突き刺さった手裏剣は、押し戻されるようにゆっくりと床に落ちてゆく……。
あらゆる物理攻撃を無効にする液体人間、ジャック！
人間の常識を完全に超越した魔人は、にやにや笑いをうかべたまま、手裏剣をしゃがんでひろい、そして無造作にそれらを投げ返した。
「ファルケンさん！」
かわしつつ、すずが指示を放つ。
ジャックを倒しうるのは魔術しかない。事実、すずたちは一度インテグニションでジャックを悶絶させている。ここはなんとかしてあの場面を再現するしか生き延びる道はない。
しかし、それはジャックも百も承知である。
「させるか！」
そう叫んで投げつけたのは、粉の詰まった布袋である。壁にあたって破裂したそれからは、もうもうたる白煙が噴出したからたまらない。狭い地下室で一同、むせかえって言葉も出ない。これでは呪文の詠唱どころではない。

「おれがなにも考えずにリマッチを挑んだと思ったかよ！」
叫んでジャックは空中に躍り上がった。
「い、一時撤退します！」
むせながらすずは叫んだ。
三人はアーレスが作った洞穴にかけこみ、必死で走った。しかしジャックは、そのぶよぶよした身体からは想像もつかない速さで、猛然とすずたちを追跡してくる。
「な、なんだありゃあ！」
振り返ってアーレスは悲鳴を上げた。
ジャックが迫っている。
膝を抱えて丸くなり、ジャックは走っている——いや弾けて転がっている！
丸くなったジャックは、さしずめゴムボールのように、洞窟の壁に天井に猛烈な反射を繰り返しながら、加速をつけてすずたちに迫っていた。そのさまはあまりにも人間離れしてすでに滑稽でもあるが、この状況では笑うどころではない。
「こっちだ！」
トンネルが二股に分かれた場所で、ジャックが指示を飛ばした。これまでのトンネルから直角に折れ曲がったほうへと、三人は駆け込んでいく。反射をしくじって別の道へと跳

ね飛んでいくことをすずは期待したが、振り返るとジャックは器用に正しい道を選び、勢いを殺すことなく迫り続けている。
トンネルはやがて自然の洞窟へとつながり、さらに複雑に分岐した。しかしそのことごとくを人間ゴムボールと化したジャックはクリアし、徐々に加速を増していく。すずたちとの距離はすでに、五メートルもない……。
突然、アーレスが立ち止まった。
なにを、とすずが問うまもなく、天井に反射したジャックの身体が猛スピードでアーレスの上にのしかかった。
「おらあああああ、捕まえたぜえええええ！」
仰向けに倒れたアーレスのうえに覆い被さって、ジャックは叫んだ。
すずはその無防備な背中に猛烈な斬撃を加えたが、水を切ったかのようになんの手応えもない。
「魔術師の坊やもこれだけ走ったら息があがっちまっただろうが、ああ？」
アーレスの顔面を水のような腹へと埋めて、ジャックが嗤う。たしかにいうとおり、ファルケンは大きく肩で息をしてあえいでいる。魔術の発動には、正確な呪文詠唱と同時に、精神集中と独特な呼吸法が要求される。これではそのいずれをも満たしようがない。

そうしているうちにも、呼吸を封じられたアーレスは魔人の腹のなかで溺れていく。
なにもかもを計算しきった、必殺の攻撃である。
「もうすぐだ。そうやってお友達が溺死するところを見守ってな、うわははは！」
「ぐむ……！」
アーレスはうめいて、ゴロゴロと激しく地面を転がった。しかし、ぴったりと密着して抱きついたジャックはまったく動じない。依然アーレスの顔を拘束したまま、哄笑（こうしょう）を続けている。
「あがけ！　おまえのあがきがおれに死の痛みを感じさせてくれる！　あがいて感じさせろ！　うわはは、はははははは！」
万事休す！
しかしジャックの哄笑は、突如驚愕の叫びへと変わった！
「ああーっ！」
いったときには、すでにジャックの身体は地上にはない。
落ちている。
岩のかげに隠れていた深い縦穴に、アーレスもろとも真っ逆様に落ち込んでいたのである。

「かかったな、阿呆が！」
奈落に落ちながら、アーレスが会心の雄叫びをあげた。
三ヶ月の土木作業によってこの洞窟の地形を完全に把握したアーレスは、逃走を装って
まんまと魔人を罠まで誘い込み、身を挺して仕上げをなしとげたのである。
「うおあおおおあっ！」
野獣のような叫びをあげて、ジャックは電光のように手を伸ばして奈落の縁をつかむ。
そして死の抱擁から解放されたアーレスは、負けじとジャックの片足をがっしとつかむ！
「ち、畜生！　離しやがれ！」
ジャックは足をばたつかせてアーレスを振り落とそうとするが、どっこいアーレスとて
そう簡単に手を放しはしない。万力のようにぎりぎりと魔人の足首を握りしめて叫ぶ。
「お嬢ちゃん、こいつをブチ落とせ！」
逆転！
「でも！」
すずは悲痛な叫びをあげた。
ジャックの手を奈落の縁から引き剥がすことはたやすい。しかし、それは同時にアーレ
スを奈落の闇へと葬り去ることとなるのだ。

底の見えない縦穴の彼方から、びょうびょうと冷たい空気が吹きあがってくる。底に待ち受けるのは氷結の地獄か、はたまた底なしの永遠なる転落か？
「できません！」
すずは頭を振って叫んだ。
「やれ！　坊やでもいい、その化け物の手を踏みつぶしてやれ！」
「ふざけるな、できるかよ！」
ファルケンもすずと同じ気持ちである。
「くそが……登ってやる……登り切ってやる……」
脂汗を流してジャックはうめいたが、アーレスが振り子のように足を揺らしてそれを許さない。ジャックは落ちやがれ、と叫んで自由なほうの足でアーレスの顔面を激しく蹴りつける。防御手段を持たないアーレスはただ蹴られるままである。
そんな悲惨な様子を見ながらも、すずたちはじりじりとなにもできないでいる……。
どうすればいい？
ああ、どうすればいいのだ⁉

# 四

「どうすればいいんですか⁉　わたし、どうすれば……！」
「お嬢ちゃん！」
縦穴のなかから、アーレスが叫んだ。
「昔、マルスという男がいたのは知ってるだろう！　アセリア暦四三〇四年！　トリニクス＝D＝モリスンが封印したダオスを復活させたユークリッドの騎士……トーティスの虐殺を引き起こした人類の裏切り者さ！」
「⁉」
マルスの名前は、当然、すずもファルケンも知っている。
私欲に目をくらませたマルスは、ダオスの封印を解く鍵であるペンダントを狙ってトーティスを襲い、住民数十名を皆殺しにした。そして、虐殺された住民のなかには、クレスの両親と、チェスターの妹も含まれていたのである。この事件こそが、クレスとチェスターを打倒ダオスの冒険へと巻き込んだ直接の原因である。
しかし、アーレスはなぜこのようなときに、そのような話をするのか……？
「結局マルスは、復活したダオスに殺されちまった。ぶっといレーザーで消し炭にされちまうってえ悲惨な末路だ。だが、残された家族にゃ、もっとひでえ地獄が待っていた！」

「う、うるせえ、死に損ないがなにをほざくか！　落ちろ、落ちろっていってんだよ！」
蹴られながらも、アーレスは叫び続ける。
「ダオスを復活させたってんで、マルスの家族は憎まれ、蔑まれ、石もてユークリッドを追われた！　追い払われた家族はミッドガルズに渡って、噂から逃げるように各地を転々とした」
「アーレスさん！　なにを——」
「おれなんだ！　マルスは、おれの爺さんなんだよ！」
すずもファルケンも、そしてジャックまでもがあっと声をあげた。
「マ、マルスっていやあ、おれ以上の大悪党じゃねえか！　てめえ、死にやがれ！」
悪党ジャックがこう叫んだのだから、この世界に生きる人々がどれだけマルスを憎んでいるかはしれようというものだ。
「首斬り役人なんてみっともねえ人生を送りながらも、おれはずっと英雄になりたいと思ってた。だからお嬢ちゃんのお仲間が処刑場にしょっぴかれてきたとき、思わず助けちまった。別にお家の名誉を回復したいとか、そんなご大層なことじゃねえ。——胸を張りたかった！　一度でいい、胸を張ってみたかった。自分の価値を証明してみたかったんだ！」

ここにもまた、あの戦いに関わった人間がひとり――。
「旦那！」
ファルケンが涙声で叫んだ。
「あんたは英雄だよ！　すげえかっこいいって！　最高の英雄だって！」
「ありがとよ。それを聞いて、おれもようやく胸を張れる」
「アーレスさん！」
「あばよ！」
叫んでアーレスは身をひねり、一気にジャックの身体を半回転にねじった。
「ああーっ！」
ジャックは叫んでついにその手を離し、そして悲鳴をあげながら暗闇の底へと消えていった。
その声はしばらく続いてこだましていたが、やがて、ふっと溶けるように消えて聞こえなくなった。

# 幕間

一

連合軍指揮官リヒャルト＝ホニヒスは、焦りを感じていた。
おのれの足下が揺らぎつつある。

ダオスがもたらした混乱をいち早く収拾し、無政府状態に陥ったミッドガルズ大陸にまっさきに目をつけたのは、本来、ユークリッドであった。しかし、折り悪く起こった一部騎士によるクーデター未遂事件が出足をくじき、結局、アルバニスタと連合を組んでの派兵という形を取らざるを得なくなった。
――無能なやつらが足を引っ張る。
みずからの能力に絶対の自信を持つリヒャルトは、いらだちを押さえきれない。しかも、そうした個人主義が災いしたか、ミッドガルズ王家への根回し工作も失敗に終わってしまった。ミッドガルズ王家の継承者であるヴァルター王子は、いまやすっかりアルバニスタ派に組み込まれてしまっている。
「――いかがしましたかな？　お顔の色が悪いようですが」

その声で、ようやくリヒャルトはわれに返った。
「い、いえ。このところ心労続きでいささか眠りにつきづらくなっておりましてな」
慌ててそういったが、目の前に座る男に
「それはよろしくありませんな。雑事はすべて私にお任せくださり、リヒャルト殿はしばしお国に帰られてはいかがかな？」
と切り返され、ぐっと言葉に詰まった。
憎っきはこの男――アルバニスタの総司令、ルーングロムである。
エルフの血をひいて長命の恩恵を授かるルーングロムは、ダオスとの戦いを始めから終わりまで体験しているという事実から、ヴァルター王子の信頼を勝ち得た。いまはまだ、ユークリッド／ミッドガルズの共闘態勢維持の姿勢を貫いてはいるものの、王位継承権を盾に自国の勢力を強めていこうと動くかもしれぬ、とリヒャルトは考えていた。
そうなれば、ユークリッドの全権大使であるリヒャルトの立場は危うい。
――派兵が早ければ、こんなことにはならなかった。
リヒャルトが〈時間の剣〉を求めたのは、当初、そういった気持ちからだった。クーデターさえ起こらなかったことにすれば……しかし、その思いはとどまることのない歪んだ拡大を続け、最終的には、なにもかもを自由にコントロールできれば、という狂気へと変

貌した。
「ところでリヒャルト殿。例の忍者の件はいかがあいなっておりますかな？」
ルーングロムの問いが、鋭くリヒャルトの胸をえぐる。
「引き続き調査中です」
なんとかいったが、動揺が顔に出たのは隠しようがない。
リヒャルトはふむ、とうなっていった。
「稀少鉱石の発掘現場を襲ったあの凶賊どもがいまだ巷を堂々と闊歩しているとなれば、これは一大事。ヴァルター王子も、ひどくお心を痛めておいでですぞ。いかがでしょう、リヒャルト殿。この件に関しては私にお任せくださっては？」
「大陸南部の警備はわれらユークリッドが任されている！」
動揺を隠そうと、いきおいリヒャルトの語気は荒くなる。
「——無礼な！　ルーングロム殿はわれらを能なしとでもお思いか⁉」
子飼いの異能集団ワイルドカーズを投入し、ミッドガルズ王家が密かに発掘を進めていた〈時間の剣〉を奪い、その罪は普段から奇異に思われている伊賀栗の忍者たちへとなすりつける……。しかしその計画は、藤林すずが〈時間の剣〉を持って逃走したことから破綻している。

「お気に触ったのならば謝罪いたします、リヒャルト殿。いえ、なに。心労が溜まって夜も眠れないとおっしゃるのでいらぬ心配をしたまでのこと。なんら他意はありませぬよ、ははは」

——この男、薄々真相に気づきつつある。

リヒャルトは歯ぎしりするような思いで、アーリィへ向かった配下たちの任務完遂を祈った。

二

いっぽう、炎上するアーリィの屋敷に封じられたアーチェはといえば——。

時空転移成功の確かな手応えにガッツポーズをとったのもつかの間、部屋に駆け込んできた全身包帯の男に壁際に追いつめられ、絶体絶命の縁に立っていた。

「まさか貴様ごときが時空転移の術を使うとは……ぬかったわ」

包帯に隠されたジョーカーの口から、しわがれごえが漏れる。

「へへーん！　天才をなめるからこういうことになるわけよ、わかるう？」

強がって笑いながら、アーチェはひとつ奸計をめぐらせていた。

あと三歩。
ジョーカーの三歩前の天井の梁が、炎にまかれていまにも落ちそうになっている。タイミング良くあと三歩分ジョーカーを誘導できれば、うまく梁の落下に巻き込めるかもしれない。
魔術を封じられたアーチェにとって、残された逆転の道はそれしかない。
「実をいうとあたし、こういうのって結構憧れたりしちゃったりしてたんだ」
アーチェはそういってタイミングを計る。
「時空転移した仲間が帰ってくるのを信じて、こうやって絶対のピンチを耐え忍ぶって状況にさ」
「仲間？　藤林すずのことをいっているのか？」
「それとうちのかわいいぼうやとね」
それを聞いて、珍しくジャックが笑った。
「ジャックとクイーンが共に転移している。あやつらごときが生きて返ってこられるものか」
「ふーん、笑うわけ？」
アーチェはいった。

「あんた終わってるよ。子供の頃、信じてなかった？　最後には正義が勝つって。それを笑うようになっちゃ、あんた終わってるよ。ホント、終わってる」
「……きさま、なにを企んでいる？」
ジョーカーの問いにアーチェは肝を冷やしたが、顔には出さず、平然と笑ってみせた。
「別にぃ。気になる？　教えて欲しい？」
梁が動く。
微妙に、しかし確実に動く。
――来い！
アーチェは念じながらいった。
「どうしても知りたかったらこっち来て耳貸してみそ？　優しく囁いて教えてあ、げ、る」
「……強がるか、女がッ！」
ジョーカーが猛然と走った。
途端、それをスイッチにしたかのように轟然と梁が落ちる！
「！」
悲鳴を上げる隙すら与えず、梁がジョーカーを押しつぶした。見事背骨のど真ん中を折

るかたちで、どっかりとジョーカーを組み敷いている。さらに、この落下の衝撃が呼んだか、予想外の梁までもが雪崩を打ってどかどかと落下する。あっというまにジョーカーの身体は、幾本もの梁の山の下へと消えていた。どうみても即死である。

「よっしゃ！」

ガッツポーズを一発決めて、アーチェは部屋を飛び出した。

「信じてるとかいったものの、黙ってじっとなんかしてらんないよねぇ。いやほんと、うちの旦那様は偉いわ、うん」

つぶやいて階段を駆け下り、アーチェは切り裂かれたドアの前に机や椅子をがんがん積み重ねてバリゲートを築き上げた。

作業に集中していたせいか、それともその気配があまりに冷ややかで無機質だったかだったからか――アーチェは気づかなかった。すべるように静かに、全身包帯の男が階段を下りて自らの背後に迫りつつあるのを……。

# 【第四部】

## 暁天（ぎょうてん：明け方の空のこと）

## 第十一章｜魔人粉砕！

# 一

それは完全な縦穴ではなかった。
しばらく暗黒のなかを垂直落下し続けたアーレスだったが、突然全身に衝撃を感じたかと思うと激痛が脳を貫き、気絶した。実のところ内臓のようにぐねぐねとゆがんでいた穴の中、意識を失ったアーレスの身体は、ごつごつと壁にぶつかりながら、パチンコ玉のように転げ落ちていく。
気がつくと、氷の板のうえにうつぶせに横たわっている。
――ここはどこだ？
アーレスは体を起こそうとしたが、どこかが折れたのか、身体をひねることすらできない。どうにか首だけを回して真横を見れば、そこにあったのは一番見たくなかった顔である。
「よう、お目覚めかい？」
のっぺりとした顔に笑顔を張り付けて、ジャックがのぞきこんでいった。
「あと一分目を覚まさなかったらやっちまおうと思ってたところだ。どうだい、痛むか

い？」
「……てめえ……」
アーレスはうめいた。
「おっとっと、そんな怖い顔でにらむなよ。あのトンネルで見ただろ？　おれの身体はゴム鞠みたいなもんさ。これくらいの高さから落っこちたところで、痛くもかゆくもねえ。ま、おまえさんはそうもいかなかったみてえだけどな」
「……どうして殺さなかった？」
「出口を知ってるんじゃねえかと思ってよ」
ジャックは立ち上がって、あたりを見回した。
「すげえ洞窟だな。こんなときじゃなきゃ、観光に来てえくらいだ。こういう場所に連れてきたら、どんな女もオチるぜ？　アラ、ロマンチック、とかいってな！　ひひひ」
下品な笑い声があたりに反響した。
それにしてもジャックのいうとおり、美しい光景である。
氷でできた洞窟とでもいおうか。
天から地まで、見渡す限りすべてのものが氷でできている。見上げれば無数のつららがシャンデリアのようにぶら下がり、その天井と地面は巨大な氷の柱でつながれている。抽

象芸術作品のように奇妙な形をした氷の塊があらゆるところに大小の山を作り、きらきらと輝いている。それぞれの存在が鏡のような表面に別の存在を写し、その幻影がさらに別の幻影を写し……現実と幻の区別がつかないこの光景こそ、まさに夢幻郷というべきか。
万年雪に覆われたアーリィの自然が、地底深くにひっそりと完成させた至高の芸術品である。
「きらきらきれいだよなあ。で、地の底なのにも関わらずこんなに明るいのは、どこから地上の光が入ってきてるってこったろ？　その光が反射に反射を重ねて、こんなにここを明るくしてる。で、質問だ。光が入ってくる場所、要するに出口はどこだ？」
ああ、アーレスに答えようがあるはずがないではないか！　このあたりの地形を熟知したアーレスといえど、さすがに前人未踏の秘境の地理までは知りうるべくもない。
しかもジャックは、アーレスの表情から素早く答えを読みとってしまった。
「ちっ、知らねえか。しかたねえ。自分で探すとすらあ」
剛剣士の運命、ここまでか！
しかしジャックは、なぜか一撃を加えようとはしない。
「……どうした。やらないのか？」
「やらねえ」

ジャックはあざ笑った。
「ゲームをしようじゃないか。ルールは簡単だ。おれが追っかけて、おまえさんが逃げる。おれに捕まったらゲームオーバー。どこかの出口まで逃げ切ればゲームクリアだ」
「……なにを考えてやがる？」
「おまえさんには理解できねえだろうが、これはおれにとって重要な意味がある儀式なんだよ」
「いい趣味だな」
「へへへ、まあな。ホラ、逃げろよ。これからおれは立ち小便をする。タイムリミットは小便が終わるまでだ。そのあいだに、せいぜい遠くまで逃げろ。よし、始めるぜ、へっへっへ」

　生まれながらにして無敵の肉体を持つ男、ジャック。
　彼は長い裏稼業のなかで、一度たりとも死の淵まで追いつめられた経験がなかった。
　あらゆる物理攻撃は身体が受けつけない。
　恐ろしいのは魔法攻撃だが、それだって対処方法はいくらでもある。キングと組むようになってから得た知識で、いまや魔法への対処術はほぼ完璧といえよう。それは対ファル

ケン戦で見せた対応からも伺いしれる。
すでに地上に脅威はない。
ゆえに死に対する確固たる認識がない。
ジャックにとって、死は、どこか遠いところにある漠然としたイメージでしかない。もちろん老衰や病気という名で、いつか死は確実にジャックの魂をも鷲掴みにするであろう。けれどもそれはおそらく、遠い未来の話だ。戦場に立つ人間なら誰しも抱いている、すぐ隣に潜む死の運命――つぎの瞬間死んでいるかもしれないという恐怖が、ジャックからは欠け落ちている。
そして恐怖の欠落が、こうした残酷なゲームへとジャックを駆り立てる……。
「うおおおおし、時間切れだ！」
立ち小便を終えて喜色満面、ジャックはぐるりとあたりを見回した。どこに逃げたのか、アーレスの姿は見あたらない。
「どおおこおおおだあああ？　どこにいるんだアーレスさんよおおおおう！　震えて逃げる素敵なお顔、おれに見せてくれよおおおおう！」
ジャックは叫びながら洞窟を歩き始めた。
ジャックはこうして、他人を通して死というものを観察する。だから最後は自らの腕に

相手をかき抱いて息の根を止める。おのれの肉体のなかで誰かの魂が消えていくとき、ジャックは死の意味というものを究極的に理解できたような気がするのだ。
「見いいいつけた！」
アーレスの姿を発見して、ジャックは叫んだ。ばたばたと走って近づくが、はたしてそれは氷の壁に映写った幻影である。
「ほいほいほい！　こりゃ観察しがいがあるぜ。たまらねえ！　おおい、アーレスよ！おまえさんの姿が見えてるぜえ。おれも見えてるか？　見えてるんだろ？　いま殺しに行くからな！」
鼻歌を歌いながら、ジャックは死の探索を続ける。ときおり、反射に反射を重ねたアーレスの姿が氷壁に映る。這いずりながら必死で逃げる惨めな姿が……あの剛胆なアーレスですら隠すことができない死の恐怖がくっきりと映る。
「往生際が悪いねえ。でもそういうの、最高だぜ？」

二

必死の逃走もむなしく、アーレスはついに袋小路へと追いつめられた。

ジャックが嗜虐の笑みを浮かべて見下ろしている。
「ゲームオーバーだ」
ジャックが笑った。
「因果ってやつだ。小さな親切やったくらいじゃ、断ち切れねえんだよ。みじめなもんだな」
アーレスは黙ってそれを聞いていたが、やがて
「助けてくれ」
と小さく呟いた。
「なに？」
「助けてくれ」
「へへ、へへへへ！　ついに本性現しやがったな！　英雄になるためなら、死ぬのなんて怖くねえんじゃなかったのかよ、ああ⁉」
「そう思っていたさ……でも、違った」
「そうだろうよ！　おれがやった奴らはみんなそうだったぜ！　最初は強がるモンだよ。自分の命はいらないから家族だけは助けてくれとかな。でも最後にゃ泣きわめくんだよ。家族なんてどうでもいいから自分だけは助けてくれってな！」

「頼む……おれが間違っていた。認める。だから助けてくれ」
アーレスの目は、まさしく負け犬のそれである。
かなわぬ強敵を前に、腹を出して服従の意を表する負け犬だ。命を賭してまで発動させた最後の策すら通じず、ついにアーレスの神経は限界を迎えてしまったのだろうか……。
「そうだなあ。てめえらには痛い目に遭わされてるからなあ。とりあえず、てめえらがどうやって時空転移するつもりだったのか教えてもらおうか」
アーレスは促されるまま、すずから聞いたトールの情報を話して聞かせた。途中、氷の床にうずくまっているせいか激しくせき込んで話が中断すると、容赦なくジャックの蹴りがとんだ。
「――なるほどな。そんな便利な装置があったとは……。よし。それだけ聞けば用はねえ」
「助けてくれるのか？」
「はあ？　なにいってやがるよ。死ぬんだよ、おまえさんは」
「や、約束が違うじゃないか……」
「おまえさんみてえな裏切り野郎みてると反吐が出るぜ。裏切り野郎……そうだ、おまえのじいさんと同じだよ。てめえは裏切り野郎なんだよ！」

ジャックは動けないアーレスを引き吊りあげ、無造作に壁にたたきつけた。
「や、やめてくれ……おれはもう動けないんだ……」
アーレスは弱々しく懇願したが、首尾はジャックの嘲笑を誘っただけに終わった。
「そりゃいい。殺しやすいってモンだ！」
「やめてくれ……やめてくれよ……」
泣きながら丸くなるアーレスをさんざんサッカーボールのように蹴りまくって、ジャックはようやく満足したか
「よし、そろそろ終わりにしてやるぜ」
といった。
表情を観察しながら、ぐったりとするアーレスの上に覆い被さっていく。途中、アーレスが最後の抵抗のつもりか、軽くジャックの腹を殴りつけたが、もちろんそんなものが通用するジャックではない。
「まだわからねえかよ。阿呆が」
アーレスの拳を握ってひねり上げ、ジャックはあざ笑った。
「おれの身体には、どんな攻撃も効きやしねえ。おまえさんが魔術でも使えるっていうんなら話は別だけどな、とてもそんなお利口さんには見えねえ！」

言い返す気力も失せたのか、アーレスはうなだれて無言である。
「あんまりみじめだから、おれの身体でさっさと溺死させてやろうと思ったが……このまま凍死するのを見守ってやるのも面白いかもしれないな。真っ青だぜ？　まつげも凍って真っ白で、目も開かねえありさまで……いいねえ。まさに死ってかんじだよ。死を体現している！」
「…………だ」
アーレスがなにかをつぶやいたが、まさに蚊の泣くような声、聞き取ることができない。
「ああ？　聞こえねえなあ！」
「……三ヶ月間」
ようやく、絞り出すようにアーレスがいった。
「三ヶ月間、このあたりを散歩しまくったんだよ……」
「そりゃよかったな。で、あの縦穴も見つけたってわけだ、えらいえらい！」
「それだけじゃねえ。あの縦穴がこの氷の洞窟につながってることも実は発見してたわけよ……」
「ん？　だからどうした？」
「ロープで下りて、探索した」

「……」

「直接落っこちてもぎりぎり死なないってさ」

「……なにをいっている？」

「おい、自分の腹、見てみなよ……」

「ああ？」

「いいからさ、腹見てみなって」

「な――」

視線を落とし、そしてジャックは悲鳴をあげることもできなかった。

ひびが入っていた。

先ほどアーレスに殴られた腹がべっこりとへこみ、蜘蛛の巣のような細かい亀裂が走っているのである。

絶対無敵の肉体に、亀裂が！

そしていま初めて、ジャックはおのれの肉体が凍り付きはじめていることに気がついた。

「水ってのは、結構凍るのが早いらしくてなあ」

アーレスが笑った。よろめきながら立ち上がる。

「凍る前にきづかれるんじゃないかとヒヤヒヤしたが、てめえが斬られても殴られても

ちっとも痛みを感じていなさそうなところにきづいてな。どうやら、ふつうの感覚ってもんがないらしい、と思いついたのさ。どんなに攻撃を吸収したって、痛くてのたうちまわったり気絶してるようじゃ意味がねえもんな。ま、よくできた身体のつくりだが、今回ばっかりは裏目に出たな……ああ？」
「く、来るな！」
「時間稼ぐのも簡単じゃなかったよ。みっともねえ命乞いまでして、無防備に蹴られまくって」
「来るんじゃねえ！」
「払ってもらうぜ」
「……」
ジャックはあとずさった。
「たっぷりと利子付きで払ってもらうぜ、鰻野郎！」
うまれてこのかた体験したことのない感情が、全身をしびれさせていた。死の恐怖。それがいま、これ以上ないほどの確実なものとして、唐突に目の前に突きつけられている。
ジャックの頭は麻痺したように、なにも思考することができなかった。満身創痍のアーレスが天をつく巨大な悪魔に見え、すでに拳を握る力もわかず、足はがくがくと震えて役に

立たない。これが――ジャックはいまこそ真に理解した――これが――これが死の恐怖か、と！
狭い洞窟である。後退するにも限界がある。ジャックはすぐに氷の壁にぶち当たってしまった。
「待て！」
ジャックは必死で笑顔を作っていった。
「もうおまえさんの命は狙わねえ！　い、いや、いっそ手を組もう！　キングは強敵だぜ？　天術っていう究極の魔法を使って、どんな魔法も封じる化け物だ。ジョーカーもいるぞ？　おれも正体はわからねえが、死んでも死んでもすぐに生き返ってきやがる。手足をばらばらに吹き飛ばされても、一時間後には完璧な身体で――」
「もういいよ」
一気呵成に喋るジャックを、アーレスが制した。
「え？」
「もう情報なんぞしゃべってくれなくて結構」
「おお、許してくれるかよ！」
ジャックは喜色満面でいったが、アーレスはぼきぼきと指をならしていった。

「あんまりしゃべってもらっちまうと、後味わりいからな」
ついにジャックは悲鳴を上げた。細い、甲高い、女のような悲鳴であった。アーレスはそれを聞きながらぎゅっと拳を握り、腹の底から熱い塊を吐き出すように、おお、とひとこえ吠えた。
ハンマーのようなアーレスの拳が、ジャックに叩き込まれていく！
無数のパンチがジャックの身体にヒビを作るが、アーレスの怒りはとどまるところを知らない。延々と棒立ちのジャックを殴り続け、やがてジャックの全身、あらゆる部分に亀裂が生じた。シャーベット状の部分がばらばらと崩れていく。
「お、おれの身体が……おれの無敵の身体が……！」
「よっこらせっと」
ジャックは斬首刀を背中からはずし、しんどそうに肩に担いだ。
「おかげさんで暖まったよ。あんまり惨めだからそろそろ終わりにしてやらあ」
「お、お、おれの身体が、な、な、なんでだよ！」
「――せえの」
「おおおおおっ！」
「どっかーん！」

アーレスは叫んで大剣を横にフルスイングした。

かきいいいいいいん。

場違いなまでに爽やかな音を立てて、ジャックの身体は粉々の氷片となって砕け散った。

「ま、かちわりって季節でもねえけどな」

いってアーレスは鼻をこすって笑った。そしてあらかじめの調査で頭に叩き込んである

出口へと、足を引きずって歩み始めた。

# 第十二章　魔科学、逆襲

# 一

「あ、あんたその身体……」
アーチェが茫乎(ぼうこ)と立ちつくしていった。
背後からの一撃を受けて深く裂けた肩から、血が流れ落ちている。出血は激しく、足下にできた血だまりの大きさはぎょっと息を飲むほどである。
その血の池に、赤く怪物の姿が映っている。
ジョーカーである。
両腕があらぬ方向に曲がり、首はほぼ肩から直角に折れ曲がっている。背骨が折れているせいか、上半身はゆらゆらと安定していない。
にも関わらず、生きている。
生きて、アーチェに迫っている。
「おれは不死身だ」
ジョーカーがいった。
「こんな損傷、なんの意味もない」

「いやっ！」
アーチェは思わず悲鳴を上げた。ジョーカーが自ら曲がった右腕を引きちぎってアーチェに放り投げたのである。
「見ろ」
「こ、これ……」
アーチェは足下に転がったジョーカーの腕をおそるおそる見て、それから息をのんだ。
「機械！」
「魔科学の結晶だ」
「あんた、人間じゃないの⁉」
「人間だ。頭脳だけは人間のものが残っている。おれの定義だと、思考をつかさどるものがなにかという部分が人間と機械の境界をわけるラインだ」
「魔科学の研究は禁じられているはずでしょ⁉」
「そうだ。研究者の意志とは……研究者の人生とは無関係に禁じられたのだ！　それまでのすべてを費やしてきたものが否定されて、悪魔の技術と迫害された！　見ろ、これが魔科学の真価だ。魔科学は無敵の肉体を誰にでも与える！」
「まさか、自分で自分を改造した……？」

「魔科学はおれだ！　おれが魔科学なのだ！」
吠えてジョーカーは跳ねた。
魔科学が生む瞬発力！
胴を両断されようが梁に潰されようが堪えない不死身の肉体！
さらに、ジョーカーの残った右腕がふたつに折れ、そこから無数の弾丸が射出される！
アーチェは必死で身をひねり、飛来する弾丸から逃れようと試みた。直撃は避けたものの、数発が右足の肉を引きちぎってもっていく。
「おれは証明する！　魔科学の真価を身を持って証明する！　いまこそ肯定せよ、アーチェ＝クライン！　魔科学を肯定せよ、魔女ッ！」
「ばっかじゃないの！」
アーチェは叫び返した。
「あんたなんかに絶対に負けるもんか！」
ともすれば遠くなっていく意識をなんとか引き留めながら、アーチェは床を這って地下室への階段を転げ落ちた。激痛に耐えながら、吃然と見上げて、叫ぶ。
「絶対に負けない！」
「肯定せよ！」

呪文のように繰り返しながら、ジョーカーが階段を下りて迫る。壊れた人形のように折れ曲がった身体とぼろぼろの包帯を引きずりながら、さながら幽鬼のごとく……。
その接近を見ながらも、アーチェはまだ絶望していなかった。
ジョーカーをにらみつけてじりじりとあとずさりながら、逆転の鍵を見いだそうとし続けている。
不死身の魔科学改造人間といえど、脳髄がある頭部を破壊すれば動きを止めるはずだ。魔術が封じられているいま、なんとかして物理的な方法で、それを成し遂げなければならない。
――なにか役に立ちそうなものは……！
アーチェは周囲を目で探ったが、探る前から役に立つものが皆無なことはわかっている。この地下室は、飲めそうなワインが残っていないかとかつて何度も探索済みで、そして割れた瓶や棚の残骸以外はなにもないことを知っているからだ。
アーチェの視線が、奥の壁をはしる。
実のところこの壁には、時空転移したアーレスが作り上げた抜け道があるのだが……
アーチェの視線はむなしくそこを通り過ぎ、奥にあるぼろぼろの樽へと注がれてしまう。
これが最後の切り札であることも気づかず、アーチェは逆転の切り札を見逃してしまった

……。

「肯定せよ」

ついにジョーカーが地下室へと足を踏み入れた。アーチェは壁際まで追いつめられて、すでにゆくところは残されていない。

「ああ、もう、ファルケンたちはなにやってんのよ！」

アーチェは奥の壁にはりついて、そろそろと右へ右へ動いてゆく。ああ、すぐ後ろには抜け道があるというのに……アーチェは気づかない。抜け道などあるはずがないという思いこみが——実際、なかったのだ——詳細な観察をはなから阻んでしまう。投げつけて時間稼ぎでもしようというのか、ぼろぼろの木の樽へと近づいていってしまう。

「肯定せよ」

「うるさい！」

アーチェはふんぬ、と力を入れて、樽を頭上に持ち上げた。

「投げるわよ！」

「ふふふ、見苦しいぞ」

「こんなかには爆薬がいっぱい詰まってるんだからね！」

「ほう、それは面白い」

「うそじゃないわよ！」
「だったら投げてみせろ」
　ジョーカーはアーチェの脅しなど、まったく意に介さない。それはそうであろう。こんな地下室に都合良く爆薬などあろうはずがない。それに、もしそんなものがあったとしたら、アーレスやすずがもっと早く切り札として使っているはずだ。時空転移などという不確実な手を使ったのは、アーチェたちに出すべき札がなにも残されていなかったということに他ならない。
　明らかな苦し紛れである。
「仲間が戻ってくるまで時間稼ぎのつもりか？」
「……」
「時空転移の予兆があった一瞬でおまえなど消し炭に変えることができる。いずれにせよ、おまえは死ぬのだ」
「……」
「もしかしたら、やつらはおまえが死ぬ前の時間に――過去に時空転移してくるのかもしれないな。たとえばあの二階の書斎でおれが下敷きになって動けなくなっている瞬間に……。だとしたら話は別だが……なあ、アーチェ＝クライン。その場合、ここで死ぬおまえ

はどうなるんだ？　ここで死ぬおまえはにせものになるのか？　それともおまえの死はなかったことになるのか？　あるいは、書庫から運命が二股にわかれてふたつの物語が……並立した世界が生まれるのか？」
「さあ、どうかしら。それもご自慢の魔科学で解明してみたらどう？」
「するさ。そのためにキングなどという者と組んでいるのだ。キングの天術を取り入れれば、おれは時空転移の秘密をも解き明かし、定義できる！」
「天術？」
「おしゃべりはここまでだ」
ジョーカーがじりっと迫るのを見て、アーチェが警告を放つ。
「な、投げちゃうよ!?　脅しじゃないからね！」
「投げろ」
「爆発したらあんただって死んじゃうんだからね！」
「爆発すればな」
実際、アーチェが樽をえいやと投げた。ジョーカーは、頭部への直撃を一応警戒して、軽く右手で樽を打ち払った。続けての攻撃はすでに決まっている。腹部に仕込まれた小型魔導砲を使って、一気にアーチェを黒こげに――。

「お……おおおーっ⁉」
ジョーカーが叫んだ。
まったくの予想外！　払い落とした樽から紅蓮の炎が噴き上がり、次の瞬間、爆音と爆風が地下室を揺るがしたのである。

二

瞬間、アーチェの背後の壁がスライドして、そこから伸びた手が彼女の襟首をつかんで引っ張っている。アーチェはわけがわからないまま、トンネルへと引き込まれた。
「閉めろッ！」
どーん、という音がして、すぐさま世界がびりびりと震える。間一髪、爆風と爆炎が隠し扉でシャットアウトされたのだ。
「あれっ、あれれっ」
アーチェはしりもちをついた格好のまま、慌ててあたりを見回した。
「な、なんで樽が爆発して……あれっ、ここどこ？　あれれれ⁉」
「よくぞご無事で、アーチェさん！」

「……あーっ、すずちゃん！」
「お待たせいたしました！」
トンネルのなかに、すずが、ファルケンが、アーレスがいる。
「戻って……きたの？」
「はい！　わたしたち、一年前の世界に転移して……アーレスさんが抜け道を作ってくれたんです！」
へへ、とアーレスが笑った。ファルケンの法術によって、すでにジャック戦の傷は癒えている。
「それと爆薬入りの樽もな。外の兵隊に使うつもりだったんだが、まさかこんなかで使うとはな」
「あ、あんたねーっ！」
アーチェがアーレスにつかみかかった。
「見慣れない樽があるとは思ったけど……あたしまで巻き込まれたらどうするつもりだったのよーっ！」
「だからこうやってタイミング良く戻ってきただろ。ごちゃごちゃ文句抜かすんじゃねえよ、バカ」

いったのはファルケンである。
「トールに侵入して時空転移するのは容易じゃなかったんだぞ。過去すずちゃんの助けがなかったら成功したかどうかも……うわっ！」
アーチェに殴りかかられて、ファルケンは叫んだ。
「な、なにしやがる、バカ！」
「あんた、よかったとか無事とか、なんのひとこともないわけ⁉　あたし、すっごく怖かったんだから！」
「うるせえ、自分のことばっかいってんじゃねえ！　おれたちだって向こうで死ぬ思いしてんだ！」
「あたしだって死ぬ思いしたもん！」
「あたしだって？　あんたはいつもそうだ！　自分、自分、自分！　他人のことなんかなにも考えちゃいない！　おやじのことだってそうだ！　あんたがいなくなって、おやじがどんな気持ちか考えたか⁉　看病が面倒くさくなったのか、また他に男見つけようとしてるのかしらねえが、もうちょっと待てないのかよ？　何百年も生きるんだぞ、おれたちは！　あと五年か一〇年……一年かもしれない！　おやじはもうどうでもいいのか、このバカ野郎！」

「……」
うつむいて黙り込んだアーチェを見かねて、すずが救い船を出した。
「ファルケンさん。アーチェさんはひどい傷なんです。いまそんなことをいわなくても」
ややあってファルケンがいった。
「……そうだな。とりあえずこのトンネルを使って、天術とかいう術の効果範囲外に出よう。法術が使えないいんじゃ治療のしようがない」
「おれが背負おう」
アーレスがいって、アーチェを背に抱えた。アーチェは無言のままである。
そして、行きましょう、とすずがいいかけた刹那であった。
轟音とともに隠し扉が砕け散り、炎の塊がトンネルへとうなりをあげて飛来した！
「肯定せよッ！」
「ああっ、ジョーカー!?」
まさかあの大爆発を生き抜いたとは——全員の予想を裏切って、ジョーカーはつむじ風のように宙を舞って、一気にがばとすずに抱きついた。
「すずちゃん！」
「逃げて！　自爆するつもりです！」

すずは一瞬のうちにジョーカーの意図を読みとっていた。こうして敵と密着、自爆するという必殺の策は、忍者の世界では当然のように行われるものである。
「ここここ肯定せせせせヨヨヨヨ」
「こ、この化け物！」
ファルケンがジョーカーを引き離そうと近づいたが、
「いいから逃げてください！　カウントダウンの音が聞こえます！　わたしは大丈夫だから、早く！」
とすずは制した。
すずの目を見てファルケンはああ、と応えた。
「アーレスの旦那、走れ！」
「おい、見捨てて逃げるっていうのか――」
「違う、走れ！」
駆けながらファルケンは、頼む、と祈った。さきほどのすずの目にあったひかりが、自己犠牲への覚悟でも、絶望でもなかったという自分の判断が正しかったことを。

三

「ここここ、肯、こうてて……」
音声回路の耐久性を向上させなくてはならんな、とジョーカーは冷静に考えた。
地下室という密閉空間でのあの爆発は、さすがのジョーカーの肉体をも大ダメージを与えていた。しかし、脳を保護している頭部にはなんのダメージもない。爆発の瞬間、四肢を犠牲にして頭部だけは死守していたからだ。
魔科学改造人間、ジョーカー。
彼にとって重要な意味を持つ肉体部位は頭部ユニット、そこにある脳だけだ。脳さえ生きていれば身体など何度でも再生できる。逆に、破損のデータから、より強靱で、能力の向上した身体を作ることができるのを考えると、肉体の損傷は大歓迎ともいえるだろう。
だからこそ、自爆という異常な作戦も躊躇なくとれる。
自爆などという発想は、普通の神経の人間には生まれえない。突然の奇襲に、あらゆる敵は正常な思考力を奪われてパニックのうちに爆死の運命をたどるのだ。
自爆装置を制御するためにぎりぎりまで待たなければならないものの、頭部ユニットは爆発寸前に離脱して無事なように設計されている。あと六秒後、藤林すずは爆死し、そして自分はさらなる強靱な魔科学ボディを手に入れる……・。

ほくそえむジョーカーの脳が、自分がかき抱いているものが藤林すずの肉体ではなく、ただの石の柱であることに気づいたのは爆発三秒前のことであった。

「ばば、ばかなッ！」

思わず悲鳴を上げて死の抱擁を解いたのがジョーカーの最後となった。

目の前にあるのは石の柱ではなく、やはり藤林すず、そのひとであった！

「め、めくらましか⁉」

悲鳴をあげたときには、すでにすずはジョーカーの上空に高く舞っている。

忍びの世界では常套手段とされている密着自爆。ならばこそ、その対応策もまた、すずにはなじみの深いものであった。ジョーカーが必滅と信じる前代未聞の最終手段、しかしそのような地平は、とうの昔にすずが通り過ぎたものに過ぎなかったのである！

——役者が違う！

ジョーカーはぼろぼろになった腕部で、必死に頭を防御した。しかし——

「——忍法飯綱(いづな)落とし！」

小柄な身体のすずには、体重を乗せられないぶん攻撃が軽いという弱点がつきまとう。

しかし、小柄であるからこその身軽さを活かし、跳躍からの高速回転落下で威力を倍増させる——これぞ伊賀栗流忍法飯綱落とし！

「ああーっ⁉」

忍刀血桜は、防御したジョーカーの腕を豆腐のように切りとばして、一気に頭部に達していた。

血煙と脳しょうをぶち蒔いて、ワイルドカーズ三人目の刺客はついに活動を停止したのであった。

# 第十三章 天術破れたり！

一

脳の死亡によってコントロールを失ったか、ジョーカーの胴体は爆発しないままであった。
すずは、避難していたファルケンたちと合流し、トンネルから自然洞窟へ、そして出口へと向かった。過去の時代で体験していたとおり、一行は屋敷から二キロほど離れた場所、森に沿ってアーリィへと走る街道にでた。
暁闇である。
夜と朝の境、雪もなくひっそりと静寂が張りつめた街道に、すずたちは立った。
「とりあえず包囲は脱したってわけだ」
アーレスがいう。
「ファルケン。さっそくお袋さんに法術をかけてやれ。傷自体もひでえが、出血がもっとひでえ。このままじゃやばいぜ」
「わかった。道に寝かせておろしてくれ」
ファルケンは作ったような無愛想でそういった。しかし、ふたことみこと呪文を唱えて

から、うむむ、と苦しそうにうめいた。
「どうしましたか、ファルケンさん？」
「だめだ」
「だめって――」
「マナが封じられている」
「そんな！　まだキングの術の範囲から抜け出していないということですか⁉」
「いや……二キロ範囲にも渡って効果を発揮するなんて考えられない。考えられるのはひとつ」
　ファルケンは声を落としていった。
「キングがこの近くにいるってことだ」
「ご名答！」
　手をたたく音が聞こえ、一同が振り向くとそこにはキングが立っている。
「どうしてこの場所が……？」
「ジョーカーが最後に仕事をしてくれた。藤林すず。おまえについたジョーカーの血……魔科学印の得体の知れない液体だが……それが放つ魔力を探知した。それから一足飛びでここに転移してきたというわけだ」

「転移?」
「空間の転移だ。わが天術では天歩大法というがな」
「ということは、あなたひとりということですね?」
すずが殺気を込めて低くいったが、キングは意に介さず呵々大笑した。
「ひとりで十分。わが封魔大法の大結界のなかでは、アーチェ＝クラインとそちらの坊やは役に立たない。残るは剣士二人――たやすい。このように」
キングはひらりと手を翻した。途端、凄まじい衝撃を感じてすずとアーレスは宙を舞っていた。
「天術、制空大法」
キングの手の動きにあわせて、まるで木の葉のようにすずとアーレスは空中を躍る。見えない巨人の手で弄ばれているかのように、地面にたたきつけられる。
「ははは!　魔術への耐性なき剣士など、わが天術の敵にあらず!」
「畜生!」
アーレスが必死に地面にしがみついてこらえようとするが、どうしようもない。もともと物理法則に則した攻撃ではない。筋力では押さえられないのだ。人間には魔法に対する対抗力というものがあり、それは人によって異なる。ゆえに、同じ攻撃魔法を受けてもダ

メージが異なるというような現象が発生するのであるが、すずやアーレスのように、日頃魔法に接することの少ない剣士の対抗力はきわめて低く、受けるダメージも大きい。

　あっというまにすずとアーレスはなすすべなく痛めつけられ、地に伏せることとなってしまった。

「すずちゃん！　アーレスの旦那！」

　ファルケンが叫んだが、ふたりはぴくりとも動かない。

「さあ、とどめをさしてやるか」

「やめろ！」

「ならば〈時間の剣〉を渡せ」

　キングはファルケンにいった。

「おまえの母親が大事そうに抱えているあの剣を渡せ。そうすれば考えてやってもよい」

「どうしておまえほどの使い手が〈時間の剣〉にこだわる⁉」

「雇い主のリヒャルト公が、歴史を改編してミッドガルズを支配するのを助けるため」

「リヒャルトめ！」

「忍者に罪をかぶせて〈時間の剣〉を奪うという作戦が失敗し、リヒャルト公はひどくご機嫌斜めだ。懐刀としての私の立場もあやうい――というのが表向きの理由だ。真意は別

にある。わたしは時空転移のシステムを解析したいのだ」
「くそっ！　きさまもダオスと同じか？　時空転移を悪用して歴史を変えるつもりか！」
「冗談ではない！　そのような下世話な者と一緒にしてもらっては困る」
キングは心外きわまりないといった顔で、不機嫌にいった。
「私は純粋に学術的な好奇心で時空転移のシステムを欲しているにすぎない。わが天術は、おまえたちがわけもわからず使っている魔術や法術とは違う。手順さえ踏めば必ず発動するようなお手軽な手品ではないのだよ！　天術は、術のシステムを……それがいかなる理屈に立脚し、いかなる過程を経て成し遂げられるのかを完璧に理解したうえで、初めてものになる。封魔大法がおまえたちの時空転移を封じられなかったのも、まだ時空転移が私の理解の外にあるからに他ならない。そして＜時間の剣＞を研究し、時空転移を理解すれば、天術は真なる完成をみる！」
「悪用する気はないっていうのかよ！」
「私の使いたいように使う。結果として悪用ということになるかもしれんが、そんなことは私の知ったことではない」
ファルケンはキングをはっしとにらみつけた。
エルフ特有の魔法の抵抗力を活かして、一気に肉弾戦に持ち込むつもりでいる。すべて

のマナを封じ、そのうえで自分の術だけは存分に使いこなす――この魔人の技にどこまで耐えられるかは心許ないが、すずとアーレスが動けないいま、自分が動くしかない……過去の世界ですずがそうしたように、アーレスがそうしたように、自分が運命を切り開かねばならないのだ。

しかしファルケンは、キングの視線が自分を飛び越えて背後に向けられているのに気づき、弾かれたように振り返った。

「おふくろ！」

真っ青な顔をして、アーチェがすぐ後ろに立っている。

「な、なにやってる!?」

「ファルケン……」

アーチェはうつろな目でファルケンを見つめ、呟くようにいった。

「――最期になるかもしれないから、いっとくよ」

二

「最期って……」

いつにないアーチェの真剣な口調に、思わずファルケンは息を飲んだ。
「最期って、どういう意味だよ、おふくろ！」
「聞いて」
アーチェはとぎれとぎれに、ひとことひとことを選んで言葉を紡いでいった。
「あたしたちエルフの血を引く人間はね、普通の人間より長く……長く生きていかなくちゃいけない。長生きするのはいいことだよ。でも、いいことばっかりじゃない」
「……」
「クラースがいなくなったとき、わかったの。いいことばっかりじゃないって。いっぱい友達が死んだよ。みんな、あたしたちを置いて先にいなくなっちゃう。いままでは我慢してきたよ。でも、もしあのひとがいなくなっちゃうとしたら……チェスターが死んじゃうとしたら、あたし、きっと我慢できない」
そこまでいってアーチェはがっくりと膝をついたが、助け起こそうとするファルケンを優しく制して、∧時間の剣∨を杖になんとか立ち上がった。
「……見てらんなかったの。チェスターがどんどん死に近づいていくのが……耐えられなかった。だから嫌いになろうと思ったの。違う若い男のことが好きになれば……そうやって次々と好きな人を変えていければ、ずっと辛い思いなんかしなくてもいいって。だから

「……」
「もういい」
ファルケンはいった。
「もういいよ、おふくろ！」
「……ごめんね、ファルケン」
アーチェはゆっくりと笑顔を作った——それは、ファルケンが生まれてこのかた見た笑顔のなかで、いちばん母親らしい、優しい笑顔だった。
「で、∧時間の剣∨を渡す気になったかね？」
キングがいった。
「せっかくの和解を無駄にはしたくないだろう？　さあ、剣を渡せ。力づくで奪ってもよいが——」
「……勝負しようよ」
アーチェがいった。
「勝負？」
「そう、勝負。いま、なんとか大砲とかいうのがかかってて、このあたりじゃ魔法は使えないことになってるんでしょ？」

「封魔大法だ」

キングが不愉快そうに補足した。

「その封魔大法のなかで、あたしが魔法を発動させてみせようってのよ」

「なに？」

「もしあたしが……こんなズタボロのけが人がご自慢の結界のなかで魔法を発動したとしたら、そりゃあたしの勝ちってやつだよね？」

「——ふん、読めたぞ。時空転移の術で逃げるつもりか？」

「ノンノン」

アーチェは指を振って、＜時間の剣＞をファルケンに手渡した。ファルケンは呆然とそれを受け取って、なんのつもりかと慌ててアーチェを見る。

「……これで文句ないでしょ？」

「面白い！」

キングは笑った。

「三流魔術師がわが天術を破るとはよくぞ吹いた！　最強だ英雄だと周囲からおだてられて思い上がったか、木っ端！　いいだろう、唱えてみろ！　もし炎ひとつでも灯してみせたらおまえの勝ちだ！」

「賞品は？」
「おまえら全員逃がしてやろう！」
むろん、そんなつもりはキングには毛頭ない。後々問題となりそうな者はすべて抹殺する。そうすることによってキングは、永遠の寿命を最大限に活用してきた。すずやアーチェを逃がすなど、少しも考えていない。
しかし、アーチェのいう魔法勝負とやらを受けないわけにはいかなかった。
最強を自負するキングにとって、わが子のような天術への侮辱はもっとも許し難いことであった。さらに、アーチェが世間に最強、天才といわれ続けていることも内心快く思っていない。自分の天術を一般人に評価して欲しいというような欲求は皆無であるし、正面切って戦えばアーチェなど敵ではないとわかってはいても、なにか釈然としない気持ちがストレスとして蓄積している。
――ここでわからせてやろう！
キングは、アーチェが精神集中を終え、呪文を唱えはじめるのを腕組みして待った。世界中の魔法という魔法を究めたキングは、呪文の最初のひとことを聞いただけでそれがなんの術なのか、しることができる。もしアーチェの術になにかの危険があるとすれば――あるはずはないのだが――それに対抗する術を瞬時に発動するつもりでいる。さて、なに

を撃ってくるか——奇妙に期待めいたものがあったが、キングの期待は見事に裏切られた。

——この指輪は御身の目
　この指輪は御身の耳
　この指輪は御身の口
　わが名はアーチェ
　　指輪の契約に基づきこの儀式をつかさどりし者
　　われ伏して御身に乞い願う
　　われ盟約を受け入れん

それは召喚術であった。
魔術師であるアーチェが召喚術を使おうとしていること自体には驚いたが、時空転移を可能とする才能があれば、ありえないはなしではあるまい。なによりも、召喚術ならば封魔大法の結界のなかでも使えると思っているアーチェの浅知恵に落胆した。魔術が駄目、法術も駄目、ならば……そんな単純な消去法から生まれた勘違いだ。

「おふくろ……だめだ、それじゃ……」
アーチェの背後で見守るファルケンも、母の過ちに気づいていた。
召喚術とは、異次元に生きる人間ならざるもの——精霊とよばれる存在をこの世界に呼び出し、使役する魔法で、いうまでもなく、クラース＝Ｆ＝レスターが得意とした奇跡の体系である。たしかに精霊自体はマナによって成り立っているものではないから、封魔大法の影響下にあっても活動することは可能であろう。そこまではいい。しかし、異次元とこの世界の扉を開く際に、マナの消費が必要となるのである。
大地と神の力を用いる法術も、力の伝播に極微のマナを消費している。だからこそ、マナの動きを封じているキングの結界のなかでは効果を発揮できないでいる。それと同じ理由で、召喚術もまた、使用できない……。
才能に頼って正式な魔術研究を怠ってきたアーチェには、悲しいかなそれが理解できていない。なんとなく感覚で渡ってきてしまったそれまでの経験が、マナの消費という考えを思考の外にしてしまっている。

「息子は気づいたようだな」
青ざめたファルケンを見て、キングは笑った。

「仮にも英雄と呼ばれた女だ。おまえの母親は私の吸生大法の贄としてやろう。きっと大いなる活力を私にくれるであろうよ！　どうだ、おまえもエネルギーとなって母と一緒に私のなかで生きるか？　それとも――」
しかしキングの言葉にある嘲笑の色は、アーチェの呪文が終盤にさしかかるにあわせて、徐々に別のなにかに塗り替えられていった。

――きたれ、あまたの精霊を統べるもの
　果てなき知識の果てを探るもの
　　人の殻を越えて高みへ羽ばたくもの
　　　限りなき時空を旅するもの
　　　　流されし罪なき血を嘆くもの

「し、知らぬ！　このような召喚術は知らぬぞ！」
キングは動揺を隠しきれずに叫んだ。
「なんだ貴様、この術は――！」
「――契約は完了せり。我が手に御身と、力と、栄えありッ！」

アーチェの周囲に集ったマナが、弾け、輝いた。
マナが動いた！
封魔大法を打ち破り、召喚術が発動したのである！
「そんなはずはない！」
キングは絶叫した。
アーチェはそれを確認してから大きく息を吸い込み、全身全霊を込めて精霊の名を叫んだ。
「きたれ精霊王……クラース！」

三

すずは薄れゆく意識のなかで、それの出現を見つめていた。
マナが渦を巻いて天に駆け上り、そこに異世界への扉を形成する。そして空中に開いたこの世ならざる闇の空間から、黄金のひかりをまとって現れたそれは——その精霊の姿は、まさしくあの懐かしい召喚師、クラースのものにほかならなかった！
クラース＝F＝レスター。

人類史上最高の召喚師として、そして魔法全般に関する至高の研究者として歴史に名を残す大天才。そして、クレスたちと共に魔王ダオスを倒した英雄のひとり――その名を知らぬ者など世界にただひとりもいないであろうあのクラース＝F＝レスターが、死後、高位精霊に姿を変えていようとは誰が想像しえたであろうか！

どことなく透明な感じはするものの、具現化したクラースは頭からつま先まで、人間そのものである。ごきごきと首を回し、肩のこりをほぐしたりしている様子までも、生前となんら変わるところがない。

すずの目に、思わず涙が浮かんだ。なにが悲しいのか、あるいはうれしいのかはよくわからない。ただ巨大な感動だけが、すずの胸をたまらなく満たしていた。すずは暖かいものに包まれて、気を失った。

ファルケンも、ただ呆然と目の前の奇跡を見つめている。アーチェだけがにやりと笑って偉大なる精霊の王にウインクを送った。

「レスターズ・エヴォケイション三四三ページ。精霊王の召喚と使役に関する覚え書き――」

「即席でよくあれを理解したな。さすがは自称天才魔術師」

「ば、ばかな……精霊王だと！　そんな召喚術が世界にあるとは！」
呆然と立ちつくすキングを完全に無視して、クラースはアーチェにいった。
「しかしおまえ、手順をはしょりすぎだぞ？」
「うっさいわね……あんたの書き方が不親切なのが悪いんじゃん。だいたい他人に理解できないマニュアルなんて、マニュアルとしての存在意義が問われるってもんよ……」
「あ〜あ、たまらんな。契約の指輪も適当な安物だし、呪文も適当だし、本来ならわざわざ来てやるいわれはないんだが、まあいいさ。友人のよしみだ。それに――」
そこまでいってからようやくクラースはキングに視線を向けといった。
「弟子の尻拭いは師匠がしないとな」
「弟子？」
不振げな一同に、クラースはいった。
「この男は、私のクラース魔法修練場を一時期手伝っていた男だよ。基本から応用まで、召喚術のいろはは私が教えた。だが、人間としての教育ができていなかったようだな」
「弟子だと!?」
キングはあざ笑った。

「おまえ程度の三流召喚師にいつまでも師匠面されるいわれはない。私はあらゆる魔法体系を統合した究極の術、天術を編み出し、習得した！　あらゆる魔法を封じることも可能だし、死の運命すら乗り越えて無限に生きることが可能だ！　おまえなど私の足下にも及ばん！」
「まったく。あらゆるあらゆると、オウムみたいにうるさいねえ」
クラースはふっと笑った。
「時空転移も、精霊王クラースの召喚も封じられないじゃないか。それに天術といったかな、おまえが編み出したとかいう手品は。それについてもいわせてもらえれば、私がとっくに発見していたんだがなあ」
目をむくキングを前に、クラースはえへん、と咳払いをして胸を張った。
「レスターズ・エヴォケイションの二三三ページ。禁呪扱いだが、ま、だいたいのところは書いておいた」
「う、嘘だ！」
キングはクラースを指さして叫んだ。
「天術を習得していたのなら、なぜ貴様は死んだ！　そんな惨めな姿となったのはすなわち、天術を完成していなかったからに他ならない！　吸生大法の真髄をつかめなかったか

らに他ならない！」
しかし、クラースは静かにいった。
「人は死ぬ。死に向かって一方通行の道を歩む。だからこそ、一瞬一瞬を精一杯あがいて生きるんだ。やり直しはきかない。失敗は失敗として、消し去ることのできない傷として刻み込まれる。でも、そこに人が生きるということの意味がある。あがいてなにかをつかむこと。その過程が人の魂を崇高に輝かせる。私は若い頃の時間の旅でそれを知ったよ。だから、たとえその方法があるとしても永遠に生きたいなどとは夢にも思わなかった。もちろん、不満も残ってるさ。でも、それが人生だ。それに、人間には死に時というものがあるんだよ。それを見誤ると、おまえのようになる」
「しったようなことを！　ちょうどいい！　おまえの召喚方法もシステム化して、時空転移の秘法とともにわが天術に組み込んでくれる！」
「弱い犬ほどよくほえる」
クラースはぱちり、と小さく指を鳴らした。
「できる人間は、こういうふうにスマートにやるものだ。クリスティアン……いまはキングといったか？　貴様の封魔大法はたったいま解除した」
「な、なにを――」

「キュア！」
ファルケンが驚くべき速さで、回復の法術を発動させている。
「ほ、ほんとうだ！　おい、大丈夫か、おふくろ⁉」
「へへへ、おかげさまで」
水を得たひまわりのようにしゃっきりと立ち上がったアーチェを見て、ついにキングが絶叫した。
「殺してくれる！　もう〈時間の剣〉などいらぬ。この一帯焼き尽くしてこの侮蔑、返してくれる！」
「来るぞ、アーチェ！」
クラースが叫んだ。
「がってん！」
叫んでアーチェは、キングの周囲のマナの動きを瞬時に見極めた。
――火系最高の攻撃魔術、エクスプロード！
しかしキングは速い。あっというまに呪文を完成させ、すでに魔術の発動体制に入っている。
「燃え尽きろッ！　エクスプロード！」

「ファイアストーム！」
慌ててアーチェはワンランク下の火系の魔術をぶつける。呪文の詠唱時間の短さからいって、これが限界だ。同系統の術をぶつけることで、威力を相殺するしかない。
アーチェから放たれた炎の波動が、キングの放った超爆発の塊を押さえ込む。
魔術の効果は、使い手の精神集中に大きく左右される。自慢の天術をたやすく破られて動揺するキングは、意気あがるアーチェに対して圧倒的に不利だ。しかし、キングには長年をかけて蓄積した経験がある。しかもエクスプロードが持つパワーは、ファイアストームのそれをはるかに上回っている。
エネルギーの拮抗が破れようとしていた。
ドームのように広がりつつあるエクスプロードの破壊エネルギーが、ファイアストームの奔流を押し返していく。アーチェの顔に狼狽が、キングの顔に会心の笑みが浮かぶ。
「クラースさん、おふくろを助けてやってくれ！」
ファルケンは隣に立つクラースに向かって叫んだ。
「精霊の世界には精霊の掟があってな。残念だが、私は人間を攻撃できないことになっている」
「精霊王じゃないのかよ！」

「精霊王もまた、精霊界というシステムの一部に過ぎない。それよりも――」
クラースはファルケンを厳しく見て、いった。
「きみがいるじゃないか」
「おれが⁉」
「そうだ。きみがいる。きみは魔術を使えるのだろう？」
「簡単にいってくれるな！　おれの魔術は聞きかじりだ！　こんな凄い魔術合戦に通用するものじゃない！　それに、火系の術は苦手なんだ。使えない！　子供の頃、おふくろに教えてもらっている最中に暴発して、それでおやじが大火傷をおっちまって、それで、それで――」
「やるんだ」
クラースはぴしゃりといった。
「クレス＝アルベインも最初はそういった。できない、と。冥空斬翔剣なんか使えるはずがないと。だが、クレスはやった。大切な者たちが窮地に立ったとき、それを成し遂げた。それが男というものだ」
「……」
「エクスプロードが発動すれば、後ろにいるすずたちは死ぬ。アーチェも死ぬ。きみも死

ぬ。それもまた運命だと思うのなら、それでもいい。しかし、私は生きているあいだ、一度もそうはしなかったつもりだ。だからこそ、永遠の命などというものにしがみつこうという気もおこらなかった。そういうことだ」
ファルケンが一歩、踏み出した。ファルケンはしばらくその足をじっと見つめて動かなかったが、やがて重々しく二歩目を、そして三歩目を踏み出した。〈時間の剣〉を足下に投げて、彼は走る！
「おふくろ！」
駆けながらファルケンは叫ぶ。
「待っていてくれ！　もう少しだけ、待ってくれ！」

——天光満つるところにわれはあり
　黄泉の門開くところに汝あり！

「そうだ！」
クラースがいった。
「恐れていても構わない！　ただ、逃げるな！　立ち向かえ！　その意志が奇跡を呼

ぶ！」

——生を司るもの
　死を司るもの
　　形なきもの
　　　形あるもの
　　　　天光満つるところより黄泉の門開くところへ
　　　　　生じて滅ぼさん

「イラプション！」
ファルケンの声に呼応して、天空から無数の炎が降り注いだ。そして上方から押さえつけるように、エクスプロードが生む灼熱のドームをつぶしていく。勢いを得て、横からのファイアストームがうなりをあげる……。
「おおおおおおおおおッ！」
キングはひとこえ吠えて、あらゆる方向に拡散してゆく精神をなんとか集中させようと試みた。

――百数十年に渡って体得したわが天術が、すでに既知の技術だったとは！
しかもそれを発見していたのがクラースだったところに、最大のショックがある。唯一ライバルと呼ぶにふさわしい人物として一目置いていながらも、すでに自分が上回ったと信じていた相手だった。師事はしたものの、才能は自分が上と内心舌を出していた相手だった。時空転移の術を追い求めたのも、クラースがそれを理解していたという一点において、ひけめがあったからだった。なのに……

――精霊王だと？　やつめ、そんな召喚術までやつは編み出していたのか⁉
同様に世界にはもっと多くの秘術が眠っているのだとしたら……究めたと思ったものがほんの一部に過ぎないのだとしたら……だめだ、集中しろ！　目の前の戦いに集中しろ！
キングはもう一声吠えたが、そこにはすでになんの迫力も、説得力もありはしなかった。
どしゅっ、という音とともに、激しい魔法合戦が終焉を迎えた。
先刻まであれほど吹き荒れていた炎はどこにも存在せず、満ちていた熱気すらうそのように消えてしまっている。
「相殺成功！」
アーチェがいえい、と飛び跳ねていった。
「やるじゃゃん、ファルケン！　さすがはあたしのかわいこちゃんだわ！」

「ふん、おれの才能だよ！　それより気を抜くな。キングの野郎、まだやるつもりだぞ！」
ファルケンのいうとおり、キングはまだ諦めてはいなかった。
なにやらもごもごと言葉をつぶやくと、地面に向かってすう、と右手を伸ばした。するとどうであろう、その右手が肘まで水に沈んだように地面へと消えたではないか！
「まずい！」
クラースが叫んだ。
「∧時間の剣∨を守れ！」
「——しまった！」
ファルケンは背後を振り返ったがすでに遅い。
∧時間の剣∨が置いてあった地面から、キングの右腕がにゅっと突きだし、剣を鷲掴みにしている。駆け寄る間もなく∧時間の剣∨は地面に潜り、一瞬後、キングの本体の元に浮上していた。
「空間大法だ。あらゆる距離の概念を無意味にする天術よ」
キングは∧時間の剣∨をいとおしそうに撫でながらいった。
「はったりのつもりか？　時空転移の術は使えないんだろ。怖くもなんともないぜ！」

ファルケンはいったが、内心、不安がある。いったいこの男、なにをするつもりなのか……？

キングは〈時間の剣〉を鞘から引き抜き、魅入られたようにその輝きを見つめた。

「呪文などいらぬ。〈時間の剣〉さえあれば、私は理解できる。剣に刻まれた記憶を喰らい、味わい、消化することで……わが血肉に変えることができるのだ！」

キングは哄笑した。そしてがっ、と上を向いたかと思うと、おもむろに剣を口のなかに突き刺した。

「ああっ！」

クラースまでもが叫んだ。

〈時間の剣〉が飲み込まれていく！

蛇が鼠を丸飲みするように、キングは〈時間の剣〉を飲み込んでいく。喰らい、消化するとは文字通りこのことであったか！　血肉に変えるとはまさにこのことであったか！

キングはこうしてすべての成り立ちを理解してきたのだ。それと一体化することによって、それを体感して、理解してきたのだ。

「見たか、天術奥義吸魔大法！」

キングは得意満面でいった。ああ、これでキングは時空転移をわがものとしたのであろ

うか？　第二のダオスとして、世界を混乱に陥れていくのであろうか？
アーチェとファルケンは恐怖に顔を曇らせた。しかしクラースは静かに
「愚か者め」
といっただけである。
その呟きを聞き逃さなかったキングは、狂気すら顔に浮かべて絶叫を放った。
「くやしいか、クラース！　私がおまえに追いついたことが！　究極という言葉の意味そのものとなったことが！　ふは、ふははははは！」
しかしその笑顔はすぐに冷たく凍り付いた。
「が、がぼあっ！」
せき込むと、両目から、涙が筋を引いて流れた。
いや、涙ではない。それは血だ、血の涙が瞳からこぼれ落ちているのだ！
続いて鼻から、口から、耳から滝のようにドス黒い血があふれ出した。上着の袖からも、ズボンの裾からも、どぼどぼと音を立てて血が流れ出し、あっというまにキングは血の池に立つ真っ赤な墓標と化した。最後にぶるる、と震えたかと思うと、内側からその身体が鳳仙花のように弾け飛んだ。
あとにはなにも残らない。

キングの肉体も、∧時間の剣∨も。

天術も、なにもかもをただ血だまりに変えて、ワイルドカーズ最後の魔人は地上から消滅した。

あまりの凄惨さに、思わず一同は目を反らした。

「過剰なマナの吸収に、肉体が耐えられなかったんだ」

クラースが悲しそうにいった。

「バカが……最初の授業でいったはずだ。魔法に対する敬意を忘れるなと。それを忘れたとき、魔法は剣となって術者の身を滅ぼすと……。クリスティアン、おまえは最後まで出来の悪い生徒だったよ……」

# 第十四章　集う英雄たち

一

身体を休める間もなく、すずたちはミッドガルズ首都に向かうこととなった。
各地に潜伏していた伊賀栗の忍者のうち、何人かがついにリヒャルトに捕らえられたのだ。リヒャルトは、治安維持を徹底させるためと称して、忍者たちを公開処刑に処すると声明。決行日時を広く世間に知らしめた。その日は二日後、時間は昼――。
すずたちをおびき寄せるつもりである。
しかし今回は、すずたちにもついに得た切り札がある。
「――オリジンは過去の出来事を映像として再現してみせることができる」
クラースがそう知恵を授けたのである。キングが語っている場面を――リヒャルトが〈時間の剣〉を使って陰謀をめぐらせているという真相を精霊オリジンに再生させれば、伊賀栗の忍者たちにかぶせられた罪は晴れる。
かつてはそのような手段もなかったが、いまはアーチェがいる。勉強すればオリジンの召喚もできるようになるだろう、というクラースの言葉どおり、アーチェはなんとかオリジン召喚をマスターした。

これが証拠となるかは微妙なところだが、それでなくてもいま、ユークリッドとアルヴァニスタの関係は微妙である。ユークリッドのリヒャルトになんらかのほころびがあれば、アルヴァニスタのルーングロムが黙ってはいまい……。

派手好きなアーチェは、処刑当日に堂々と乗り込むべきだと主張したが、すずは当日を待たずしてミッドガルズに侵入し、ルーングロムと接触することを提案した。様々な検討を経てすずの案が可決され（反対したのはアーチェだけだった）、作戦は実行に移されることとなった。アーリィからミッドガルズへと海を渡るのは容易ではないように思われたが、クラースの助力を経て（「インチキは今回限りだからな、まったく！」）精霊ウンディーネを召喚したアーチェが、かつて海底のトールに向かったときと同様の水泡の潜水艇を作り、なんとか事なきを得た。

二

ルーングロムとすずは、打倒ダオスの冒険をめぐる旧知の仲である。協力を仰げるはずだと考えたすずは、ミッドガルズ到着後、ルーングロムに一本の矢文を送った。

リヒャルトの悪事と、伊賀栗の忍者にかけられた濡れ衣、そして〈時間の剣〉を密かに

発掘していたミッドガルズ王家の暗躍も記した手紙である。はたしてその晩、ルーングロムからの密使が返事を運んできた。翌朝——処刑当日である——早朝に、ミッドガルズの北にある白樺の森で逢いたい。そこで事実を確認してから、あらためてリヒャルトを追いつめる算段をつける——手紙にはそう記されていた。

三

夜のうちに白樺の森に潜んだ一行は、翌朝到着したルーングロムが数名の護衛しか連れてきていないことを確認してから、姿を現した。
「——すず殿、久しぶりだな。おお、アーチェ殿までいるとは！　何年ぶりかな？　チェスター殿はお元気でおられるかな？　昔は喧嘩ばかりしていたが、まさかいまになってもそんなことは——」
「ちょっと、プライベートまで踏み込んでこないでよ！」
アーチェがめんどくさそうにいうのを制し、すずは改めて事情をすべて説明した。ルーングロムは黙ってそれを聞いていたが、最後に
「やはり証拠が必要だな。オリジンの召喚を頼む」

といった。
「おふくろ」
「合点承知の助」
アーチェがレスターズ・エヴォケイションを片手に、オリジンの召喚を開始した。
そのときである。
「逆賊と密会とは穏やかではありませんな、ルーングロム殿」
すずたちはようやく、いつのまにか自分たちが百名からなる兵士たちに囲まれていることに気づいたのであった。

四

「さすがは歴史に名高い魔導砲を開発したミッドガルズ。魔科学の研究は世界一ですな」
弓兵の群のなかから、リヒャルトが得意そうにいいながら現れた。
「魔科学迷彩……光を屈折させて、姿を相手の目に見えないようにする装置ですよ。試作品をヴァルター王子から提供いただきましてな」
「試作品？」

ルーングロムが堅い口調でいった。
「新規の魔科学兵器開発は国際条約で凍結されているはずだ！」
「ヴァルター王子が個人的にご趣味としてなさっておられる、いわば道楽ですよ。そう目くじらを立てなくてもよろしいではないですか、ルーングロム殿？」
ここにきてようやく、ルーングロムは、ヴァルター王子の裏切りとリヒャルトの奸計に気づいた。
リヒャルトは、ミッドガルズの〈時間の剣〉の密かな発掘作業をネタに、ヴァルター王子に脅しをかけたのであろう。王家存続のみに腐心する王子は、これは一大事とそれまでの考えを一変させ、リヒャルトに就いた。リヒャルトはこの事件を機に、自分を追い落とすつもりである……。
ルーングロムは怒りで叫びだしそうだったが、ぐっとそれを飲み込み、冷静を装っていった。
「藤林すず殿から奇妙な話を聞きましてな。なにやら今日の処刑の原因となっている事件は茶番だとか」
「笑止な。まさかそのような素性の知れない者のいいぶんを信じるわけではないでしょうな？」

「証拠があるといっております」
「証拠？」
「ええ。精霊オリジンを使って、それを証明すると」
「くだらないですな」
「それは召喚が終わってから――」
「問答無用！」
リヒャルトは木々を震わせるような声でいった。
「こやつらは死刑囚の逃走を助け、さらには爆薬をもってこの私の暗殺まで目論んだ凶悪犯罪人！　さらには＜時間の剣＞を奪った藤林すず！　シェーンハイムを混乱の極みに叩き込んだ混血エルフ！　連合軍兵士を氷づけにした魔術犯罪者！」
リヒャルトはひとりひとりを指さしながら、叫び続けた。
「こやつらと話すことなどなにひとつありませぬぞ、ルーングロム殿！　ひとことでも呪文など唱えさせたが最後、なにをするかわかったものではありません。もしかしたら時間を稼ぎ、時空転移で逃走するつもりかもしれませぬぞ。あの魔王ダオスのように！」
ダオスの名が出て、ルーングロムの顔に影が走った。
「まずいな」

ファルケンは舌打ちした。
この時代の人間が抱くダオス憎しの念は、尋常なものではない。百五十年にも渡るダオスとの戦いで、世界中のほとんどすべての人間がかけがえのない者――家族であり、親友であり、恋人を失っている。魔王に対する憎悪は、すでに全人類の遺伝子に組み込まれているといっても過言ではないだろう。
だから、ダオスの名を耳にしただけで、人は無条件に拒絶反応を起こす。
ダオスの名は、人々から冷静な判断力を奪う魔法の言葉なのである。
兵士たちのなかには、各国の高名な騎士が多く混ざっている。ルーングロムがここで必要以上にすずたちを庇ったとなると、ルーングロムの信用は一気に下がる。そしてなによりもまずいのは、ミッドガルズの命運を握るヴァルター王子がすでにリヒャルト側についているという点である。たとえここで黒い事実が証明されても、それを白と翻されてしまう可能性すらある。賊との密会――この汚名は、ルーングロム、ひいてはアルヴァニスタの大陸制覇の夢をとざすに十分である。
「確かに」
ルーングロムは静かにいった。そしてくるりとすずたちに背を向けた。
「ルーングロムさん！」

すずが愕然といった。
「どうしてですか！」
ルーングロムは無言で答えない。ムーングロムとてつらい。しかし、これが政治というものなのだ。ここは歯を食いしばって引き、逆転のチャンスを待たなければならない。たとえその過程で無実の者が犠牲になろうとも、それが国家を導いていくということなのだ。
「ルーングロムさんよ、アンタそれでもいいのか⁉」
アーレスに続いて、アーチェも叫ぶ。
「最悪だよ、ルーングロム！　昔っから自分の国第一で、戦争にも参加しなかったりとかずるっこいとこがあったけど、性根まで腐ってるとは思わなかった！」
ルーングロムは苦しそうに押し黙り、自分の配下とともに兵士たちの群へととけ込んでいった。
「ふん。弓兵！」
リヒャルトの声に応じて、ずらりと並んだ兵士たちが一斉に弓を構えた。矢を放つ前からすでに、それぞれから放たれる殺気がすずたちに突き刺さり、痛いくらいである。
「待て！」
耐えきれず、ルーングロムが叫んだ。しかし、リヒャルトに一喝され、二の句が継げな

い。そんなルーングロムを見て、リヒャルトは笑っていった。
「つまらぬ疑いをはらすため、ご自分で撃ての命令を下してはいかがかな？」
「――どうする、すずちゃん？」
ファルケンが歯ぎしりをしていった。
「やっちゃおうよ！　リヒャルトみたいな悪人、生かしちゃおけないって！」
「悪いがみんな。リヒャルトの首はおれがもらうぜ」
アーチェとアーレスがいう。どちらも戦闘準備は完了している。
「しかたがありませんね」
すずはいった。
「合図をかけたら一気に行きます。みなさん、絶対に生きてこの森から出ましょう！」
全員が頷き、覚悟を決めたときであった。
「お待ちください」
凛とした声が響き、兵士の群のなかから、ひとりの老婆が歩み出た。後陣に位置している法術師のひとりであろう。すずたちからは距離が遠いため顔までは確認できないが、法術師独特の白いローブに身を包んだ、上品な声の女性である。

「話し合いをしたいといっている相手に向かって問答無用と矢を打ちかけるなど、とても正気とは思えません。みなさん、武器を収めて話し合いの場を――」
「黙れ！」
またもやリヒャルトが銅鑼声をとばし、法術師の言葉を力技でかき消した。それどころか憤然と法術師にかけ寄ったかと思うと、殴りつけるような勢いでその頬を張り飛ばした。
か細い身体の法術師は悲鳴を上げて崩れ落ち、慌てて他の法術師がそれを助け起こす。
「ルーングロム殿！　貴殿が揺れれば、このように配下も揺れまする！　貴殿がやらないのならば、私が命令を発しますぞ！」
「――もう限界だ。すずちゃん、合図を！」
ファルケンがいった。しかし、すずはうつむいて合図を送ろうとしない。
「すずちゃん！」
「やはりできません」
すずはいった。
「あの法術師さんのようなひとたちを巻き込むことはできません」
一同は黙り込んだ。
ここで戦いを起こせば、まず途中で剣を引くことは不可能だろう。どちらかが全滅する

まで、血で血を洗う戦いが繰り広げられる。しかし、兵士たちのほとんどは、何の悪意もない、ただミッドガルズ大陸の治安維持を願う戦士たちなのである……。
息詰まるような沈黙が続いた。
ルーングロムの口がぴくりと動き、リヒャルトが微かに笑い、すずたちは目を閉じた。
豁然、音あり！
森のなかにいる全員の視線が、頭上高く白樺の一本につき立った矢に注がれていた。
銀製の矢は昇り始めた朝日を照り返し、燦然と輝いている。
そしてそこに、馬のひずめの音が割り込んできた。
「しばらく、しばらく！」
馬上の人影が叫んでいう。
「各々、しばししお待ちを！」
馬は包囲網の外周に止まり、乗り手はそこから歩いて輪の中心に向かってくる。
老人である。
百の視線が向けられる先に、白髪の老人がいる。
歳は七十八十といったところだろう。腕や首筋は細く筋張って、顔は深い皺におおわれ

ている。しかしこの老人を明白にただのおいぼれとは違う存在に高めているもの——それは目だった。

読者諸兄よ。

われわれがこの物語のはじまりに、同じ目をした者たちを見たことを覚えておられるであろうか。斬首の運命にありながら、決して怯えず、後悔せず、常に変わることない勢いで命を燃やし続けた伊賀栗の忍者たちの目に宿っていた意志のひかり。そう、燃える魂の発現たるあのひかりこそ、いま、この老人の瞳に宿るものと同じものであった。

「そちらはチェスター殿か！」

ルーングロムがいった。

「おお、もしや——」

五

「おやじ⁉」

「チェスター！」

ファルケンとアーチェの声にうむ、と力強く頷いて、チェスター＝バークライトはルー

ングロムとリヒャルトの前に立ちはだかった。手には巨大な弓が、背には銀の矢の束が背負われている。
「さきほどの矢はおまえが撃ったものか⁉」
憤然とリヒャルトがいった。内心の動揺を、必死の空威張りで隠そうとしている。
「いかにも」
チェスターはひるまない。
「いかにも私が撃ちもうした。みれば雑兵がひどくひょろひょろとした矢をつがえている様子。見るに見かねて、弓の真髄をご披露いたしました」
「貴様も反逆者の一味か！」
「いまは違うが、ことと次第によってはこれからそうなるかもしれませんな」
「おいぼれが……いつまでも英雄気取りで……」
リヒャルトが吐き捨てたと同時に、新たな馬のいななきが遠くから聞こえてきた。
「今度はなにごとだ！」
爆発寸前のリヒャトの問いに、包囲網の一番外周の兵士が応えた。
「また老人がひとり……ああーっ！」
「どうした！」

「――どうもこうもないッ！」
「ああっ！」
その声に、ルーングロムも思わず声をあげた。
「ク、クレス老！」
「クレスさん！」
その老人がクレス＝アルベインであることを、すずはルーングロムの声があがる前に見抜いていた。歳月は確かにクレスから若さを奪い取っていたが、英雄としての輝きまでは奪えなかったとみえる。あのころの面影が――凛としながらも太陽のように暖かく、明るいオーラはいまだ健在である。
クレス＝アルベイン。
このころのクレスは、『畏れをもって〝監視者〟と呼ばれていた』と『ミッドガルズ興亡誌』にはある。
そこには、ミゲールという小村に隠居しながらも、陰から世界の安定ににらみを利かせる男の姿が記されている。各国に諜者を潜り込ませ、そこから得た情報を用いてユークリッド、アルヴァニスタ、ミッドガルズに巨大な政治力を持ち、各国の王でさえその名を聞いただけで震え上がったという。

こんなエピソードが残されている。
ユークリッドの貴族が狩りの途中、誤って、茸摘みをしていた少女を射殺してしまった。場所が本来なら一般平民が立ち入ることの許されない私有地であったし、身分の違いもある。こういう場合、事件は闇から闇へと葬り去られて貴族の罪は問われないのが常であるが、とある噂が事態を一変させた。少女の遺族が、クレスに泣きついたというのだ。事の真偽は定かではなかったが、クレスを恐れた時のユークリッド国王ゲオルグ二世は、件の貴族を転地して封じ、少女の遺族に莫大な慰霊金を与えたという――。
「こ、このような辺境まで、いかがなされた?」
リヒャルトの声がうわずるのも無理はない。
「ミッドガルズがひどく騒がしいと聞きましてな」
クレスはリヒャルトをじろりと一瞥(いちべつ)した。
「いわせていただくが、彼らは私と共に時間を旅した同志たち。彼らの意志は私の意志でもある。問答無用で彼らを斬るというのならば、まず私を斬ってからにしていただこう」
魔王ダオスを倒した伝説の英雄がいま、再び奇跡を起こそうとしていた。
圧倒的な迫力をもったクレスの声に、リヒャルトは続く言葉がない。それを見たルーングロムは、我が意を得たり、と勢いよく

「クレス殿がそうおっしゃるのならば是非もありませぬ。依存はありませんな、リヒャルト殿？」
といった。
「う、ううむ……しかし」
リヒャルトはまだ不満そうに粘ったが、クレスに
「リヒャルト殿。さきほどわが妻に働いた狼藉、あとで謝罪していただきますぞ」
といわれ、あっ、と叫んで頭を抱えた。
「も、もしやあの女法術師！」
満面土気色になってたたずむリヒャルトを、クレスはぎろりとにらんだだけで無言だった。そしてチェスターに
「さすがにこの歳になると馬を走らせるのも容易じゃないよ」
といって笑った。
「まったく、おいぼれやがって。おれが一瞬早く着いてなかったら、みんな穴だらけだったんだぜ⁉」
そういうチェスターに、アーチェとファルケンが駆け寄る。
「チェスター！」

「おやじ！」
チェスターはふたりの肩を抱いて、ぽんぽんと優しく叩いた。クレスが優しくそれを見守っている。そこに兵士の群から抜け出た法術師――ミントが寄り添い、いつしかそこには、かつての英雄たちが勢揃いしていた。正確にいえば、クラースの姿だけがここにはない。しかしすずは、この大団円を見守る精霊王クラースの気配を、たしかに感じることができた。
「行きなよ、お嬢ちゃん」
アーレスが優しくすずの背を押した。
「行って泣いてこい。お嬢ちゃんはそれだけのことをやったんだ」
すずは、おずおずと一歩を踏み出した。
仲間たちの姿は、いつのまにかあふれ出した涙でかすんで見えた。涙を通してみると、そこにいるかつての仲間たちは、あのころとなにも変わっていないように見える。
――わたしはなにを恐れていたんだろう？
すずは思った。あのユグドラシルの下で確信したことは、やはり真実だったのだ。
なにも変わりなどしなかったのだ。
いつのまにか、クレスが、ミントが、チェスターが、アーチェが、ファルケンが、すず

を見つめている。
「なあ、すずちゃん？」
チェスターがいった。
「すっかり爺さんになっちまったけど、泣きたいときに貸してやる胸ぐらい、まだあると思う。そうだろ？」
すずは駆けた。
そして仲間たちの胸へと飛び込んでいった。

## 六

＜時間の剣＞をめぐるこの冒険を、正確に記した文献は残されていない。
ただ歴史書は、アセリア暦四三五六年にユークリッドの連合司令官リヒャルトが失脚し、歴史の闇に消えたことを語るのみである。自殺とも、暗殺ともいわれている。
四三五七年には、アルヴァニスタ・ミッドガルズ体制が確立。ミッドガルズのヴァルター王子とアルヴァニスタのマルガレーテ姫の結婚により、ミッドガルズ大陸はその後百年に渡る安定期を迎えることとなる。ルーングロムは四四二四年に事故で命を落とすまで、

長年に渡ってこの安定期を支えた——。

冒険に携わった戦士たちのその後は、このように伝えられている。

首斬りアーレスはしばらくミゲールに滞在し、ある日ふらりと旅に出たきり二度と戻らなかった。その後の彼を知る者はいない。アーレスが旅立った朝、ミゲールの中央広場には、彼の呪われた運命を断ち切って役目を終えた斬首刀が突き刺さって、朝日に輝いていたという。いまでもこの剣は、記念碑としてミゲールの広場で見ることができる。

ファルケン＝バークライトは、ミント＝アドネードのあとを継いでミゲールの教会の司祭となった。エルフの血を引く神官の誕生はさまざまな波紋を呼んだが、それでもファルケンの優しさは徐々に周囲に認められ、最終的には、ファルケンはユークリッド正教会の大司教まで上り詰めた。ファルケンの存在が、元来友好的とは言い難かったエルフ族と人間をつなぐ掛け橋となったのはいうまでもない。

アーチェ＝クラインは、伴侶チェスターの死を看取ってから、ミゲールを去った。しかし時折、誰もが忘れた頃にひょっこりとほうきに乗ってミゲールに戻り、みなを驚かせたという。伝説によると、その後、別の世界に渡って冒険を繰り広げたともいわれる。

クレス＝アルベインは最後のときまで、世界の平和と安定の守護者として生きた。臨終

の言葉は「まったく、ミッドガルズはなっておらんよ」だったといわれている。そしてクレスの傍らには、いつも穏やかな笑みを浮かべてつきそうミント＝アドネードの姿があった。

藤林すずは――。
すずの消息がいちばんはっきりしていない。
伊賀栗の里が、ある日忽然と水鏡ユミルの森から消滅してしまったからである。
土地ごと異次元に吹き飛ばされたという人もいるし、誰も知らないどこかに移り住んだのだという人もいる。全員が忍者をやめて、ばらばらに普通の町に散っていったのだという人もいる。

最後にひとつ、興味深い説を紹介して結びにかえよう。
ファルケン＝バークライト大司教の妻である、黒髪の女性についての噂だ。
その女性はひかえめな性格で、公の場に出たり近所づきあいをすることを好まなかったが、ときおり夕方の市場などでその姿を見た人たちは、みな、そろって彼女の美しさに見とれたという。そして、その目に宿る優しいひかりを見て、遠い昔に忘れてしまったなに

かを思い出すのだ。
人々は自らに問う。
あのひかりはなんなのだろう、と?
答えを求めようともう一度見ると、その女性の姿はいつもそこにはない。
ひっそりとした静寂にただ黄昏だけが満ち、ものうい夜の気配が風に乗って吹いているだけである。

(テイルズ　オブ　ファンタジア　魔剣忍法帖・完)

あとがき

1．この本の内容のおはなし

ムービックゲームコレクション読者のみなさま、ご無沙汰しております。金月龍之介でございます。

表紙に業界初の試みが施された（さあ、買って確かめてみよう！）『てきぱきわーきん★ラブ』から1年。私、なにをして糊口をしのいでいたかと申しますと、ゲームの物語設定やドラマCDの脚本などを書いていたわけであります。

そのなかのひとつに『テイルズオブファンタジア』というドラマCDがありました。そして、このCDの巻末に付属しているミニドラマ＝『ふじばやしすずのにんじゃにっき』を膨らませて小説化したものが本作、『魔剣忍法帖』でございます。

忍者少女藤林すずを主人公に、アーチェを筆頭とするお馴染みのメンバー、そしてオリジナルの素敵な面々が、＜時間の剣＞をめぐって展開する冒険活劇。主人公と一緒になってどきどきはらはらしていただけること、いろいろな仕掛けに膝をたたいておどろいていただけることを念頭に、根性入れて書きました。どーうですかお客さん！

ちょっとだけドラマCDとリンクしたエピソードも入れてあります。P228とかP285とか……。まだの方はそちらも聴いてみてもらえるとありがたいです。

2．もうちょとっつっこんだ内容のおはなし
ノベライズというのは、特殊なものです。
『原作に忠実であること』が至上命題としてあるため、1しかない原作のエピソードを10にまで拡大して、しかもその拡大は水増し以外のナニモノでもな〜い、というようなコトを、苦し紛れにしてしまいがちです。ゆえに、「ふーん、こんなこともあったんだ。ま、読む前からなにもかも予想してたとおりだけどネ。とにかくアーチェとチェスターが出てるからいいや！」的な、いわゆるひとつのぬるま湯の中の放屁、あるいは朝刊に載っているヒトコマ時事漫画……そんな、一日経つと買ったことすら忘れて思わず同じ本を二冊本棚に揃えてしまうような果てしなく浅〜い内容になってしまうというのが現状です。そして、そういった状況に書き手や編集者が慣れゆき、最終的には、キャラクター一同が温泉旅行でイエーイ（ポロリもあるよ）とか、平成現代に時空転移してワーオ（自動車見てモンスターだと思ったりして）とか、そういったノベライズがズラリ本棚に勢揃い！　と相成ります。
今回は原作を作られたナムコ様の寛大なお許しをいただき、本編に負けないくらいスケールのでかい、物語らしい物語をやらせていただきました。普通だったら許してもらえないくらいのことをやってしまっていると思います。あとは、読者の皆様がそれを許してくださるかどうか……それだけが心配です。

3．ぜんぜん内容に関係ないおはなし
ライターの使命は、厳然として『出版社さんの求める原稿』を書くことであります。

偉い先生となれば別ですけれど、一般的に偉い先生はノベライズは書かないですよ、ええ。たとえば、「温泉の話を書け！　もちろんポロリも入れてな……」と出版社さんに依頼された偉くないライターさんが、ポロリを書かなかったとします。その場合、代償としてライターさんはお仕事をもらえなくなってしまいます。「いやあ、ポロリは良くないッスよ。ペロリでいきましょう！」などと意見などをしようものなら「いうことを聞かないうるせえ野郎だ」ということになります。うーん、思わずポロリとする話ですね！（笑うところです）

僕もプロです。同人誌で仲良しこよしをやっているわけではないので、そうした出版社さんに対してどうこう思う気持ちは、これっぽっちもありません。だって僕、偉い先生じゃないんだもの。

偉くなりたいです。

偉くなる旅に出ます。

しばらくお目にかかれないかもしれませんが、またいつか、近い未来に本屋さんで名前を見かけることがありましたら、立ち読みでも結構ですのでご覧になってください。そして購入に値するとご判断なさったら、おうちに連れて帰ってあげてください。

再見！

金月龍之介

**金月龍之介**（きんげつ・りゅうのすけ）

1970年生まれ。スタジオピスタッチ所属。小説、脚本、ゲームデザインなどで生計を立てる、よくいえばマルチライター。悪く言えば何でも屋。真ん中を取ってマルチ屋さんでどうですか、お客さん？　お仕事に『熱血専用!』（ホビージャパン／ゲームデザイン）、『虹色町の奇跡』（ムービック／小説）、『テイルズ オブ ファンタジア』（ムービック／ドラマCD脚本）『ダークソリッド』（テイジイエル／世界設定）など。